

宮之前遺跡

農村地域防災減災事業（農村灾害）
指宿地区宮之前避難路建設に伴う発掘調査報告書



令和4年（2022）
指宿市教育委員会

序

本書は、平成30年度に実施した宮之前遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。宮之前遺跡は昭和55・56年に発掘調査が行われ、古墳時代後期の竪穴建物跡や土器集中廃棄所が確認された集落遺跡です。調査時に検出された建物跡は、時遊館 COCCO はしむれの常設展示内で復元され、多くの市民の方々にご覧いただいているところです。

本報告書では、開聞岳の火山噴出物である紫コラ火山灰によって被害を受けた畠跡や古墳時代後期の土器集中、土坑などが確認されました。なかでも、指宿市で最北の紫コラ火山灰による火山災害遺跡の発見は、これまで考えられてきた災害範囲を大きく広げるものであり、当時の耕作技術や規模などを比較・検討することを可能にしました。また、紫コラ火山灰上層からは10世紀代に位置づけられる遺物が多く出土しています。このことから、火山災害から復旧・復興までの人々の生活環境の変化を捉えることができる数少ない遺跡として位置づけられます。

本成果が、宮之前遺跡のさらなる理解につながり、指宿市の文化財が市民の方々に保護・活用されることを祈念いたします。

令和4年3月

指宿市教育委員会

教育長 吉元 鈴代

例言

1. 本書は鹿児島県指宿市西方に所在する宮之前遺跡の発掘調査報告書である。起因事業は「農村地域防災減災事業（農村災害）指宿地区宮之前避難路」である。
2. 発掘調査は平成30年7月11日から10月31日まで実施した。
3. 発掘調査は指宿市教育委員会が実施し、松崎大嗣が担当した。
4. 報告書作成主体は指宿市教育委員会で、報告書作成は松崎が担当した。
5. 本書の編集は松崎が行った。遺物実測は、上田洋子、小園有紀が行い、一部を株式会社大信技術開発鹿児島営業所および株式会社イビソク鹿児島営業所へ委託した。遺物写真は松崎が撮影した。
6. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
7. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記の中で復元によるサイズは（）をつけた。
8. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
9. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
10. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館 COCCO はしむれで保管し、活用する。宮之前遺跡の遺物注記の略号は「MNM」である。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査日誌抄	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 基本層序	13

第3章 調査成果

第1節 発掘調査の概要	15
第2節 1層の出土遺物	15
第3節 4層の調査	15
第4節 6層の調査	31
第5節 古墳時代の調査	33

総括

第1節 紫コラ火山灰直下の畠跡	81
第2節 古墳時代の軽石製品について	82

挿図目次

図 1 指宿市の位置	4
図 2 指宿市の火山地形	5
図 3 指宿市北部の遺跡	6
図 4 水迫遺跡平面図	7
図 5 大渡遺跡出土遺物	8
図 6 橫瀬遺跡 2号住居跡出土遺物	9
図 7 敷頭遺跡 3号建物跡	10
図 8 今和泉島津家墓所	12
図 9 調査区配置図	16
図 10 調査区配置図 2	17
図 11 調査区平面図	18
図 12 1層出土遺物	18
図 13 0区土層断面図	19
図 14 0区土層断面図	20
図 15 1区土層断面図	21
図 16 2区土層断面図	22
図 17 2区土器集中遺物出土状況図及びピット断面図	23
図 18 2区土器集中出土遺物 1	24
図 19 2区土器集中出土遺物 2	25
図 20 4層出土遺物 1	27
図 21 4層出土遺物 2	28
図 22 4層出土遺物 3	29
図 23 4層出土遺物 4	30
図 24 4層出土遺物 5	31
図 25 0区畠跡平面図と出土遺物	32
図 26 0区畠跡斜間の火山灰堆積状況	33
図 27 SK1 遺物出土状況図	34
図 28 SK1 出土遺物 1	35
図 29 SK1 出土遺物 2	36
図 30 SK1 出土遺物 3	37
図 31 SK1 出土遺物 4	38
図 32 SK1 出土遺物 5	39
図 33 SK1 出土遺物 6	40
図 34 SK1 出土遺物 7	41
図 35 SK1 出土遺物 8	43
図 36 SK1 出土遺物 9	44
図 37 土器集中遺物分布図	46
図 38 0区土器集中出土遺物 1	47
図 39 0区土器集中出土遺物 2	48
図 40 0区土器集中出土遺物 3	49
図 41 0区土器集中出土遺物 4	51

图 42	0区土器集中出土遗物 5	52
图 43	0区土器集中出土遗物 6	54
图 44	0区土器集中出土遗物 7	55
图 45	0区土器集中出土遗物 8	56
图 46	0区土器集中出土遗物 9	57
图 47	0区土器集中出土遗物 10	58
图 48	0区土器集中出土遗物 11	59
图 49	0区土器集中出土遗物 12	60
图 50	8层出土遗物 1	62
图 51	8层出土遗物 2	63
图 52	8层出土遗物 3	64
图 53	8层出土遗物 4	65
图 54	8层出土遗物 5	66
图 55	8层出土遗物 6	67
图 56	8层出土遗物 7	68
图 57	8层出土遗物 8	69
图 58	8层出土遗物 9	70
图 59	8层出土遗物 10	71
图 60	8层出土遗物 11	72
图 61	8层出土遗物 12	73

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

とったうえで、調査を実施した。

宮之前遺跡範囲内で、鹿児島県南薩地域振興局によって「農村地域防災減災事業（農村防災施設整備）指宿地区」計画が立案された。指宿地域の中でも宮之前地区では赤崎集落と宮之前営農研修センター間の緊急避難路を建設する計画であり、当避難路は宮之前遺跡の遺跡範囲のほぼ中央を横断する形で建設される予定であった。

そこで、県南薩地域振興局に対して文化財保護法第94条第1項による届出書提出を依頼し、避難路建設予定地内において確認調査を実施した。

事前確認調査は平成28年7月15日から7月21日まで実施した。確認調査では、避難路建設範囲内において、5箇所のトレンチを設けたが、5TRに関しては車両の往来があったことから隣接する地点を選定した。発掘調査は、各地点幅1.5m～2m、長さ2m程度の調査区を設け、重機による掘削を行った。遺構・遺物の検出があった場合は、人力による掘削に切り替え、遺物出土位置や高さの記録を行った。

調査の結果、1TR以外すべてのトレンチにおいて、古墳時代に帰属する遺物の出土がみられた。また、2TR、5TRにおいては、地表面から1～1.5mほどの深さで貞觀16年3月4日（西暦874年3月25日）に噴火した開聞岳の火山噴出物（通称：紫コラ火山灰）の検出が見られ、2TRではブロック状に、5TRでは明確な層として確認することができた。また、5TRでは紫コラ上層から掘り込まれた土坑も確認された。

遺物は、いずれも紫コラ火山灰層より下位層から出土しており、九州南部の古墳時代の土器様式である成川式土器であった。さらに確認調査の出土品ではないが、周辺からは須恵器片が採集されている。

以上の調査成果から、本調査で対応すべき範囲の絞り込みを行い、2～3TR周辺を集中的に調査する計画を立てた。5TR周辺については、建設掘削深度が浅く、遺物包含層まで及ばないと判断したため、調査対象からは除外した。

以上の計画をもとに、平成30年度に本調査を実施することを申し合せ、宮之前地区、赤崎地区的集落へ調査工程を伝えるとともに、周辺の地権者への了解を

第2節 調査の組織

（平成28年度）

事業主体者 南薩地域振興局農林水産部農村整備課

調査主体者 指宿市教育委員会

調査責任者 指宿市教育委員会

教育長 西森 廣幸

調査担当組織員 指宿市教育委員会

教育部長 長山 君代

社会教育課長 中摩 浩太郎

主幹兼管理係長 迫田 優子

管理係 主査 園田 哲士

主幹兼社会教育係長 鴨崎 一郎

社会教育係 主査 山田 里佳

社会教育係 主査 内木場 智

社会教育係 主任 水溜 曜

社会教育係 主任 上川路 隆介

社会教育係 主事 新川 龍

文化係長 上園 浩司

文化担当主幹 鎌田 洋昭

文化係 主事 川野 さおり

文化係 技師 恵島 瑛子

文化係 技師 松崎 大嗣

（平成30年度）

事業主体者 南薩地域振興局農林水産部農村整備課

調査主体者 指宿市教育委員会

調査責任者 指宿市教育委員会

教育長 西森 廣幸

調査担当組織員 指宿市教育委員会

教育部長 下吉 一宏

社会教育課長 野元 伸浩

社会教育課参事 中摩 浩太郎

主幹兼管理係長 迫田 優子

管理係 主査 山田 里佳

管理係 主査 内山 正人

主幹兼社会教育係長 村元 重夫

社会教育係 主査	内木場 智	作成責任者 指宿市教育委員会	
社会教育係 主査	上川路 隆介	教育長	吉元 鈴代
社会教育係 主査	吉原 一幸	作成担当組織員 指宿市教育委員会	
社会教育係 主事	坂元 里沙	教育部長	鶴庭 謙作
主幹兼文化係長	上蘭 浩司	歴史文化課長	中摩 浩太郎
文化担当主幹	鎌田 洋昭	主幹兼文化施設管理係長	上村 真史
文化係 主任	西牟田 瑛子	文化施設管理係 主査	内山 正人
文化係 技師	松崎 大嗣	主幹兼文化財係	鎌田 洋昭
文化係 臨時の任用職員	上田 洋子	文化財係 主任	西牟田 瑛子
		文化財係 主任	松崎 大嗣
		文化財係 技師	新垣 匠
発掘調査作業員		文化財係 主事	西 恵美里
堀口勇太 下柳田修子 田上修 谷口睦義 福崎和代		文化財係 臨時の任用職員	上田 洋子
西村千尋 上拂初子 片野田朋子 湯ノ口美和子 豊田		文化財係 整理作業員	小園 有紀
町子 東郷美代子 川尻理知子 堂園綾 鶴之園幸一			
浜崎昭裕			

(平成 31・令和元年度)

事業主体者 南薩地域振興局農林水産部農村整備課

作成主体 指宿市教育委員会

作成責任者 指宿市教育委員会

教育長

作成担当組織員 指宿市教育委員会

教育部長

西森 広幸

(令和 3 年度)

作成主体 指宿市教育委員会

作成責任者 指宿市教育委員会

教育長

吉元 鈴代

作成担当組織員 指宿市教育委員会

教育部長

鶴庭 謙作

教育部参与兼歴史文化課長

中摩 浩太郎

主幹兼文化施設管理係長

上村 真史

文化施設管理係 主査

内山 正人

文化財係長

鎌田 幸博

文化財係 主任

西 恵美里

文化財係 主任

西牟田 瑛子

文化財係 主任

松崎 大嗣

文化財係 技師

新垣 匠

文化財係 臨時の任用職員

上田 洋子

主幹兼社会教育係長

社会教育係 主査

社会教育係 主査

社会教育係 主事

社会教育係 主事

社会教育係 主事

主幹兼文化係長

文化担当主幹

文化係 主任

文化係 主任

文化係 技師

文化係 臨時の任用職員

文化係 整理作業員

整理作業員

(令和 2 年度)

作成主体 指宿市教育委員会

第3節 調査日誌抄

(平成 30 年 7 月)

11 日 レベル移動

12 日 株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店(以下、埋文サポート)と打ち合わせ

現場事務所の整地

13 日 宮之前公民館長と打ち合わせ

14 日 ブレハブ搬入

17 日 現場開始、道具搬入、埋文サポートによる杭打ち、メッシュ作成

18 日 表土剥ぎ、土壟作り

- | | |
|----------------------------------|----------------------------|
| 19日 先行トレーンチ掘削 | 12日 雨天のため土器洗い |
| 20日 寒冷紗用鐵管打ち込み、重機掘削 | 19日 土器集中の掘り下げ |
| 23日 紫コラ上面検出、全景写真撮影 | 20日～21日 雨天のため土器洗い |
| 24日 指宿商業高校教諭の研修、3層の掘削 | 25日 土器溜まりの掘削 |
| 25日 3層掘削、開元通宝出土 | 26日 壁清掃、写真撮影
現地視察 成尾英仁氏 |
| 26日 3層掘削、先行トレーンチ掘削 | 27日 土器溜まりの掘削。遺物点上げ、台風養生 |
| 31日 調査区の測量、遺物点上げ、昼から雨のため
土器洗い | 28日 時遊館 COCCO はしもれで作業 |

(平成30年8月)

- 6日 遺物取り上げ、紫コラの掘削
- 7日 紫コラの掘削、6層上面の清掃
現地視察 野元社会教育課長
- 9日 紫コラの掘削、6層上面の清掃
- 10日 先行トレーンチの掘削
- 11日～15日 盆休み
- 16日 SK1の検出、清掃、写真撮影
- 17日 SK1の掘削
- 20日 SK1の掘削
- 21日 埋文サポート0区の設定
- 22日 台風19号接近のため休み
- 23日 壁清掃、0区表土剥ぎ
現地視察 ラ・サール高等学校 永山修一氏
- 24日 SK1ベルト除去、大雨のため土器洗い
- 27日 現地視察 鹿児島国際大学 鐘ヶ江賛二氏
- 28日 畠跡の検出
- 29日 現地視察 鎌田文化担当主幹
畠跡の歓間に堆積した紫コラ火山灰の除去
- 30日 大雨のため土器洗い
現地視察 鹿児島国際大学 大西智和氏
現地視察 南薩地域振興局農村整備課 鎌田
学氏
- 31日 故間の測量
現地視察 市耕地林務課職員

(平成30年9月)

- 3日 排水作業、清掃、台風21号接近のため道具
撤収
- 4日 故間4～6の掘削、雨のため土器洗い
- 5日 故間の埋土土層断面図の作成、ベルト撤去
- 6日 故間の測量、2区の設定
- 7日 古墳時代包含層の掘削
- 10日 先行トレーンチの掘削、壁清掃
- 11日 青コラ検出、土器集中の検出

(平成30年10月)

- 1日 台風24号による文化財被害パトロール
- 2日 排水作業、清掃
- 3日 2区の表土剥ぎ
- 5日 2区の表土剥ぎ、台風25号接近による雨
- 9日 2区3層の掘り下げ、SB1の検出
- 10日 3層の掘り下げ
- 11日 2区清掃、写真撮影
- 12日 現地視察 中摩社会教育課参事
土層断面図作成
- 16日 3層掘り下げ
- 17日 現地視察 中摩社会教育課参事
SB1写真撮影、遺物取り上げ
- 18日 6層の掘り下げ、SK1の検出
- 22日 SK1の掘り下げ、写真撮影
- 23日 SK1遺物取り上げ
- 24日 SK1遺物取り上げ
- 25日 壁清掃、土層断面写真、図面作成
- 26日 全景写真撮影
- 29日 道具の撤去

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置している。地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴うカルデラ内にほぼ収まる。約5万3千年前には、池田湖の東側に位置する清見岳が大きな噴火を繰り返した。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。

指宿市開聞地区から南洋を臨むと、硫黄島・竹島を目視することができる。この二つの島は約7,300年前に噴火した鬼界カルデラの北縁であり、指宿市から約50kmの距離に位置する。鬼界カルデラから噴出した「幸屋火砕流」は、指宿市新西方の幸屋で発見したことからこの名がついている（宇井 1967）。

その後、新期指宿火山群（池田火山）が活発な火山活動を始めた。なかでも、約6,400年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は、指宿市全域の直接的な地形形成の要因となっている。池田火山が噴火した直後に松ヶ窪、池底、鰐池、成川、山川港が連続して噴火し、「爆裂火口」と呼ばれる一直線上に並ぶ火口を形成した。

さらに、池田火山の南西に位置するトロコニーデ型の開聞岳は、約4,700年前から約3,700年前に活動を開始した。開聞岳噴出物のうち、旧指宿市域では主に4回分の開聞岳噴出火山灰層を確認することができる。有史時代の噴火についてはいくつかの史料に記録されており、西暦874年（以下「874年」と表記）と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開聞岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾から海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に位置する。

扇状地上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ數m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大



図1 指宿市の位置

正13年に国史跡に指定された範囲の中央にも、上記のようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には遺物包含層が露出しており、古墳時代の成川式土器や弥生土器、まれに縄文土器が表採される。

第2節 歴史的環境

（1）旧石器時代

水追遺跡 指宿市の北西部にある標高401mの清見岳からゆるやかに北東へのびる山裾の東側端部に位置する。眼下に鹿児島湾を見下ろす標高約126mの尾根の東南縁辺部で発見され、平成5年度に鹿児島県教育委員会が行ったサンオーシャンリゾート開発に伴う分布調査で周知化された。平成8年には指宿市教育委員会により

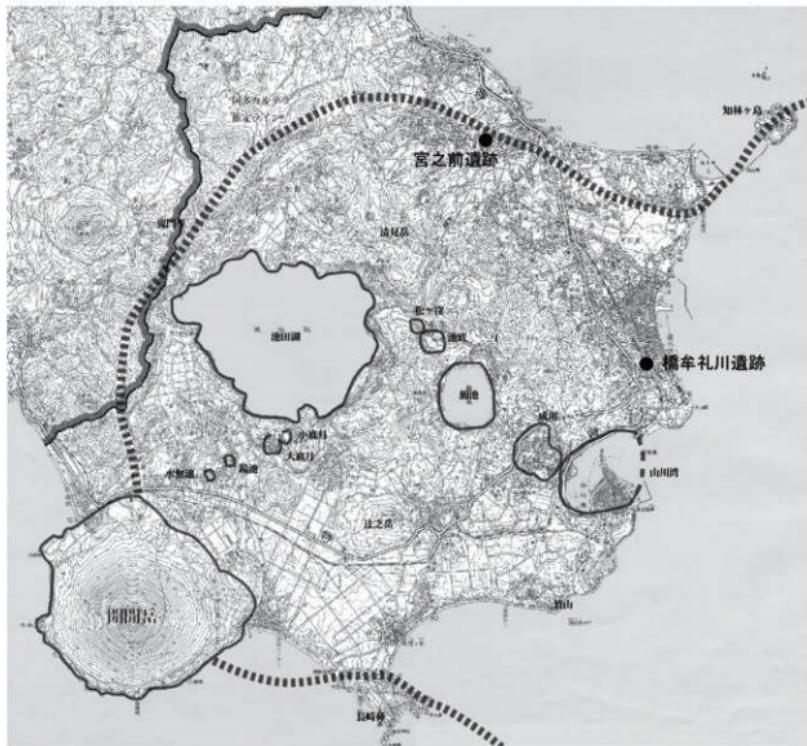


図2 指宿市の火山地形

広域営農団地農道整備事業に伴う確認調査が行われ、縄文時代早期の遺構や遺物を確認した。発掘調査は平成11年度から14年度まで実施され、地層は18層41細分層を確認している。第1調査区では、第5・6層から縄文時代早期の集石や舟形配石炉、落し穴、柱穴等の遺構が確認された。また、岩本式土器や石皿、磨石、石鏃等の遺物が出土した。第7層からは縄文時代草創期の集石や舟形配石炉、落し穴、柱穴等の遺構が検出された。また、岩本式土器の古段階の貝殻文系円筒形土器が出土し、「水迫式土器」と命名された。また、後期旧石器時代に位置づけられる遺構が確認されている。これらの遺構は、幅16m前後の狭い尾根の平坦部に集中していた。竪穴状遺構、道路、炉跡はいずれも互いに重なりをもたず、同じ種類の遺構は切り合う状況がある。これは、こ

こで生活した人々が集落内の施設配置を考えた上で、空間を意識的に利用し回帰的な生活を行っていた結果と考えられる。

小牧3A遺跡 指宿市北部の標高65mの阿多カルデラの北端丘陵に立地する。国営畠地総合土地改良事業に伴って調査を実施している。旧石器時代の出土遺物は、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期に分けられ、大きく2つの石器文化期があったと考えられる。先行するナイフ形石器文化期の遺物は、ナイフ形石器98点・台形石器112点、薄片尖頭器22点、両面加工尖頭器5点、三稜尖頭器20点、スクレイパー18点、石核50点などがみられる。細石刃文化期の遺物は細石刃、細石核、楔形石器などが出土している（長野2005）。



図3 指宿市北部の遺跡

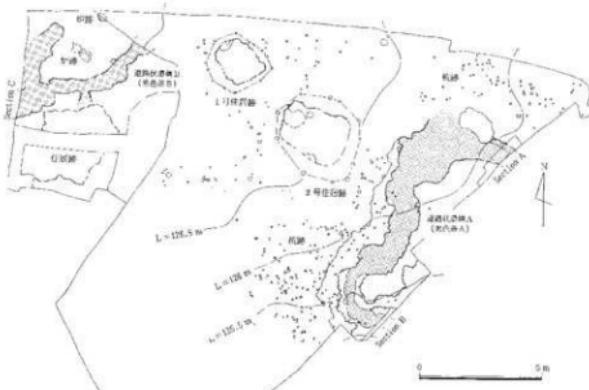


図4 水追遺跡平面図

(2) 縄文時代

岩本遺跡 上記の小牧3A遺跡と小河川で侵食された狹小な谷によって隔てられた断層海岸の先端部に立地する。岩本地区県営畑地灌漑事業に伴って発掘調査が実施されている。発掘調査では岩本1~4類土器を中心に隆帶文土器や押型文土器、打製石鏃、磨製石鏃、石匙、局部磨製石槍などが出土している。隆帶文土器は、口唇部を巡るよう口唇部とその下に隆帯を貼り付け、貝殻で文様を付けるものと、短い隆帯を縱方向あるいは横方向に貼り付けるもの、胴部に1本隆帯を巡らし貝殻で文様を付けるものがある。岩本1~4類土器はすべて円筒深鉢形で、平底になる。最大径は口縁部にあり、底部から口縁部にかけて開きながら直線的に立ち上がる形を呈する（長野2005）。

大渡遺跡 山川湾を見渡す台地上に立地する。指宿式や市来式土器が出土する縄文後期の遺跡であり、昭和32年の第一次および第二次の調査で4~5体分の縄文人骨が出土している。出土遺物は市来式土器が多く見られる。なかでも、奄美群島でみられるような注口土器と尖底土器が出土していることが特徴的で、南西諸島との関連性をうかがえる資料として注目される。

南摺ヶ浜遺跡 指宿市十二町及び湯の浜に所在する。遺跡は、指宿市街地海浜部に面した標高8mの海岸段丘上にあり、山裾から海岸へと傾斜する火山性扇状地の端部に位置する。橋牟礼川遺跡の南東約500mの位置である。平成5年に社員寮建設予定地の発掘調査において、宇宿上層式土器が出土した。宇宿上層式土器は、トカラ列島中之島付近を北限に沖縄本島まで分布する土器である。本遺跡で出土した宇宿上層式土器が、南西諸島からの搬入品か、当地で製作された土器かについては判別し難い。しかし、胎土に着目すると、南西諸島の宇宿上層式土器に見られる白色粒子（石灰あるいは貝殻片？）がほとんど含まれていない点を重視すれば搬入品である可能性は低いと考える。いずれにせよ縄文時代晩期に南西諸島との文化交流があったことを語る遺物であり、南部九州本土における南島土器の存在の可能性を大きく広げた発見となった。今後の資料の増加が期待されるとともに、大渡遺跡の尖底土器の存在も合わせて注意すべき資料である。

(3) 弥生時代

横瀬遺跡 指宿市西方横瀬に所在し、指宿市北部の台地上に位置する。県営畑地総合土地改良事業に伴い、発

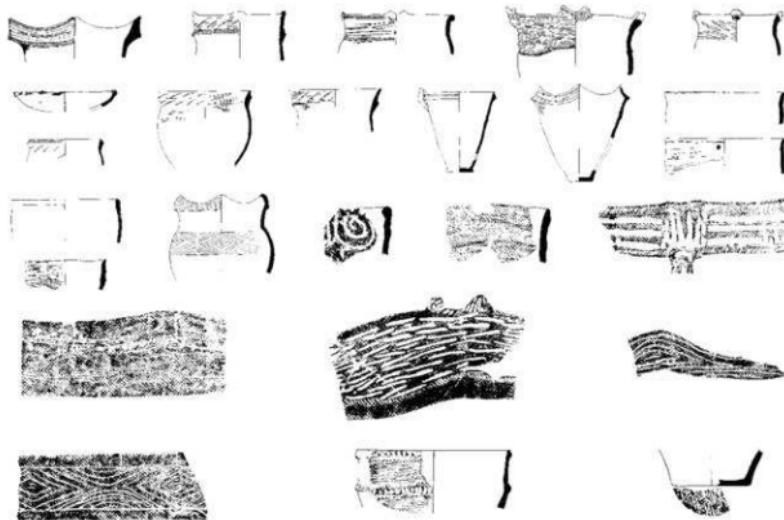


図5 大渡遺跡出土遺物（縮尺不同）

掘調査が実施されている。発掘調査では方形の整穴住居跡が切り合う形で12基検出されている。2号住居からは多量の土器が出土しており、弥生時代後期に位置づけられる高付式土器に加え、多条突縁を有する長頸壺などが確認できる。また、これらの土器に共作する形で、小型仿製鏡が出土している。

南丹波遺跡 指宿市十二町に所在し、橋牟礼川遺跡に東隣する遺跡である。丹波小学校の校舎建て替えに伴い発掘調査が実施された。発掘調査では花弁形住居跡を含む整穴住居跡を14基確認した。これらの住居跡は2つの群に分かれており、その間には土器集中廐棄所が確認されている。土器集中廐棄所の出土遺物を見ると弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる壺や壺、高杯などが出土している。南丹波遺跡は橋牟礼川遺跡と隣接している集落であり、橋牟礼川遺跡が古墳時代後期を中心とする建物跡が多く検出されていることから、南丹波遺跡から集落の中心が橋牟礼川遺跡へ移行した可能性も考えられている。

(4) 古墳時代

橋牟礼川遺跡 橋牟礼川遺跡は大正5年に指宿出身で当時旧制志布志中学校（現県立志布志高等学校）の生徒である西牟田盛健によって遺物が表採されたことを契機に遺跡の存在が明らかとなった。遺物は現在も跡跡公園内を流れる橋牟礼川の露頭で採集されており、この小河川が遺跡を東西に横断する形で流れていることから、遺跡発見につながった。その後、喜田貞吉が山崎五十鈴に依頼するかたちで、大正6年に発掘調査が行われた。

大正7・8年には京都帝國大学の濱田耕作、長谷部言人らによる本格的な学術調査がおこなわれた。この調査では、火山灰層を挟んで下層から縄文土器、上層からは弥生土器が出土した。この成果から、弥生土器よりも縄文土器が古い時代のものであることが国内で初めて実証された遺跡として知られる。大正13年には、国市指定史跡に指定され、昭和53年には、史跡保存のための2.36haの公有地化が完了した。

その後、国指定史跡に隣接する北西側の土地からJR指宿駅付近に至る範囲まで土地区画整理事業がおこなわれることとなつた。この事業に伴い、昭和61年から平

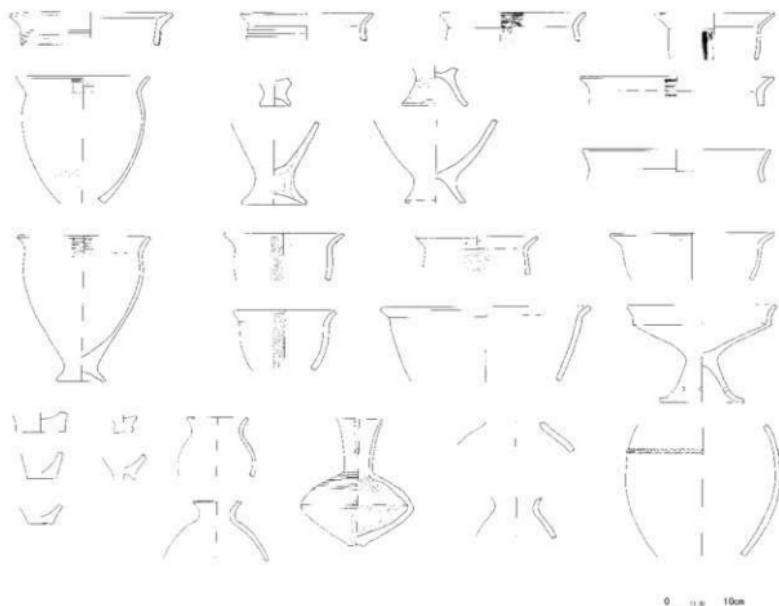


図6 横瀬遺跡2号住居跡出土遺物

成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分において発掘調査がおこなわれることとなった。

古墳時代の地層からは、150基を超える竪穴建物跡や貝塚、土器集中廐棄所が検出されている。遺跡範囲内において、道路建設予定部分のみを調査対象としているが、膨大な量の遺物が出土しており、現在も整理作業が続けられている。出土遺物のほとんどは、成川式土器と呼ばれる土器類で占められているが、須恵器や子持勾玉、青銅製鉈なども出土している。九州南部を代表する古墳時代集落として位置付けられる。

成川遺跡 指宿市山川成川に所在し、成川マール西部の山裾から鳴川へ向かって下る斜面上に位置する。弥生時代から古墳時代にかけての埋葬遺跡である。昭和32年に成川浜埋め立てのための土取り作業中に遺跡が発見され、昭和33年に国の文化財保護審議員によって学術

調査が行われた。また国道226号バイパス建設に伴う昭和55～56年の発掘調査が実施された。それにより、348体を超える人骨に加え、おびただしい量の土器や鉄製品が確認された。埋葬の形態は土壙墓と呼ばれるものであり、これらの埋葬施設の上部や周辺に上記出土遺物が供獻される形で出土した。また、土壙墓周辺には立石と呼ばれる板石が立てられた施設も確認されている。

令和元年度から鹿児島女子短期大学と鹿児島国際大学による発掘調査が実施されており、文化庁が調査した調査区の南部にも埋葬範囲が広がることが確認された。また検出された土壙墓は、弥生時代中期後半に噴火した暗紫コラを上層から掘り込む形で確認されている。

南摺ヶ浜遺跡 立地は上記の通り。ホテル社員寮の建設などに伴って調査が行われ成川遺跡と同様の土壙墓群が広がることがわかった。その後、南摺ヶ浜遺跡の範囲内で道路新設工事が計画され、鹿児島県によって調査が

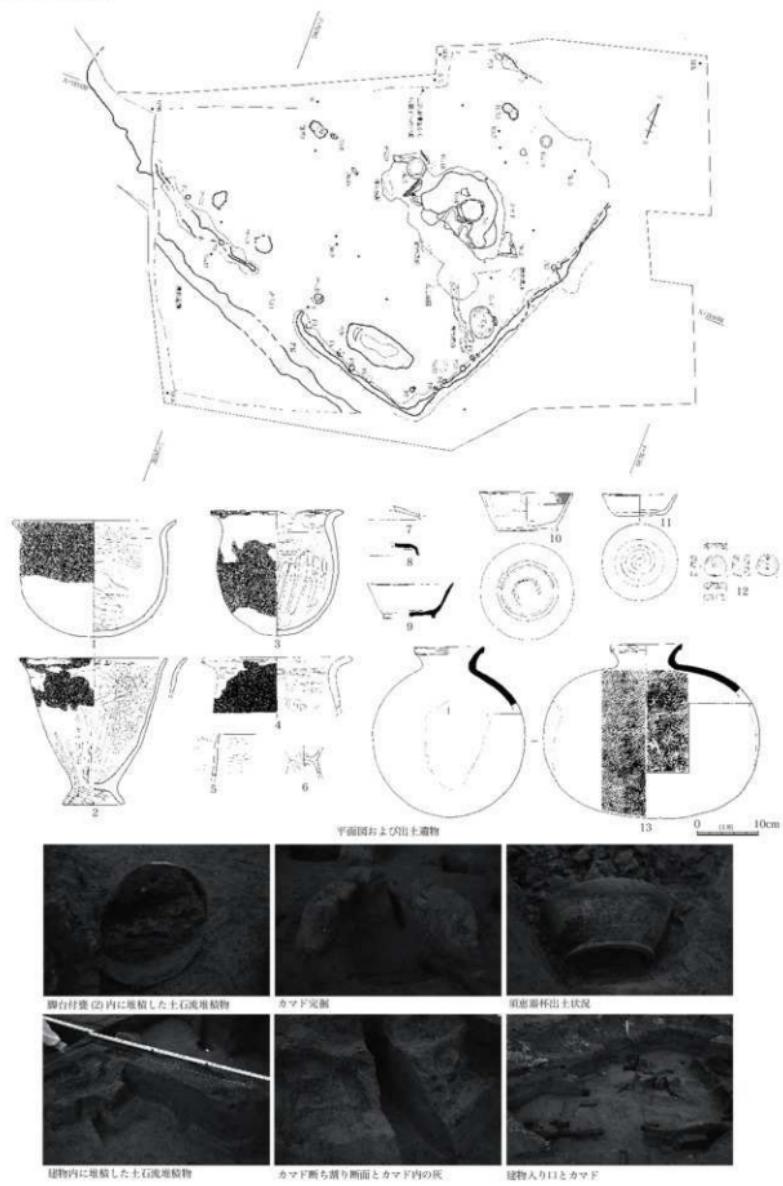


図7 敦領遺跡3号建物跡

行われた。この調査では土壌墓や立石に加え、土器棺墓や円形周溝墓が確認された。また、墓域からは多くの供獻土器や鉄製品が出土した。

弥次ヶ湯古墳 弥次ヶ湯古墳は、指宿市十町敷領一帯に広がる敷領遺跡地内から発見された。遺跡は山裾から海岸に向けて緩傾斜する海拔4~6mの火山性扇状地の末端部にある。平成8年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い、直径約17.5mの円墳が検出された。古墳は、現地表面から、わずか30cm前後の所に埋もれており、その大部分は、火山灰に埋没していた。調査区の西壁に接するかたちで墳丘の約1/2を確認することができた。残りは、生活道路となっている団地内の市道の下に埋没していたため、発掘できなかつた。そこで、地下レーダー探査で地形を把握し、円墳であることを確認した。残存する墳丘の高さは最大で約1.3m、周溝は、幅2m前後、深さ約40~60cmで、埋土からは、甕、鉢、壺、高杯、埴、ミニチュア土器など800点の土器片が出土した。埋葬施設については検出しえなかつたが、既に削平を受けた部分にあった可能性も考えられる。

弥次ヶ湯古墳の築造時期は、出土遺物の年代観より、5世紀後半から6世紀前半と推定される。古墳の「空白地帯」と呼ばれていた薩摩半島からの円墳の発見は、古墳分布の限界線を書き換えるとともに、古墳時代の薩摩半島の社会像に再考を迫る契機となつた。

(5) 古代

橋牟礼川遺跡 橋牟礼川遺跡は開聞岳の噴出物である青コラ火山灰、紫コラ火山灰によって被害を受けた火山災害遺跡として知られている。

青コラ火山灰は7世紀後半、紫コラ火山灰は貞觀16年3月4日(西暦874年3月25日)の火山噴火であることが示されており(成尾1992、永山1992、下山1992・1993)、古墳時代から平安時代へかけての生活様式や文化変容について、火山灰層という鍵層を用いた検討が可能となつてゐる。

特に紫コラ火山灰の被害については、掘立柱建物跡、貝塚、畠塚、河川などが火山噴出物だけでなく、火山噴火に伴う土石流堆積物によって埋没している状況などが確認されている。この状況が『日本三代実録』に記された内容と一致することから、文献の内容と災害内容を対比できる遺跡としても知られている。

敷領遺跡 指宿市十町に所在し、山裾から海岸に向

て緩傾斜する海拔4~6mの火山性扇状地の末端部にある。平成8年の公営団地建設に伴う発掘調査に伴い調査が行われた。発掘調査によって、貞觀16年3月4日(西暦874年3月25日)の開聞岳噴火によって埋没した水田跡が検出され、橋牟礼川遺跡と同様の火山災害遺跡であることが確認された。この時の火山性噴出物は紫コラと総称され、この下層からは掘立柱建物跡6棟、総柱の高床倉庫跡1棟、竪穴住居跡1基、杭列跡などの遺構群が確認されている。遺物は、古墳時代の成川式土器の伝統を色濃く残した壺形土器に加えて、須恵器、土師器、転用硯、「輪」・「智」と書かれた墨書土器、鉄製品等が出土している。鉄製品の中には、鉄製甲臺と呼ばれるものもあり、その形態と鉄製品表面に残る有機質の形状から亀トキに関連する遺物であると考えられている。この鉄製甲臺は、令和元年度の調査においても出土している。

平成7年度以降の開発に伴う調査や、学術調査によって中敷領地区では、建物遺構2基が検出されたことから、一带に居住域が広がっている可能性が指摘されている。

平成26年度には、中敷領地点において3号建物跡の発掘調査がおこなわれた。この建物は開聞岳噴出物によって埋没した状態で検出され、建物の中央付近には煙道をもたない造り付けのカマドや板石をコの字に組んだ石組炉などの調理施設が検出された。

平成30年度の調査では、3号建物跡の東側から幅10mを超える2状の溝跡が確認されている。溝内は紫コラ火山灰層2次堆積物で埋没しており、この下層埋土ではグライ土壤が確認された。この溝跡は居住域を区画する区画溝である可能性もある。

(6) 中世

松尾城跡 松尾城は、指宿市西方字城ヶ崎とその周辺を含めた丘陵上のエリアに所在する山城である。城の東側は絕壁となっていて、鍋江湾に面しているため、海域の性格もあわせもつといわれている。松尾城は、他の山城同様に複数の曲輪から成り立っており、どの曲輪の頂上も平坦に作り出されている。国道226号はちょうど曲輪同士を区切る空堀を通っており、また、JR指宿枕崎線が曲輪の間を走っている。

城内には防御用の土塁や武者走り、武者塹といった施設が名残をとどめ、大手門と思われる場所も推定されている。城の築城時期は、現段階でははっきりとはしていないが、指宿氏以来、指宿を治める武将が松尾城の城主となつた。鎌倉時代から室町時代にかけての城主は指

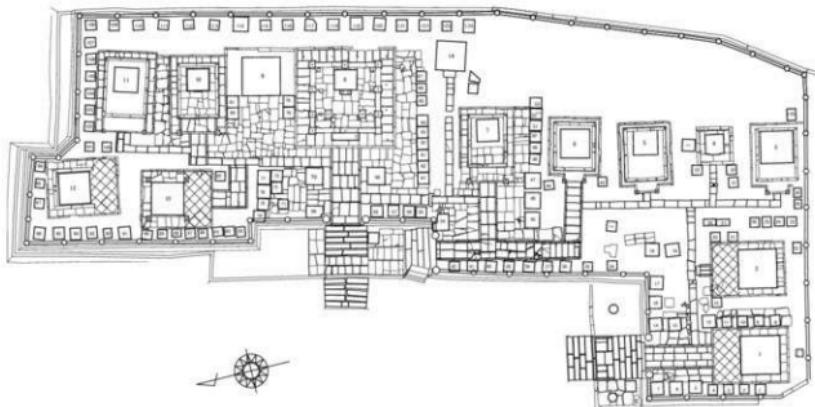


図8 今和泉島津家墓所

宿氏であったが、指宿を大隅守護の島津氏が領有してから、松尾城の城主は次々と変わっていく。

応永 16 年(1409)、指宿を領有していた島津元久が城代として阿多時成を松尾城に封じ、指宿氏は退去。その 3 年後には奈良氏が城番として入っている。しかし、奈良氏は島津久豊に倒されてしまう。文明 7 年(1475)には、島津久雄が松尾城に地頭として入ったが、島津氏が内紛を始め、文明 8 年(1476)に島津久雄らと対立していた島津忠昌が、福寛重清らに松尾城を攻め落とさせ、指宿は福寛氏の領地となった。

その後、指宿は再び島津忠昌の孫である勝久の領地となり、天文 6 年(1526)に地頭として伊地知重弦がおかれた。その後、頼姓の地頭を務めていた頼姓兼証が、天文 4 年(1535)に指宿を攻め、家来の津曲兼任を城代として指宿城(松尾城)に派遣。これ以降、天正 16 年(1588)に頼姓氏が守護職の島津氏によって他の領地に移動させられるまで松尾城の城主は頼姓氏の家臣が務めた。

(7) 近世

今和泉島津家墓所 指宿市北部に位置する岩本地区に所在している。墓地は東側と南側を市道に挟まれており、西側には南側市道につながる里道が通っている。東側市道の東には六地蔵塔が 3 基設置されている。また、今和泉島津家墓所の南側斜面上の狭い平坦地には、墓地が多

数置かれており、今和泉島津家の家臣及びその子孫の墓が多く含まれている。

今和泉島津家の元となる和泉家は、島津家 4 代当主忠宗の子、忠氏を初代とし、2 代忠直、3 代氏儀、4 代久親、5 代直久まで続いた。直久が応永 24 年(1417)の第二次川辺戦争で戦死したため断絶した。延享元年(1744)、島津継豊が弟の忠卿に、327 年ぶりに、断絶していた和泉氏を継がせ、今和泉家と称した。忠卿は、寛保 2 年 2 月 12 日に誕生した島津吉貴の次男である。同年 12 月に、指宿郡の内、小牧村、岩本村、西方村、頼姓郡の内、池田村、仙田村を割いて今和泉郷とし所領地とした。また、佐多郷炉山、伊作郷田尻村、飯野郷坂本村、串良郷岩広村を追加し、石高 1 万 5093 石となつた。

今和泉家島津は、初代忠卿、2 代忠温、3 代忠厚、4 代忠裔、5 代忠剛、6 代忠冬、7 代忠敬、8 代忠欽と続いた。今和泉島津家墓所には、初代から 6 代までの当主およびその親族が祀られている。墓石は五輪塔、宝霞印塔、家祠型墓石がみられる。近年の墓石の型式学的研究や源性和泉氏嫡流系団の再検討により、墓所内の墓石配列および基盤整備には複数のグルーピングができることが明らかになっている。

第3節 基本層序

宮之前遺跡の地層は、基本的に橋牟礼川遺跡や敷頭遺跡と類似する。そこで、両遺跡の基本層序をベースに記述する。掘削深度の関係から、9層以下の確認はできない。これらの地層は、池田カルデラ噴出物と開聞岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは、1991年に確認された橋牟礼川遺跡の標準層位をもとに述べる。

第1層 黒褐色土層（表土）

耕作土。都市計画事業によってシラスや砂利、礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。

第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が含まれている。旧耕作土でもある。

第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が含まれている。旧耕作土でもある。

第4層 黄褐色土層

10世紀代の遺物が出土する遺物包含層である。橋牟礼川遺跡や敷頭遺跡では確認できず、現在のところ指宿市北部のみで確認できる層である。

第5層a 紫灰色火山灰層（紫コラ）

平安時代に堆積した開聞岳噴出物層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから、下位の火山灰層を貞觀16年に、上位の第5a層を仁和元年の開聞岳噴出物に対比させる説もあるが、近年の地質学的調査の成果から、下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

第5層b 紫灰色火山灰層二次堆積物

次に説明する紫灰色火山灰層二次堆積物 第5層c（874年開聞岳噴出物）の二次堆積層で、水流作用で形成された層と考えられ、砂が多く混在し、クロスラミナが発達する。

第5層c 紫灰色火山灰層（紫コラ）

874年の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し、フォール・ユニットが認められる。第5層cの最下部には、2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが、これは貞觀16年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層cの厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一時堆積物を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開聞岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に扇跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）

7世紀第4四半期に比定される開聞岳噴出物層で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm程度堆積する。さらに、暗橙色土層を5～10cm程度挟み、1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代土器などのローリングを受けたものが検出される。

第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さは50cm～1m程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の搅乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされ

る。

第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扁状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）

弥生時代（山ノ口式土器段階）に降下した開聞岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積していることが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノ口遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノ口式土器を被覆していた事例がある。

第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粘度は小さい。

第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯文土器を包含する層で、小石が混じる。

第14層 赤褐色小石混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物が出土することがある。

第16層 黒褐色橙色バミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認されている。第14層から第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）

縄文時代後期の開聞岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成される。ブロック状に残存し当時低い部分には10～

15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5,700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では、池田火碎流堆積物は30m以上に達すると考えられている。

第3章 調査成果

第1節 発掘調査の概要

発掘調査を実施するにあたり、確認調査の成果を参考に、表土掘削は重機を用いて掘削を行った。確認調査では地表面から1.0m～1.5mの深さで紫コラ火山灰層を確認していること、過去の調査では紫コラ火山灰層の直上から遺物の出土が見られることなどから、地表面から70cmほどは重機掘削を行い、遺物の出土が見られた面から人力掘削に切り替えるという方法で、遺構・遺物の検出を行った。

調査の工程については、調査区周囲のオクラ畠の収穫関係や耕運機の乗り入れなどの日程を考慮して、調査区を3つのブロックに分けた。調査の順番として、1区→0区→2区の順に調査を行った。

1は青磁碗の口縁部片である。口縁部形態は外方に膨らみを持つもので、体部外面には蓮弁文がみられる。色調は黄土色に近い。

2は須恵器楕の口縁部片で、口縁部下にゆるやかな段がみられる。表面は摩耗している。

3は高台付の須恵器楕で、底径10.0cm、高台高0.5cmを測る。底部付近から大きく聞くことから大型の楕と考えられる。底部付近は非常に厚みがある。発色はやや黒ずんでおり、胎土には白色鉱物を含む。

4は舟形を呈した軽石製加工品である。a面右側面は欠損している。a面中央部は舟底のように丁寧に削られている。その面には、刀子のような工具で削られているものと考えられる痕跡が残されている。

5は鐵鏃の莖部片である。途中で屈曲している。

6は梢円形の鉄製品である。長軸で4.9cmを測る。断面はゆるやかなすり鉢状となる。

第2節 1層の出土遺物

以下からは重機による耕作土（第1層）掘削時に、出土した遺物である（図12）。

第3節 4層の調査

平安時代に該当する層は第5層（紫コラ火山灰層）を



上空から見た宮之前遺跡

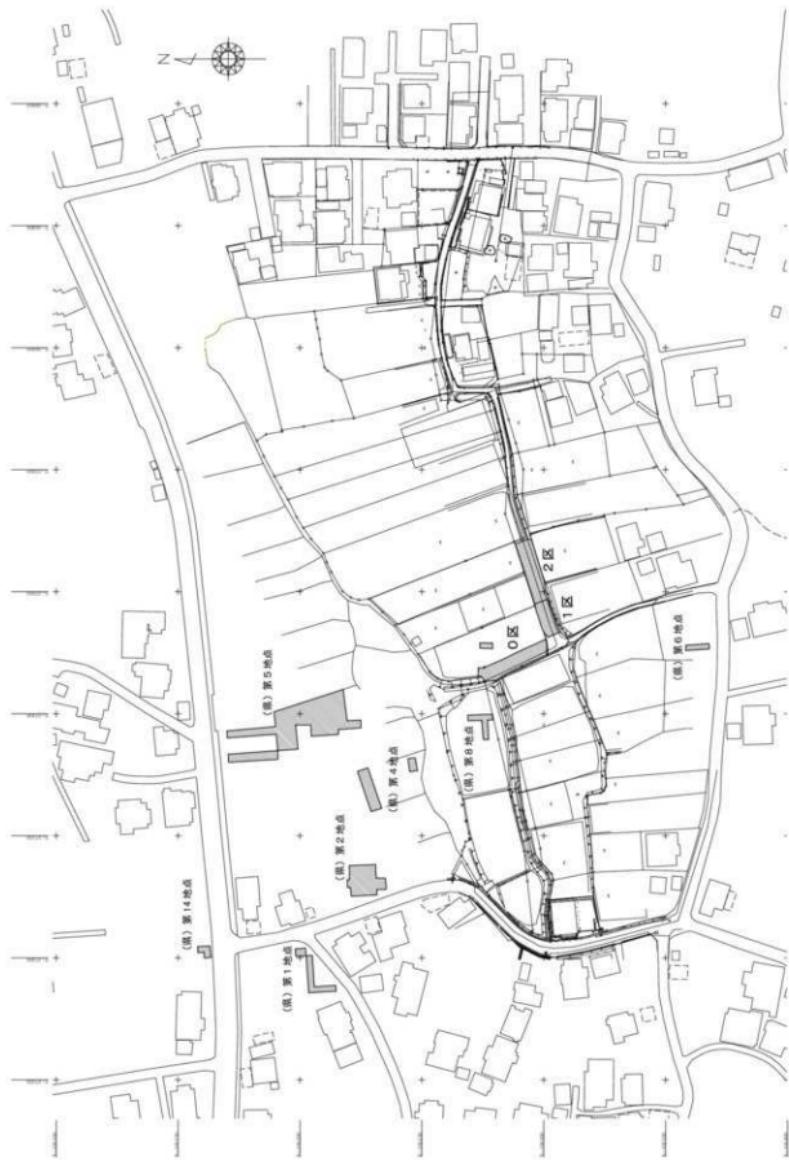


図9 調査区配置図

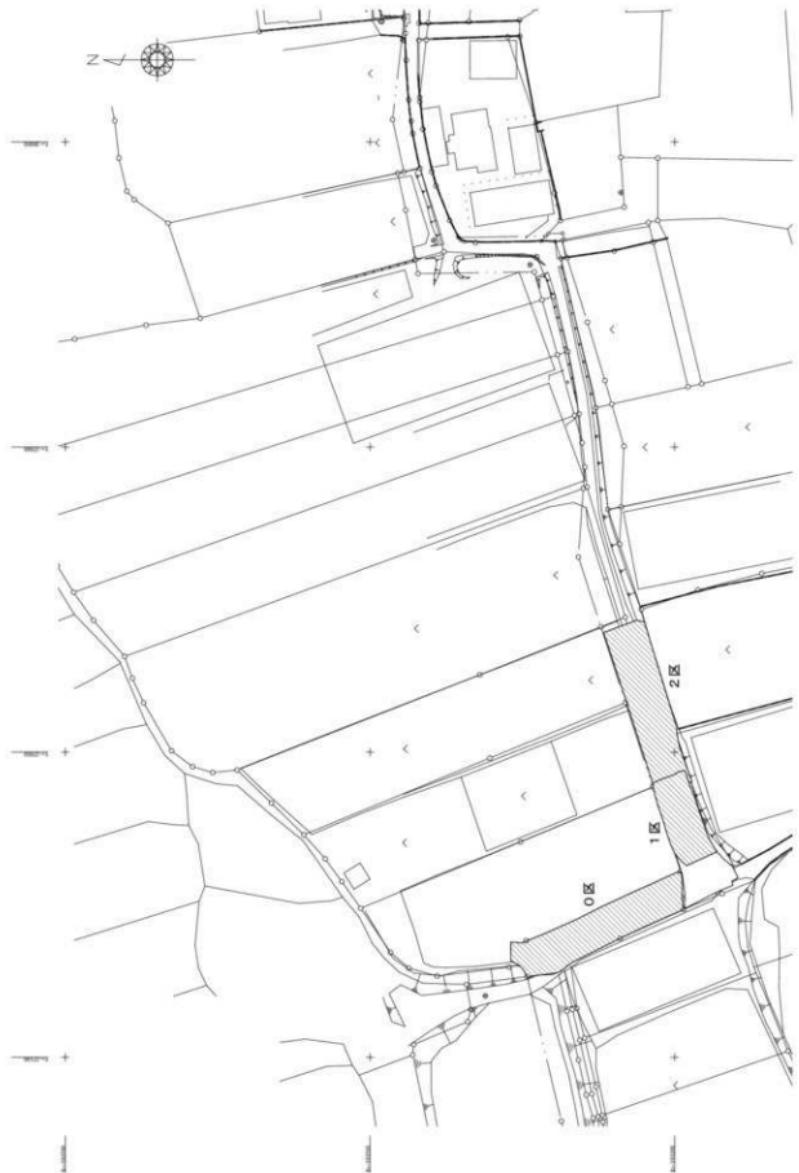


図10 調査区配置図2

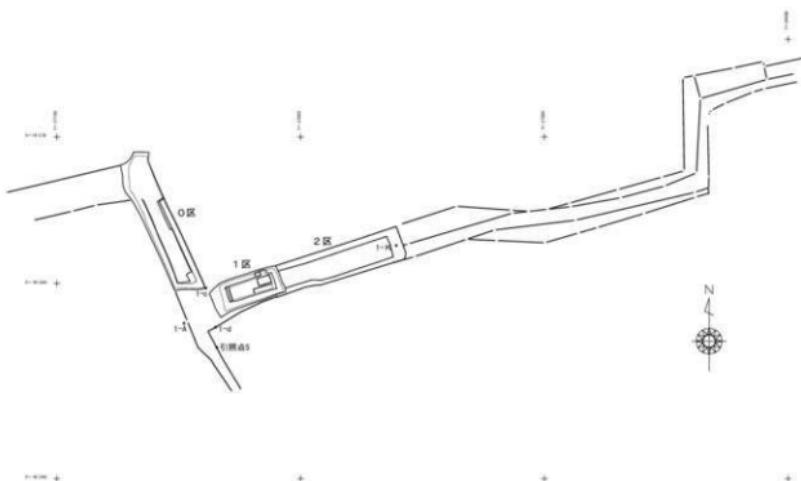


図11 調査区平面図

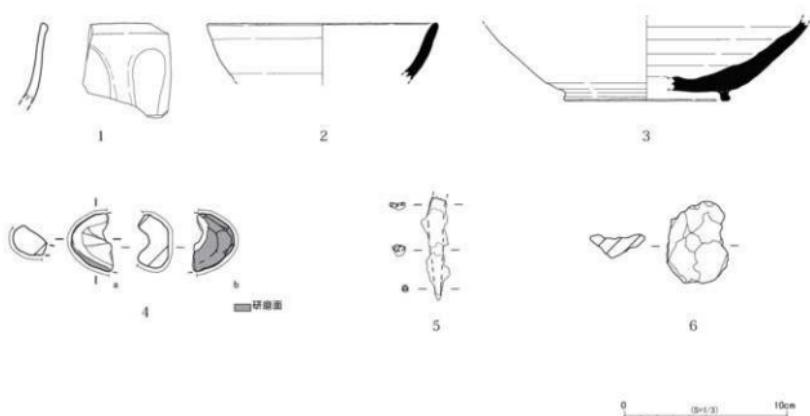


図12 1層出土遺物

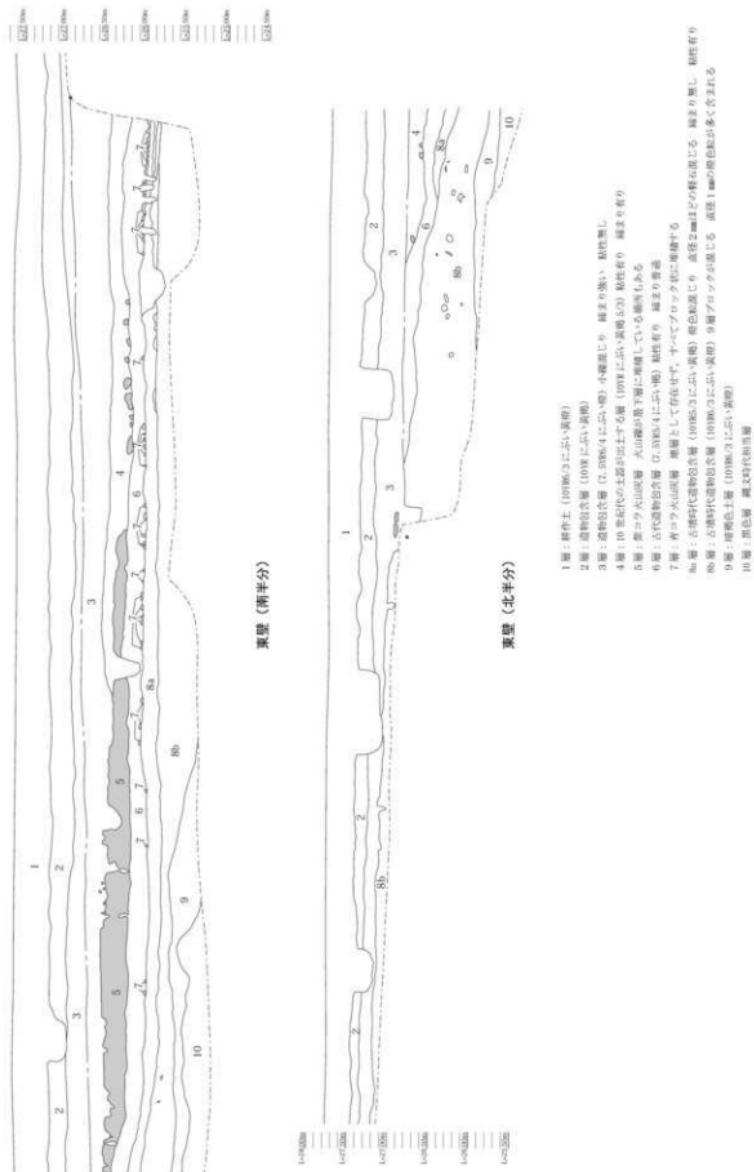


図13 土壌断面図 (S=1/40)

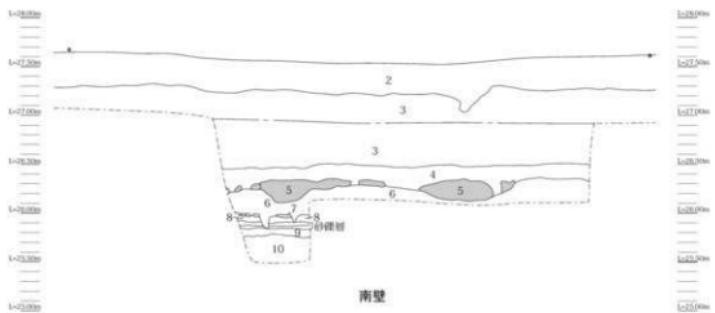


図14 0区土層断面図 (S=1/40)

挿んだ第4層、第6層が該当する。紫コラ火山灰層は「日本三代実録」に記載された開聞岳噴火記事と、発掘調査等で確認された火山灰の内容が類似していることから、西暦874年3月25日に噴出し、堆積したと考えられている（永山1992、成尾1992、下山1993）。

これまで、紫コラ直上層から遺物が出土することは少なく、指宿市南部の橋牟礼川遺跡、敷傾遺跡では、紫コラ火山灰の直上は中世の黒色層が認められているだけで、唯火から中世までの期間が空白となっていた。

市内で紫コラ火山灰直上の様相を確認できる遺跡は指宿市北部の中島ノ下遺跡だけであった。当遺跡からは、「中」が高台内に線刻された土師器椀が出土している。

(1) 土器集中（図17）

2区東側では、紫コラ火山灰を上層から掘り込んだピットが複数確認された。調査区範囲が狭かったことから、遺構の性格は判断できなかった。周辺からは東西幅で約5.5mの範囲で、土師器、須恵器、石器類がまとまって出土したため、土器集中箇所として記録した。

出土遺物（図18～19）

ピット周辺からは遺物が多く出土した。7から29は、土師器の椀である。7は高台付の土師器椀で、口径13.5cm、器高5.8cmを測り、口縁部および高台が一部欠損している。内外面とも明瞭なロクロ痕跡が認められ、口縁部には歪みがみられる。

8は底部の一部が残存しているもので、やや暗い發色を呈する。内面には、黒色物質が付着している。炭の可

能性もある。

9は内赤土師器で、胎土が非常に精良である。高台はシャープな作りで、断面は先細りになる。

10は高台が大きく開く形態の土師器椀で、全体的に摩滅が著しい。外面には高台の接合線がみられる。

11は踏ん張りながら開く高台をもつもので、高台外面に粘土を附加した痕跡がみられる。全体的に摩滅しており、赤橙色に発色する。

12は高台高が1.8cmとやや高めの椀である。高台内の天井部にはユビオサエの痕跡がみられる。外面は摩滅が著しい。

13は高台接地面に平坦部をもつもので、高台内部の天井部は下方へ突出している。胎土には直径2mmほどの褐色粒が多く含まれている。

14は土師器椀の高台部で、非常に丁寧なヨコナデが施される。

15・16は厚みのある高台をもつもので、他の椀に比べて重い。内外面とも摩滅している。

17は高台内面にロクロの痕跡が見られる。

18は底部に厚みがある土師器杯である。底径16.4cmを測り、底部外面は回転ヘラ切り痕跡がみられる。全体的に摩滅している。

19は回転ヘラ切り痕跡が見られる杯で、椀内面中央は粘土の盛り上がりがみられる。外面は摩滅しているが、一部、赤橙色に発色している。

20は椀の平底底部である。回転ヘラ切り後、ナデ調整がみられる。

21は平底椀の底部で、底部外面は回転ヘラ切り後、

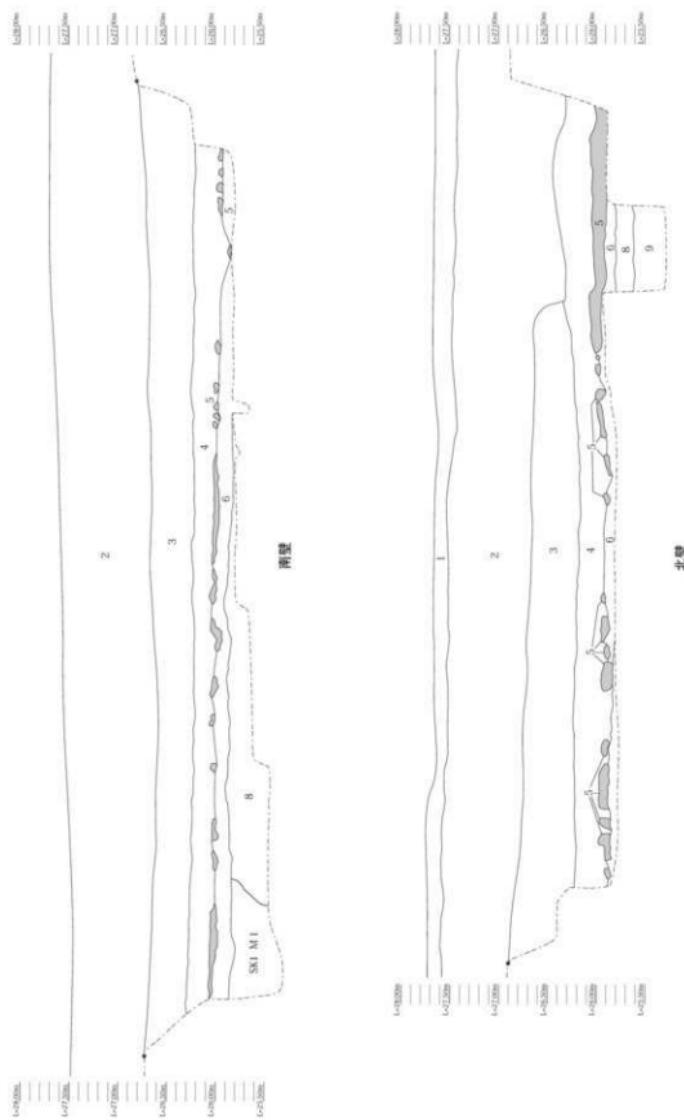


图 15 1 区土层断面图 (S=1/40)



無調整である。全体的に白っぽい発色であるが、内面の一部だけ橙色に発色する。

22は平底椀の底部で、底部はくびれなく、立ち上がりから丸みをもつ形態である。底径6.0cmを測る。外面は強い横ナデ痕跡がみられる。外縁はやや黒ずんでいる。

23は丁寧な作りの土師器杯で、口径17.4cm、器高3.4cm、底径7.0cmを測る。全体的に軟質で、発色も薄橙となる。底部外面には丁寧な横ナデ調整がみられる。搬入品である可能性もある。

24は平底椀の底部で、底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整がみられる。内面はやや青白く発色し、全体的に摩滅している。

25は著しく摩滅しており、成形時の痕跡等は確認できない。底部外面に黒斑がみられる。

26は器面全体が暗褐色に発色した土師器椀である。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。

27は丁寧な質感の土師器椀で、内面に墨書きがみられる。墨書きは偏が「?」であるが、旁の形は不明である。底部外面には回転ヘラ切り後、ナデ調整がみられる。質感は23と類似している。

28の底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。

29は土師器椀の底部で、底部立ち上がりに段を有する。底部外面は丁寧なナデである。

30は土師器甕の口縁部で、復元径27.4cmを測る。口唇部は丸みをもち、胴部内面はヘラケズりがみられる。胴部外面にはスヌの付着が見られる。

31は土師器甕の口縁部片である。

32は高杯の脚部を転用したフイゴ羽口である。口の部分は融解しており、白~灰色になる。筒部の内面には黄土色の付着物が見られる。

33は須恵器甕の頸部~肩部の破片である。肩部外面には格子目タタキ、肩部内面には同心円當て具痕が確認できる。

4層出土遺物

34は高台付杯である。口径11.1cm、器高3.0cm、高台径7.6cmを測る。口縁部は一部しか存しておらず、復元径を示した。器面内部には黒斑が見られる。

35は椀の底部である。高台部分は欠損している。白っぽい発色で、やや硬質である。底部厚は薄い。

36は高台が欠損する土師器椀で、高台内面はドーム状になる。

37は杯部内面と高台内面に赤色塗彩がみられる土師器椀で、色味は高台内面の方が薄い。底部中央がもっと

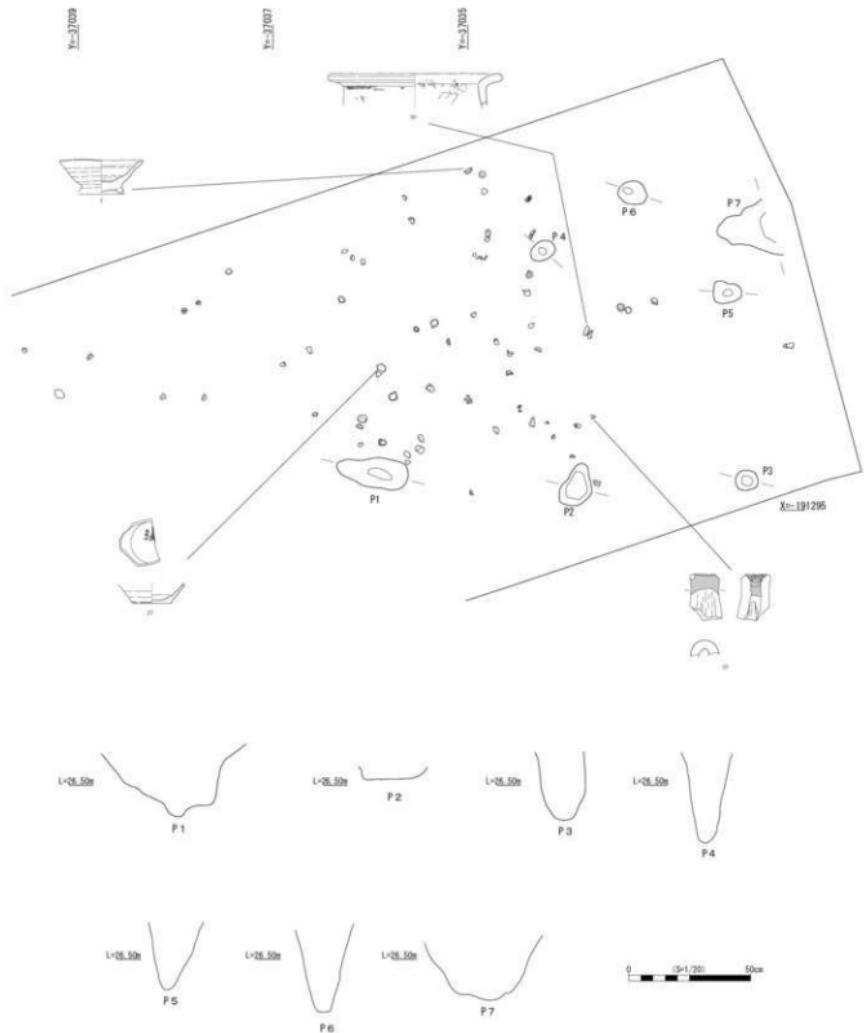
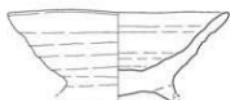


図17 2区土器集中遺物出土状況図及びピット断面図



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22

0 (3×1/2) 10cm

図18 2区土器集中出土遺物1

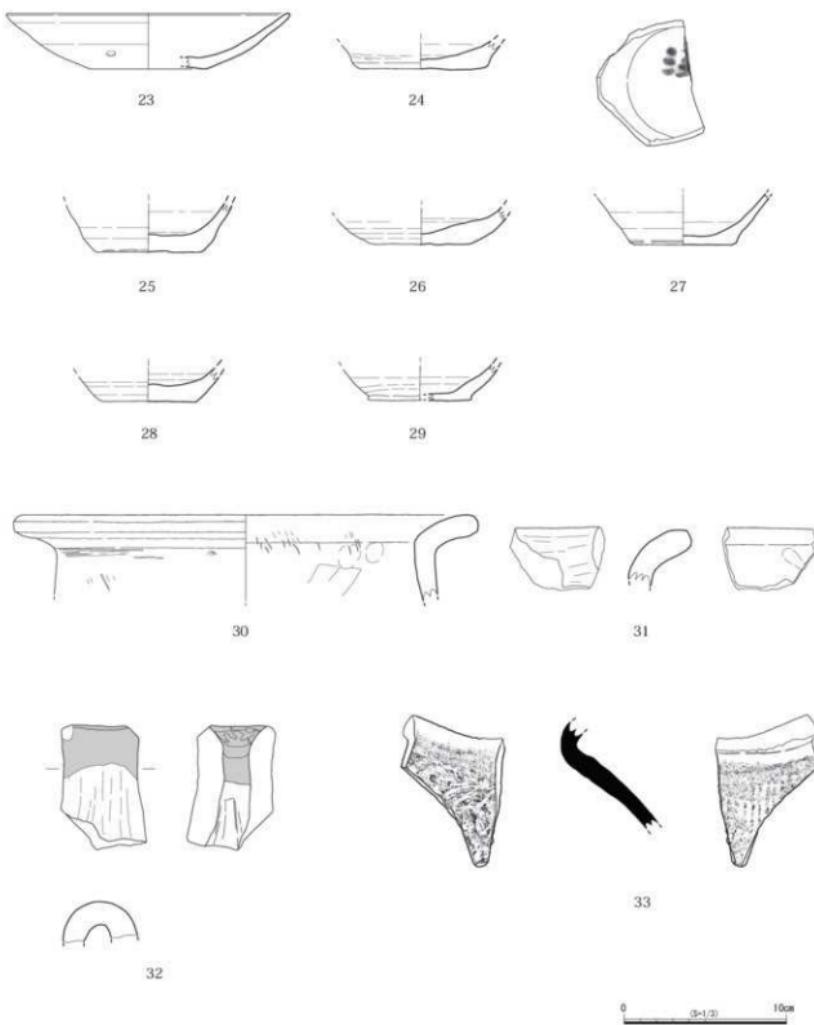


図19 2区土器集中出土遺物 2

も器壁が薄くなる。

38は高台付椀で、全体的に灰色がかった発色である。高台は径8.8cm、高さ1.8cmを測る。丁寧な横ナデが見られる。高台との接合部には明瞭な段が形成される。やや軟質である。

39は接地面が平坦になる高台付椀で、横ナデ調整がみられる。径5mmほどの橙色粒が含まれる。杯部外面にはロクロ痕跡がある。

40は土師器椀で、薄橙色に発色し、質感は軟質である。杯部外面には明瞭なロクロ痕跡が見られる。器面は摩滅しているが、内外面とも赤色塗装がみられる。

41は杯部内面に布目がみられる椀である。糸の幅は1mmほどである。杯部内面は全体的に黒斑が見られる。器面は暗灰色に発色している。

42は土師器椀の底部で、高台内面に丁寧な横ナデ痕跡が見られる。

43は高台径5.9cmとやや小型の土師器椀で、高台端部は丸みをもつ。

44は高台径7.5cmを測る土師器椀で、高台天井部は平坦で、高台との接合部には明瞭な接合線が残る。杯部内面はやや暗い発色である。

45は土師器椀の底部で、高台内部が大きく下方へ突出する。内面にはユビオサエや横ナデ調整の痕跡がみられる。また、高台内面は薄橙色に発色する。

46は高台端部がコの字を呈するもので、全体的に灰色に発色する。高台内面および、外側の一部にススが付着しており、特に高台内面が顯著である。光沢をもつ部分もある。高台内面は回転ヘラ削り後、ナデ調整がみられ、その後に高台が貼り付けられたものと考えられる。

47は土師器杯の口縁部片で、硬質であり、胎土も精良である。口縁端部の一部の内外面にススの付着が見られ、灯明皿として使用されたことも考えられる。

48は土師器杯で、体部外面に段を有する。全体的に摩滅が著しい。

49は土師器杯で、口縁部は先細りし、口唇部は丸みをもつ形態である。杯部外面には、墨書がみられ、「由」あるいは「中」と考えられる。

50は土師器杯の口縁部で口径13.5cmを測る。器面はやや歪みが見られる。全体的に摩滅が著しい。

51は平底の土師器杯で、口径12.0cm、器高3.6cm、底径5.2cmを測る。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。外面にはロクロ痕跡が残り、墨書がみられる。この墨書は、「三万」あるいは「日万」の可能性がある。

52は口縁部が外反する土師器杯で、底部は平底とな

る。底面は一部しか残存していないが、回転ヘラ切り後、無調整と考えられる。口径11.3cm、器高4.6cm、底径6.0cmを測る。やや硬質である。

53は土師器皿で、口径9.9cm、器高2.6cm、底径5.8cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。底部外面は粘土の盛り上がりがみられる。

54は土師器皿で、口径9.1cm、器高2.0cmとやや小型である。暗褐色に発色する。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。径2mmほどの白色粒子が混じる。

55は土師器皿で、底部からの立ち上がり部分に明瞭な段を有する。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。杯部中央は横ナデによる粘土の盛り上がりが見られる。

56は土師器椀で、欠損のため明瞭ではないが体部に墨書きしき痕跡がある。底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。全体的に摩滅が著しい。

57は平底の土師器椀底部で、底径5.4cmを測る。底部外面には、製作具と思われる圧痕が見える。また、底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。

58は土師器椀で、外面に強いロクロ痕跡がみられる。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整で、わずかに底面中央がくぼむ。

59は器壁が厚い土師器椀で、重みがある。底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。器面全体は摩滅している。

60は精良な胎土で製作された土師器椀で、外面は赤褐色に発色する。底径は6.0cmを測る。底部外面は、回転ヘラ切り後、ナデ調整だが、底面中央は無調整になる。底端部は粘土の盛り上がりが見える。

61は土師器椀の底部で、底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整が見える。底部立ち上がり部分も丁寧なナデ調整がみえる。

62は薄橙色に発色する土師器椀で、底部外面の調整は不明である。

63は白黄色に発色する土師器椀で、褐色粒が多く含まれる。底部と体部の境ははっきりせず、丸底状にみえる。底部外面は回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整がみえる。他の土師器と胎土が異なることから、搬入品の可能性もある。硬質である。

64は高台付の土師器杯で、低い高台がつく。赤橙色に発色する。

65は灰白色に発色する土師器杯で、全体的に摩滅が著しい。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。杯部中央は、指頭により大きくくぼむ。

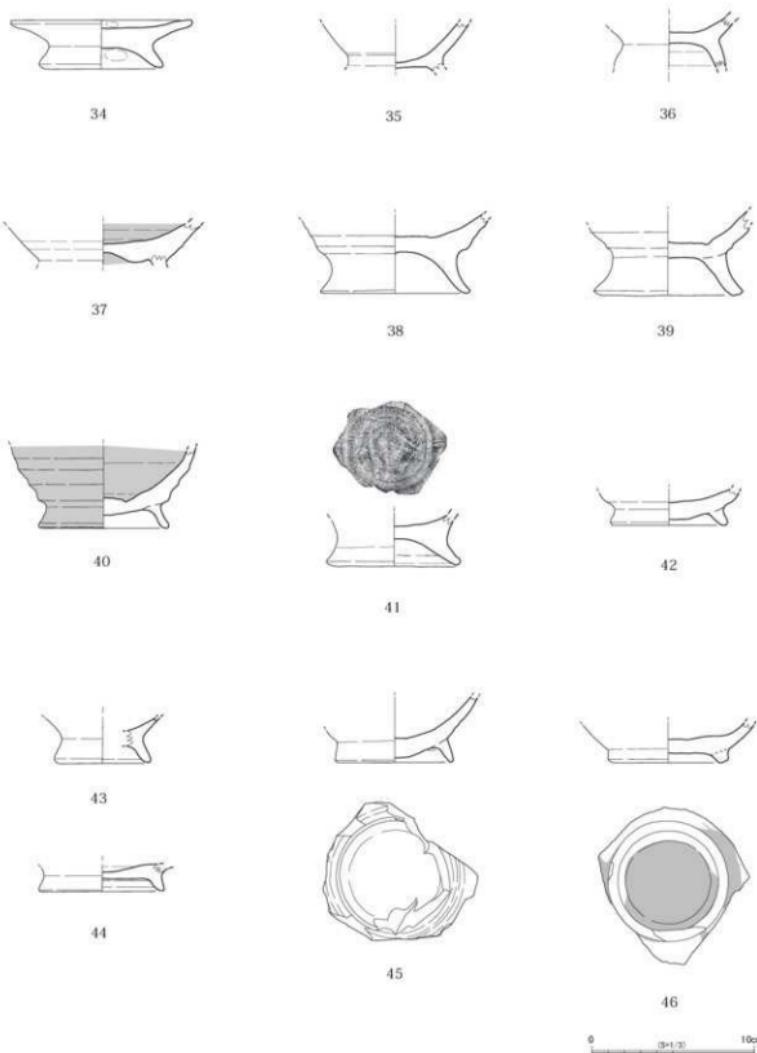


図20 4層出土遺物1

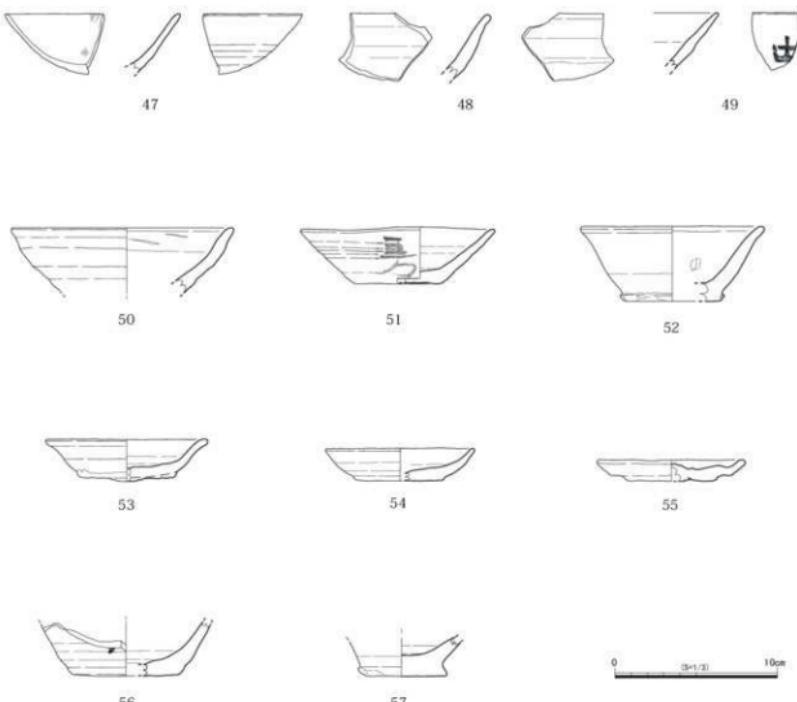


図21 4層出土遺物2

66は土師器楕で、底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。一部、ケズリ状になっている部分もある。底部外面の一部は橙色に発色する。

67は軟質の土師器杯で、全体的に黒斑がみられる。底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。杯部内面は強い横ナデ調整がみられる。

68は精良な胎土で製作された土師器楕で、淡黄色に発色する。杯部内面には黒斑がみられる。底部立ち上がり部分で欠損しており、底部外面は回転ヘラ切り後、無調整である。杯部内面は丁寧なロクロ調整がみられる。

69は土師器楕で、底部外面は回転ヘラ切り後、ナデ調整である。底端部まで丁寧にナデ調整がみられる。硬

質である。

70は須恵器杯の口縁部片で、口径 12.9cmを測る。杯部内面にはスヌの付着が見られる。

71は須恵器楕の口縁部片で、二重口縁の段がほぼ消失してしまったものと考えられる。口縁端部は段を有する。内面は灰褐色に発色する。径 1 ~ 3mmほどの白色粒が多く含まれる。

72は須恵器の小型楕の口縁部片で、口縁端部が一部残存する。内外面とも暗褐色に発色することが特徴である。径 1mmほどの黒色粒が多く残る。

73は灰白色に発色する須恵器楕の胴部片である。外表面は平行タタキ、内面は平行当て具がみられる。

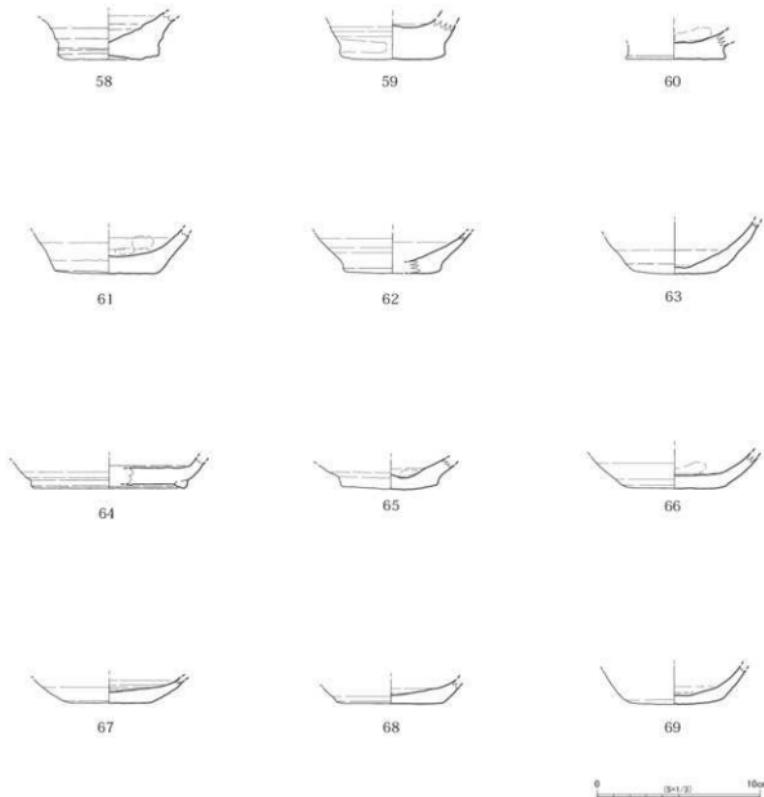


図22 4層出土遺物3

74はにぶい黄色に発色する須恵器壺の胴部片である。外面は擬格子目タタキ、内面は同心円の中央に十字がある車輪文当て具がみられる。車輪文当て具の径は4cmほどである。

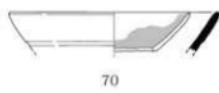
75は浅黄色に発色する須恵器壺の胴部片で、外面は擬格子目タタキ、内面は平行当て具がみられる。73の平行当て具と比べて原体がやや細い。

76は打製石器である。b面に素材剥片の主要剥離面を置き、a面・b面の縁辺に細かな2次加工が施されて

いる。調整は両面中央部まで届かず、周辺加工に留まっている。基部の抉りはほとんどなく直線的である。

77は破損または意図的に分割した敲石を用いて、a面で認められるような周辺からの再調整が施されている石器である。欠損面または分割面を大まかな剥離と細かな剥離によって整形し、その中央部に磨面を作り出している。推測の域を出ないが、敲石を転用した砥石と考えることもできる。

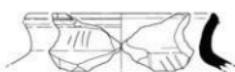
78は「開元通宝」である。径2.5cm、中央の方形透



70



71



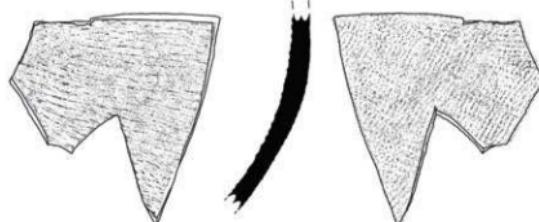
72



73



74



75

0 (S-1/2) 10cm

図23 4層出土遺物4

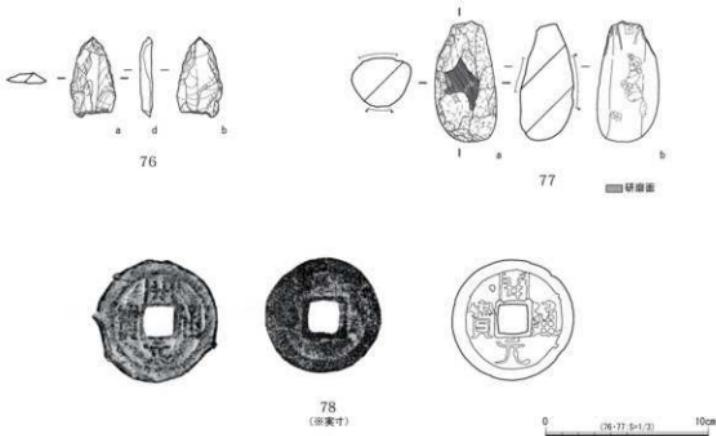


図24 4層出土遺物5

かしは6.5mm角である。表裏面とも摩滅しており、光沢をもつ。「開」の近くには径1mmの穿孔をもつ。転用時の穿孔であることも考えられる。

第4節 第6層の調査

第6層は紫コラ火山灰の下位層である。紫コラ層の一部を重機を用いて除去している際に、筋状に堆積する紫コラを確認したことから、人力掘削に切り替えた。この筋状の堆積は、紫コラ火山灰層によって覆われた畠跡の歓間と判断できた。以下、畠跡について記述する。

(1) 畠跡(図25・26)

0区において、平安時代の畠の歓間を6条確認した。歓間はその軸方向から、大きく2つにグルーピングできた。一つが、南側の歓間で、北北西に軸をもつ。歓間1～3が該当する。もう一つのグループが、西北西に軸をもつもので、調査区北側に位置する。歓間4～6が該当する。

歓間1は調査区東壁にかかっており、検出面での長さ3.5mである。歓間2は一部掘削により途切れている部分があるが、全長9.4mを検出することができた。歓頭

は重機掘削によって削平されている。歓間幅は36cm～50cmを測る。歓間1と歓間2の間隔は1.2mである。歓間3は調査区西壁についているため、全長を明らかにし得ないが、検出長で6.3mである。歓間幅は、40cmを測り、歓間の最下層には紫コラの火山礫を確認できた。火山灰堆積の間にはシルト質の堆積が見られたことから、複数回の噴火履歴を示していると考えられる。歓間2と歓間3の間隔は85cm～100cmであった。

調査区北側では、紫コラ火山灰の堆積が厚く、歓頭まで検出できる部分もあった。歓間4は、全長2.2mで、一部削平を受けている。幅は40cmを測る。

歓間5は全長を確認できたもので、7.3mであった。南側のグループと比較してやや短いが、歓間幅は1mある部分もあった。歓間4と歓間5の間隔は60cmであった。

歓間6は北側が二又に分かれるもので、歓間同士が接触している可能性もある。全長は不明だが、検出長4.9mを確認した。歓間5と歓間6の間では歓頭まで検出することができた。歓頭は頂部に窪みをもつもので、幅が広い。これまで畠跡が検出されている橋牟礼川遺跡や慶固遺跡などと同様の形態であると考えられる。

出土遺物

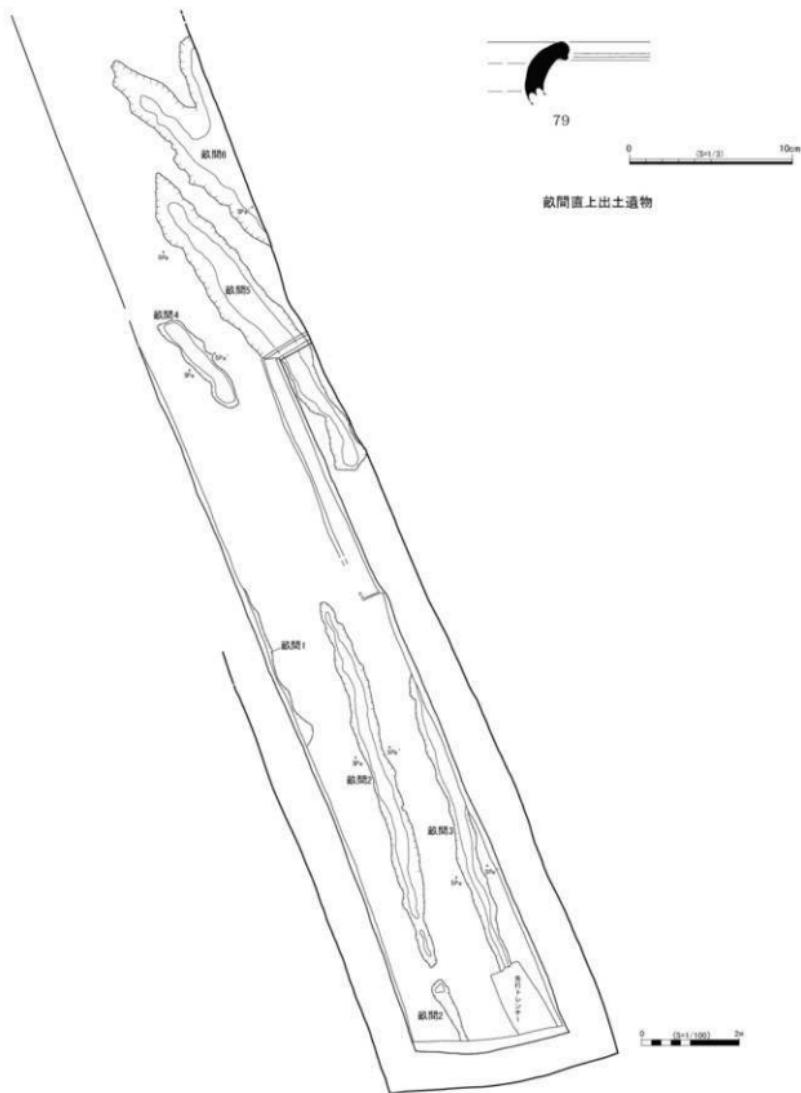


図25 O区発跡平面図と出土遺物

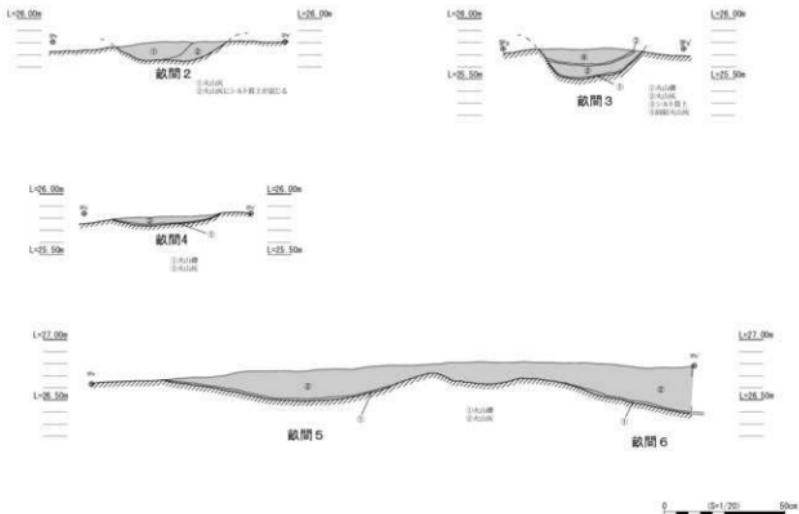


図 26 O 区轟跡歓間の火山灰堆積状況

歓間 2において須恵器甕の口縁部が出土している。破片のため、口径は不明だが、形態から中型甕であると考えられる。端部はわずかに垂下気味になる。全体的に青黒く発色する。

第5節 古墳時代の調査

(1) SK1 (図 27)

1区と2区の接続部において、ブロック状に堆積した青コラ火山灰下層（8層中）より不定形の遺構を検出した。長軸 270 + α cm、短軸 290 cm を測り、円形竪穴建物の可能性も考えられたが、柱穴などの建物内の遺構がなかったことや跡跡や床面の検出などもなかったことから、円形土坑として記述する。検出面からの深さは最大で 70 cm であった。

出土遺物（図 28 ~ 36）

遺構内からは古墳時代後期に位置づけられる土器・石器などが出土している。

80 から 82 までは口縁部が内湾するタイプの甕である。80 は、口径 27.1 cm、最大径 28.3 cm を測る。口縁部下に刻目突帯を有する。突帯の上下は丁寧な横ナデがみられる。刻目原体には布が巻き付けられていたと考えられ、刻目内部に布目压痕がみられる。外面ともミガキ調整である。胸部外面にはススが付着する。

81 は口径 28.8 cm、最大径 30.3 cm を測り、最大径よりやや下がった位置に絡縄突帯がめぐる。この絡縄突帯は、貼り付け時のユビオサエに対応する形で、突帯下方の器面に連続した爪痕がみられる。突帯は接合しない。外面とも全体的にナデ調整で、一部にミガキ調整がみられる。外面突帯下部にススが付着する。

82 は口径 31.6 cm を測る内湾する甕で、全体形は不明だが、器高は浅くなると考えられる。大型鉢の可能性も考えられる。口縁部はわずかに屈曲し、最大径部分に絡縄突帯を有する。81 と同様に、ユビオサエ時の爪痕が突帯下方に確認できる。外面とも斜め方向のナデ調整がみられる。

83 から 85 は甕口縁部である。83 は口縁端部がコの字を呈するもので、端部は丁寧な横ナデがみられる。口

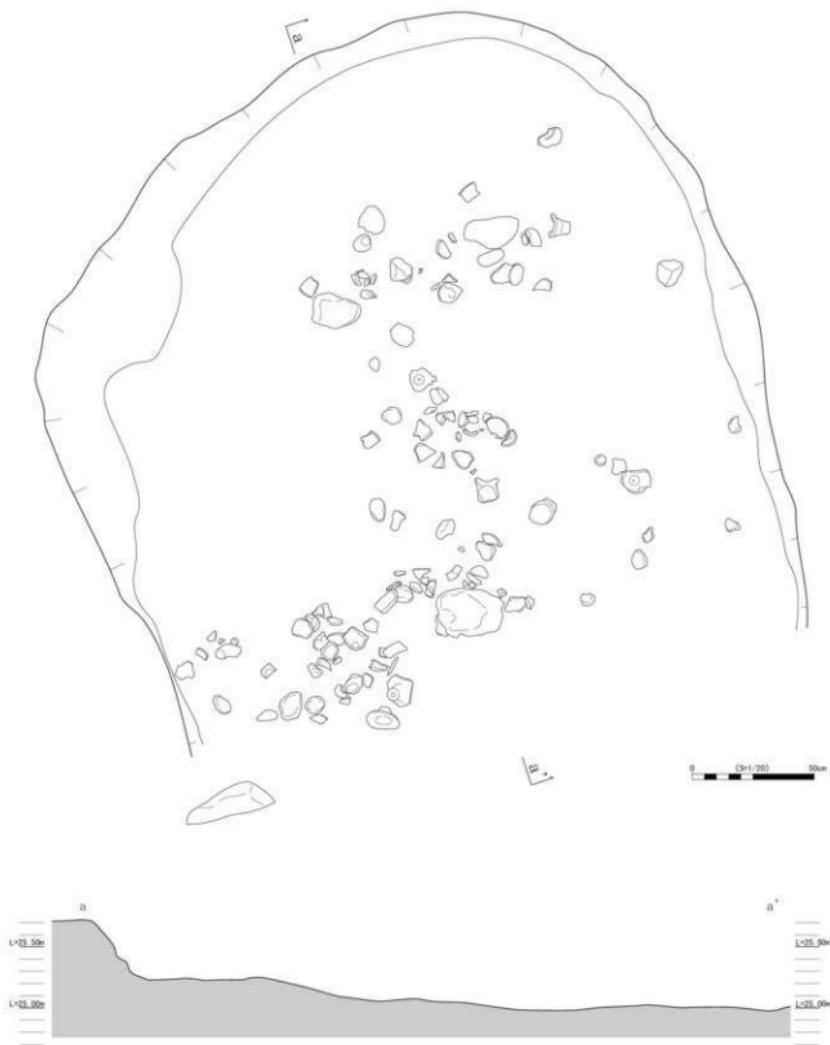
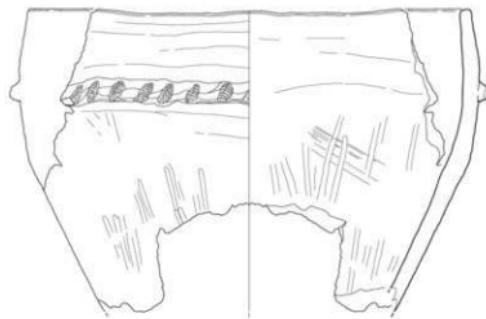
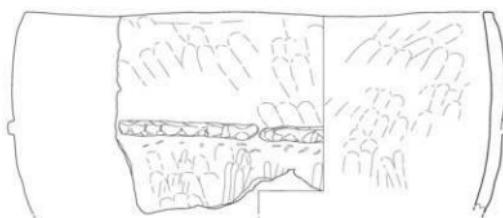


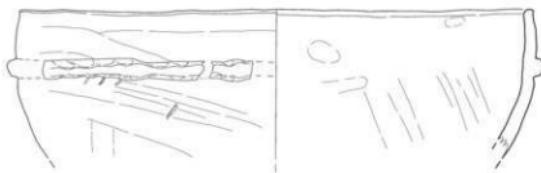
図 27 SK1 遺物出土状況図



80



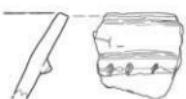
81



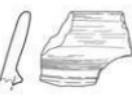
82

0 (3-1-3) 10cm

図28 SK1出土遺物1



83



84



85



86



87



88



89

0 (5x1/3) 10cm

図29 SK1出土遺物2

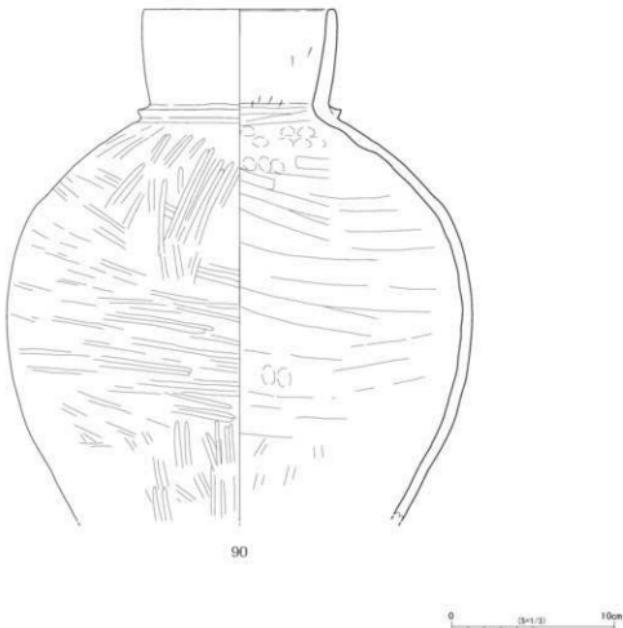


図 30 SK1 出土遺物3

縁下部に一条の刻目突帯があり、刻目には布目がみられる。

84は口縁端部が丸くなるもので、内外面とも丁寧なヨコナデ調整がみられる。口縁下部には断面三角突帯が貼り付けられる。

85は断面コの字を呈する口縁部片である。口唇部はわずかにM字にくぼむ。内面には薄いミガキがみられる。

86から89は壺の脚部である。86は底径7.3cm、脚部高4.5cm、脚部径10.6cmを測り、脚端部は強い稜線が見られる。脚部内面は灰赤色に発色する。底部内面にはススが付着する。

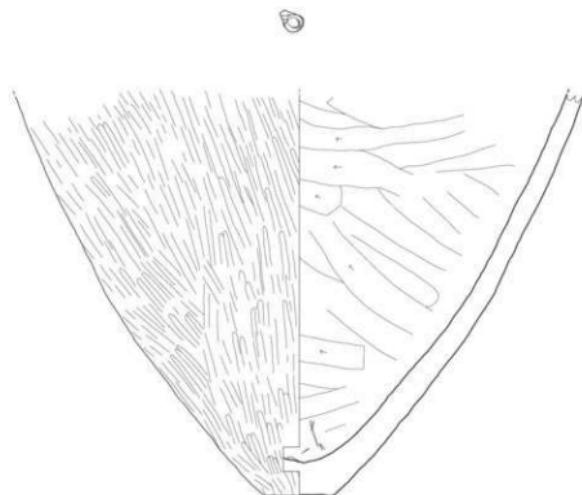
87は底径6.4cm、脚部高2.5cm、脚部径8.5cmを測り、脚部が短く開くものである。脚部内面には黒斑が付着する。底部内面にはススの付着はみられず、丁寧なナデ調

整で器面が平滑となる。径5mmほどの灰色粒がみられる。

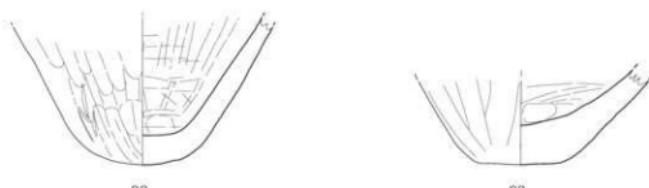
88は底径7.6cm、脚部高2.3cm、脚部径9.2cmを測り、脚部高が低いタイプである。脚端部は指ナデにより、歪みが見られる。径1mmほどの黒色粒を多く含む。

89は底径5.1cm、脚部高1.6cm、脚部径6.8cmを測り、低く短い脚部である。脚接合部外面や脚部内面には、接合時のユビオサエが多く残る。器面全体が赤橙色に発色する。

90は口縁部が内湾するタイプの壺で、肩部から胴部にかけて球胸状にふくらむ。最大径は胴部中ほどにある。口径11.7cm、頸部径11.4cm、頸部高6.5cm、胴部最大径28.7cmを測る。頸部には丁寧な横ナデで貼り付けられた三角突帯がめぐる。内外面ともにぶい橙色に発色し、口縁部および肩部の一部に黒斑の付着がみられる。器面調整は、内面が横方向のミガキ、外側が斜め方向のミガ



91



92

93

0 [S=1/2] 10cm

図31 SK1出土遺物 4

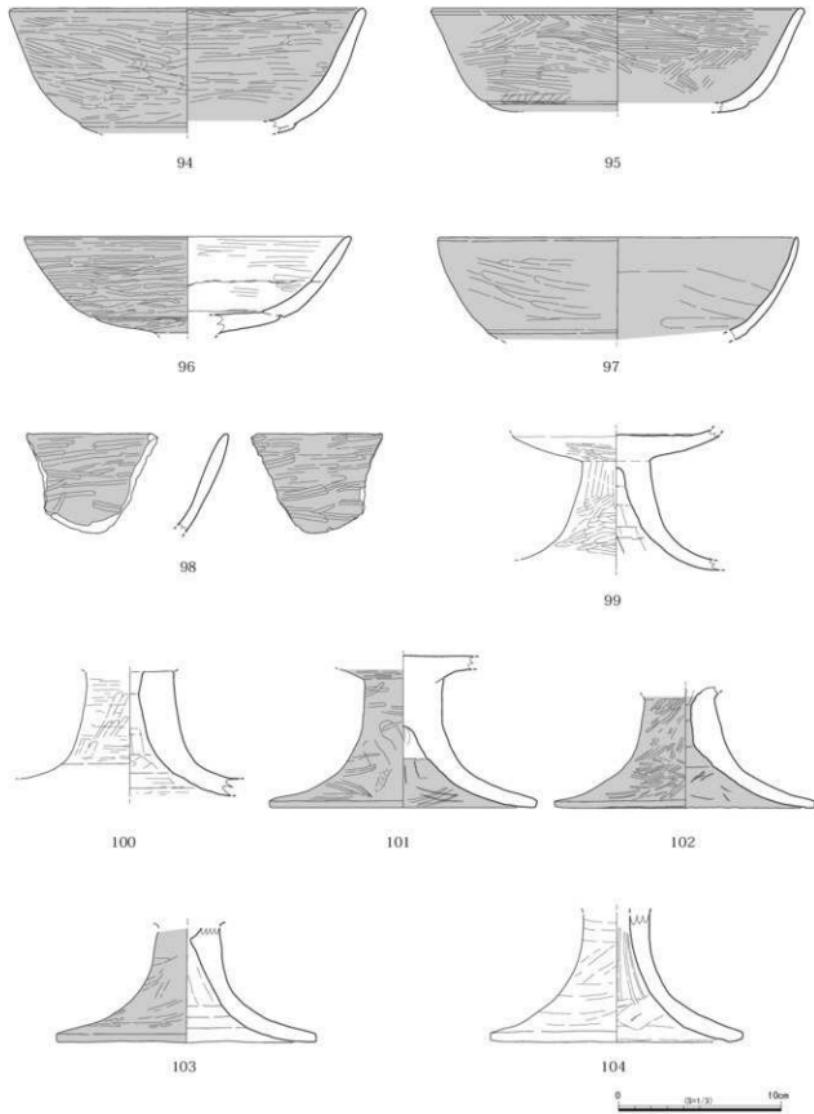


図 32 SK1 出土遺物 5

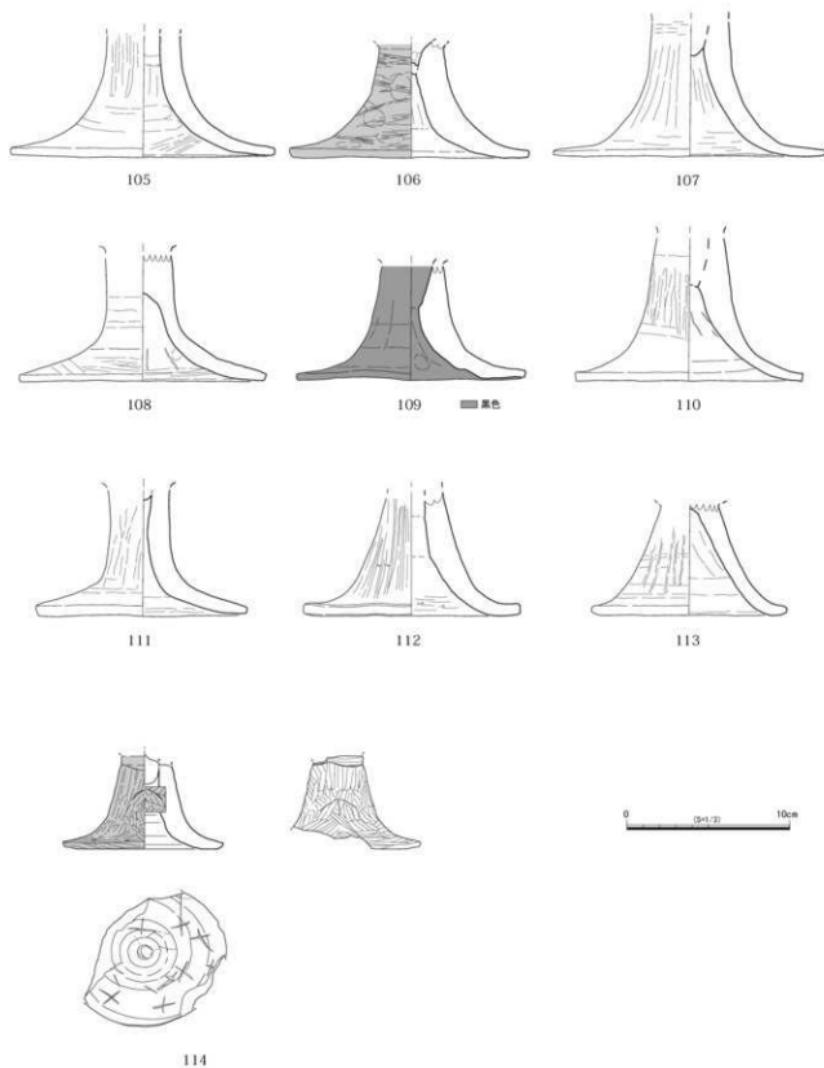


図 33 SK1 出土遺物 6

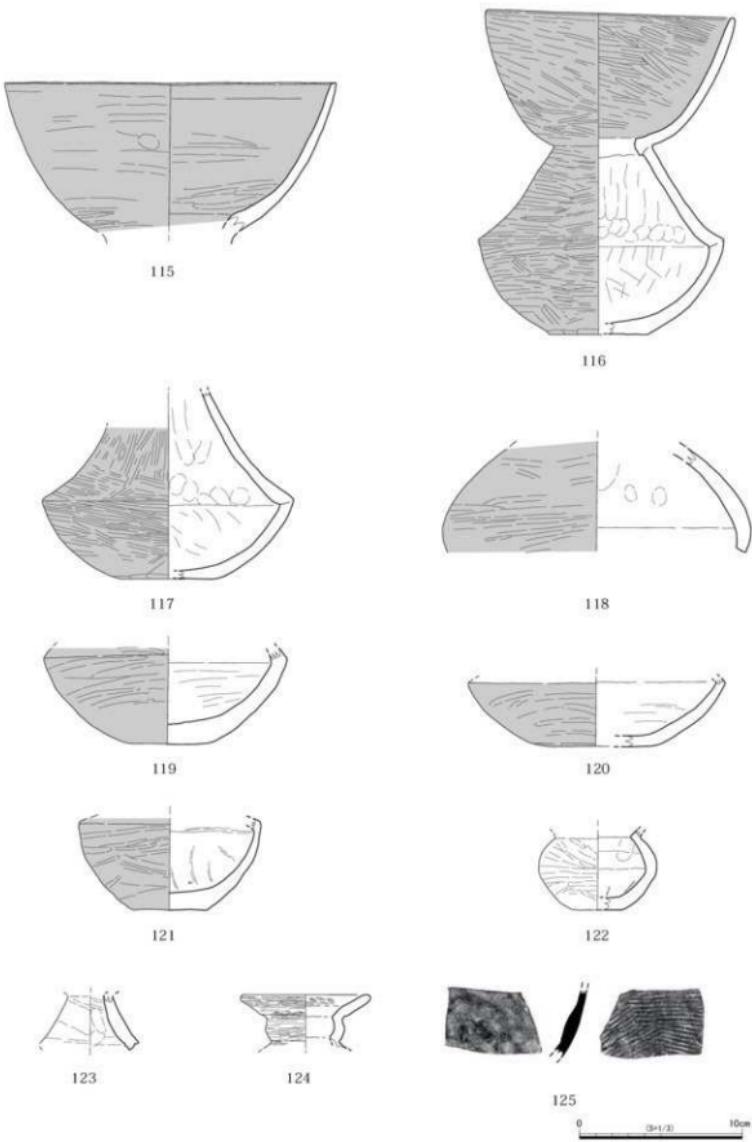


図 34 SK1 出土遺物 7

キである。頸部内面には成形時のユビオサエが明瞭に残る。胸部の器壁は薄く丁寧なつくりである。

91は大型壺の底部から胸部であり、底径4.0cmを測る。底部厚は2.1cmある。内面は横・斜め方向の丁寧な工具ナデ調整がみえ、底部内面には工具痕跡が多く残る。特に、底部内面には大型壺の装飾に用いられる竹管文と類似した刺突がみえる。成形時の工具痕跡か施文であるかは判断できないが、底部内面といつもつかない場所であることから前者の可能性が考えられる。外面には縦・斜め方向のミガキ調整が底部から胸部まで全面にみられる。ミガキの単位は3mmほどである。胸部外面上ほどに黒斑の付着が見られる。

92はレンズ状の底部をもつ壺である。外面は縦方向の工具ナデ、内面は縦および横方向のナデがみられる。底部外面上もナデ調整がみられるが、一部剥落している。底部には黒斑が見られる。

93は平底の壺で、底面はわずかに上げ底状となる。底径5.0cmを測る。底部外面上は縦方向の工具ナデがみられ、一部ミガキ状になっている器面もある。外面は赤褐色に発色する。底部内面には黒斑の付着が見られる。

94から114は高杯である。94は高杯の杯部で、杯部下半は欠損している。口径21.6cmを測る。内外面とも赤色顔料が塗布されており、横方向のミガキがみられる。内面には径1.5cmほどの円形の剥落が連続してみられるが、使用時の痕跡であるかは判断できない。杯部外面上と口唇部に黒斑の付着が見られる。胎土は橙色である。

95は杯部で口径22.8cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられ、暗赤色および赤色になる部分がまだらにみられる。外面と内面とも横・斜め方向のミガキ調整がみられるが、口唇部および内面の一部は摩滅が著しい。外面には黒斑の付着が見られる。

96は杯部で、杯部下半に明瞭な段を有する。杯部内面には接合線が2本確認できる。口縁部は直線的に開き、口径20.0cmを測る。内外面に黒斑がみられ、杯部の一部に黒灰色の物質が付着している。赤色塗彩はみられないが、外面は明橙色に発色する。外面は横方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

97は先細りする口縁部をもつ杯部で、口径22.0cmを測る。杯の接合部で欠損しており、接合部で面を持つ。内外面とも赤色塗彩がみられるが、内面は摩滅が著しい。外面には径4cmほどの黒斑がみられる。

98は杯部で、内外面とも赤色塗彩およびミガキ調整がみられる。やや深みをもった杯であると考えられる。

99は高杯の杯部底面の接合部分で欠損した資料で、

底面の径は4.2cmを測る。杯部内面は剥落が著しい。脚部はミガキ調整が施され、筒部外面上には黒斑の付着が見られる。脚部内面には明瞭な稜線を持ち、筒部内面はヘラケズリがみられる。

100はやや太めの筒部をもつ脚部で、筒部径5.2cmを測る。杯部との接合面で剥落したものと考えられる。器壁がやや厚く、重い。外面は丁寧なミガキ調整後、ナデ調整がみられる。外面には赤色塗彩は見られないが、赤褐色に発色する。

101は脚部で脚部径6.3cm、脚部高8.0cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられ、ぶい赤褐色に発色する部分もある。内面の赤彩は斑状である。器部は底面のみ残存しており、赤色塗彩はみられず、ナデ調整で仕上げられる。

102は杯部接合面で欠損している高杯脚部である。脚部と杯部の接合部は簡抜け状に欠損しており、粘土塊を充填させる接合方法であったことが考えられる。筒部径4.3cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられるが、内面の塗彩は斑状となる。脚端部には黒斑がみられる。

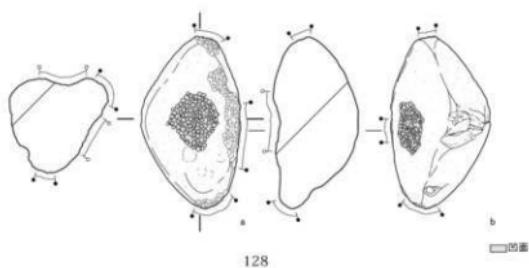
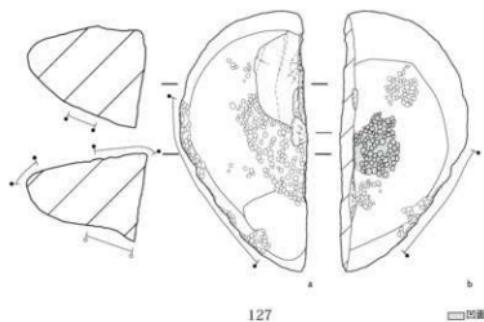
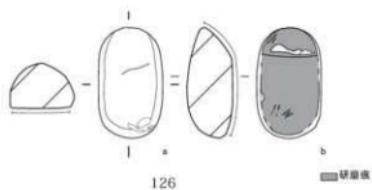
103も102と同じように欠損している高杯脚部で、脚部は簡抜けとなる。外面のみ赤色塗彩がみられ、丁寧なミガキ調整がみられる。脚端部には赤彩はみられない。筒部の内面はヘラケズリがある。それ以外はナデ調整である。

104は脚部で、脚部径15.5cm、脚部高7.9cmを測る。内外面とも明瞭な赤色塗彩は見られないが、外面に赤く発色する部分がある。外面は丁寧なミガキ調整がみられる。脚部内面はヘラケズリ後、筒部を棒状工具によるナデ調整がみられる。また、脚部内面には黒斑もみられる。

105は半分が欠損している脚部で、脚部径16.1cmを測る。脚端部には黒斑がみられる。脚接合部で剥落しているものと考えられる。脚部内面は赤黒色に発色し、ミガキ調整がわずかに確認できる。断面を見ると暗赤灰色に発色しており、白色粒子が多く見られる。粘土塊充填による接合であると考えられる。

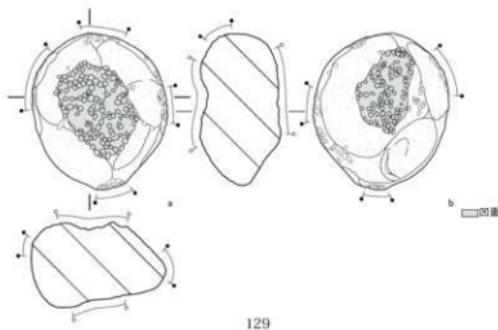
106は器面全体が摩滅した脚部で、脚部径14.5cmを測る。脚端部および筒部に黒斑がみられる。外面のみ赤色塗彩がみられる。筒部には粘土塊の付着が認められる。器壁が最大厚1.8cmとやや厚めである。胎土は明赤灰色でやや白い。

107は粘土塊がみられる脚部で、杯部との接合面で剥落している。脚端部は一部のみ残存しており、脚部の裾から端部にかけて黒斑がみられる。外面はやや細い工具ナデがみられる。内面の発色は暗赤色である。

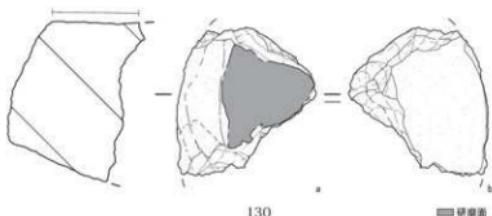


0 (3-1/2) 10cm

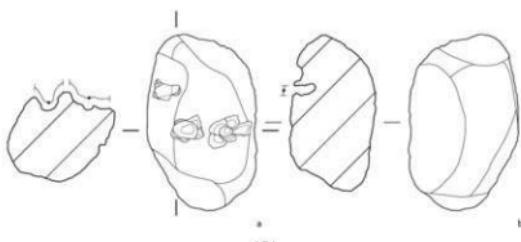
図 35 SK1 出土遺物 8



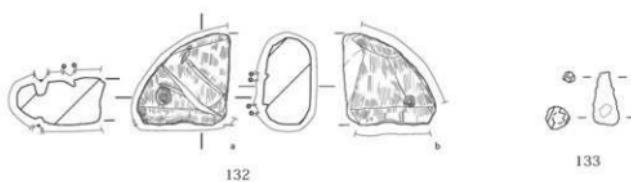
129



130



131



132

133

0 (3=1/3) 10cm

図 36 SK1 出土遺物 9

108は一部欠損しているが、ほぼ全周残存している高杯脚部である。脚部径15.1cm、脚部高7.8cm、筒部径4.1cmを測り、脚端部と筒部に黒斑が見られる。赤色顔料の塗彩は見られない。筒部内面はヘラケズリ後、ナデ調整がみられる。裾部内面はミガキ調整である。

109は黒色に発色する脚部で、内外面とも暗赤灰～赤黒色である。脚部は筒抜けとなる。外面は丁寧なミガキ調整がみられる。胎土は橙色である。

110は脚部が半裁される形で欠損しているものである。赤色塗彩はみられないが、外面は明橙色に発色する。脚端部はコの字でシャープである。脚部内面は全体的にナデ調整だが、一部ケズリ状になる。脚接合部には粘土塊がみられる。

111は筒部がやや細くなる脚部である。脚部は筒部から強く屈曲して開く。脚端部は面をもつ部分と丸みをもつ部分がある。内外面とも赤色塗彩はみられず、明橙色に発色する。胎土は淡橙色で、径2mmほどの褐色粒を含む。

112はハの字に開く脚部で、内外面とも赤色塗彩はみられない。筒部外面と脚端部に黒斑が見られる。筒部の器壁は厚みをもつ。

113は淡赤色に発色する脚部で、砂粒を多く含み、橋牟礼川遺跡や敷領遺跡から出土する甕に一般的にみられる胎土と類似する。質感はザラザラしている。脚部から直線的に開く。端部は反り返るような形態で丸みをもつ。脚部径12.0cmとやや小ぶりである。

114は脚部径9.8cm、脚部高4.4cmと小ぶりの脚部である。外面には赤色塗彩がみられ、丁寧なミガキ調整で仕上げられる。筒部には「↑」のような線刻があり、この線刻は裏面でも認められる。線刻部分を赤色塗彩が埋めている箇所もあることから、線刻後に塗彩があったと考えられる。さらに、脚部内面を見ると「×」のような線刻が8つ確認できる。大きさは径2～3cmほどでほぼ同一であるが、配置には規則性は認められない。

115から124は甕である。115は大型甕の口縁部で、頸部との接合部分で欠損している。口縁部は楕円形で、口径20.4cm、頸部径8.0cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられ、橙色の発色するが、外面と比して内面はやや暗い。内面は一部剥落しており、ぶい橙色の胎土がみえる。内外面とも丁寧なミガキ調整がみられる。頸部内面周辺には黒斑がみられる。

116は口縁部・頸部の一部が欠損しているが、完形に復元できるもので、口径15.1cm、器高19.8cm、底径6.0cmを測る大型甕である。頸部がソロバン玉状に強く屈曲

するもので、頸部最大径は15.1cmである。頸部から頸部にかけて内傾する頸部をもち、頸部には楕円形の口縁部がつく。頸部には強い稜線がみられる。内外面とも赤色塗彩がみられるが、体部内面には確認できない。赤色塗彩は全面明赤褐色だが、所々、暗赤褐色の塗彩が斑状にみえる。焼成時の変色と考えられる。底部は平底で、底端部には黒斑がみられる。

117は大型甕の底部から肩部で、頸部はソロバン玉状に強い張り出しをもつ。頸部最大径15.0cm、底径6.0cmを測る。外面には赤色塗彩、丁寧なミガキ調整がみられる。底部外面および内面に黒斑がみられる。

118は甕の肩部片で、頸部の屈曲は弱く、丸みをもつ。頸部との接合部分で剥落したものと考えられる。肩部は膨らみを持ちながら頸部へとびる。頸部内面はユビオサエが明瞭に残る。

119は大型甕の胴下部で、頸部最大径部分で欠損している。頸部最大径は14.9cm、底径5.7cmを測る。他の資料と比して赤色塗彩が暗い。底部外面は摩滅しており、赤色塗彩もみられない。顔料が剥落した可能性もある。内面調整はナデ調整がみられ、一部ケズリ状になっている箇所もある。

120は甕の底部で、底径7.2cmを測る。外面には赤色塗彩がみられ、やや赤みが強い。内外面とも摩滅が著しい。

121は甕の胴下部で、頸部最大径が一部分のみ残存している。最大径は11.1cmを測る。外面には赤色塗彩がみられ、底部外面まで塗彩がみえる。頸部には黒斑がみられる。内面は、工具ナデ痕跡が明瞭にみえ、一部ケズリ状となる。

122は小型甕の胴部である。胴部形態は丸みをもち、肩部も膨らみを持ちながら頸部へとびる。底部は平底だが、端部はシャープではない。頸部内面は強く屈曲する。内外面とも赤色塗彩はみられない。

123は小型甕の肩部で、頸部最大径部分で剥落しており、頸部にかけて内傾しながらとびる。剥落部分には面をもつ。径3mmほどの明橙色粒が含まれる。

124は頸部で段をもつ特殊な形態の甕で、口径7.6cmを測る。赤色塗彩はみられないが、外面は明赤褐色に発色する。

125は須恵器の胴部片で、外面は平行タタキ、内面はユビオサエなどの成形痕跡がみられる。

126は断面かまぼこ状を呈した軽石的一面を磨面として利用されたものである。b面の磨面は一面の平坦面でなく、二面で形成されている。

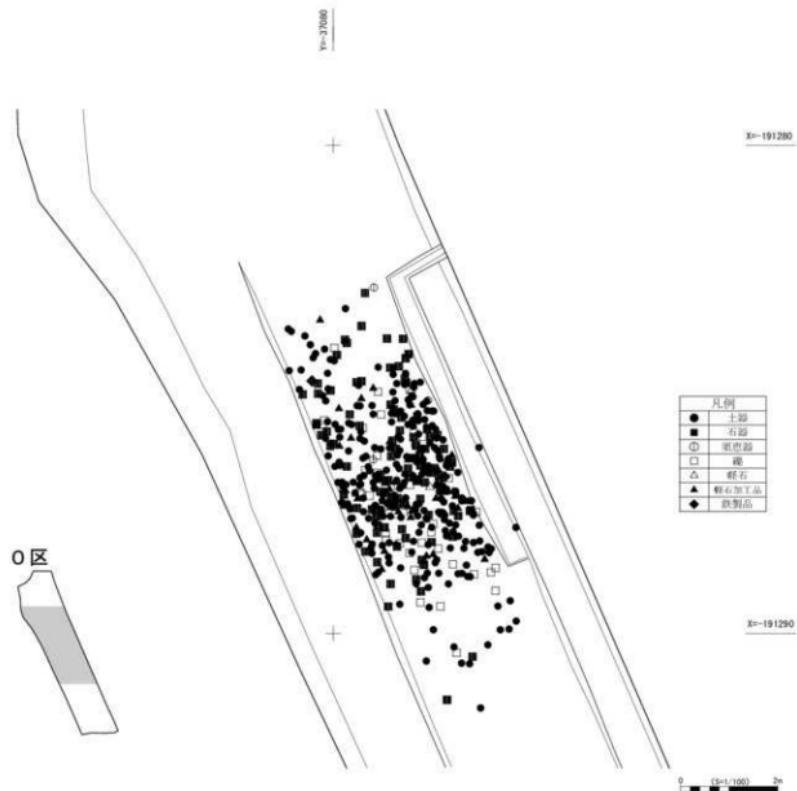


図37 土器集中遺物分布図

127は台石である。a面・b面中央部に顕著な敲打痕が認められる。また、a面左側面にも連続する敲打痕が認められる。やや、b面中央部は凹面を呈している。

128は四石である。a面中央部とb面左側面に敲打による凹面が認められる。また、a面上下両端に敲打痕が認められる。

129はa面中央部に凹面が認められるものである。両面中央部に敲打痕が認められ、また、ほぼ全周にも敲打痕が認められる。

130はa面に研磨面をもち、断面が台形状を呈する。

安山岩製である。

131はa面中央部と左側面上部に穿孔が施された軽石製加工品である。穿孔は3ヶ所認められる。

132は断面が梢円形を呈する軽石製品で、2条の線刻と径1.0cmを測る穿孔をもつ。この穿孔は貫通しない。

133はソケット状の鉄製品である。幅1.4cmほどを測る。

(2) 土器集中（図37）

O区において土器集中箇所を確認した。遺物は北から

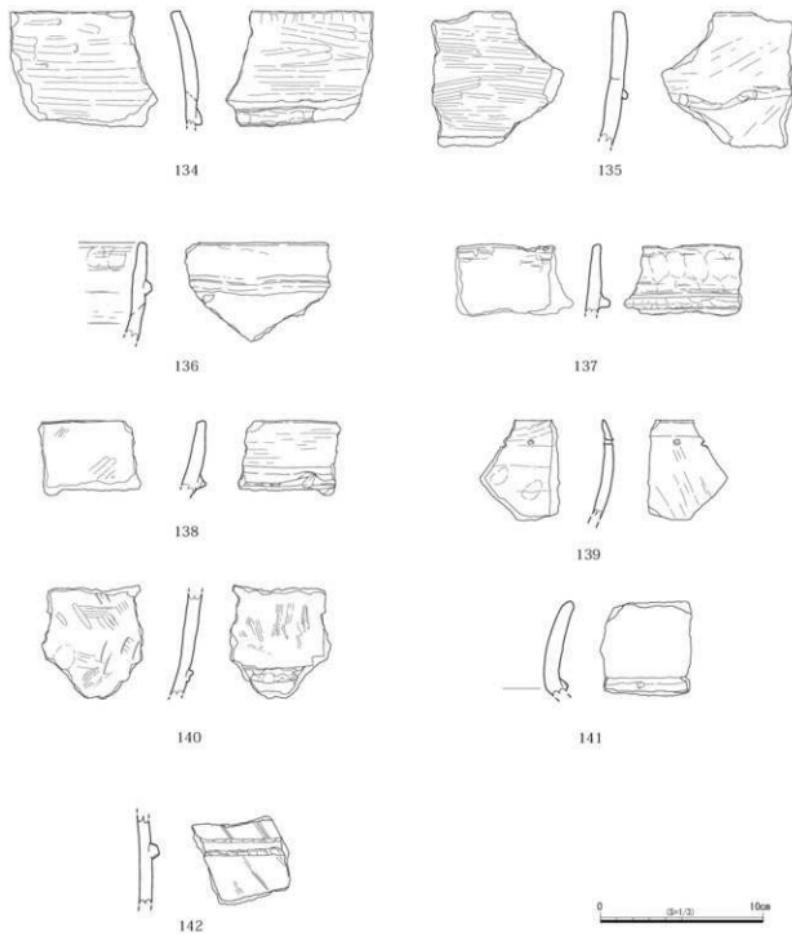
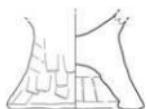


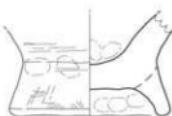
図 38 O 区土器集中出土遺物 1



143



144



145



146



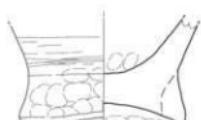
147



148



149



150



151



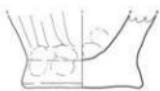
152



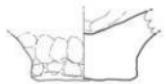
153



154



155



156

0 3-1/2 10cm

図39 O区土器集中出土遺物2

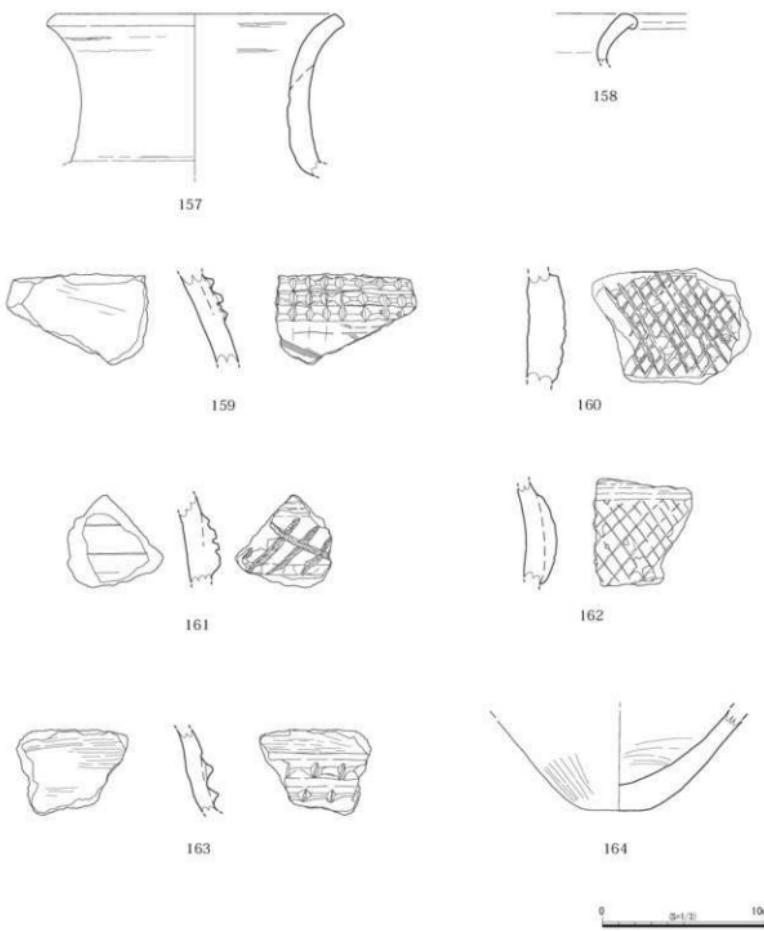


図40 O区土器集中出土遺物3

南へかけてゆるやかな斜面に堆積した状況であり、南北幅4mの範囲で出土が見られた。東西軸の範囲は調査区外のため、不明である。

過去の調査では、0区の北側の平坦地で竪穴建物跡および土器集中箇所が確認されている。土器集中箇所からは夥しい数の遺物が出土しており、密度・量ともに0区のそれとは比較にならない。そのため、0区で出土した遺物は、平坦地上に堆積したものが斜面地へ転落し、再堆積した可能性を考えた。

出土遺物（図38～49）

134は甕の口縁部である。全体的にぶい黄橙色に発色し、外面にはススの付着が見られる。径2mmほどの白色粒・褐色粒が含まれる。

135は甕の口唇部が一部だけ残存するもので、口縁部下に突帯を有する。突帯は剥落しており、貼り付け痕跡がみられる。径5mmの橙色粒が含まれる。

136は甕の口縁部で、外面にはススが濃密に付着する。破片中央には6条ほどのスス抜けがあり、吹きこぼれ痕跡と考えられる。この吹きこぼれ痕跡は突帯下方には見られない。

137は直立する口縁部をもつもので、内外面とも灰赤色に発色する。いわゆる「指宿色」である。ざらざらとした質感をもつ。

138は口縁部下に刻目突帯をもつ口縁部で、刻目の幅は約4cmである。強い横ナデによって突帯が貼り付けられたのち、刻目が施される。刻目には布目压痕がみられる。

139は口縁部が先細りするもので、形態から鉢の可能性もある。口縁部下1.5cmに補修痕跡と考えられる穿孔を2孔もつ。穿孔径は3mmほどで、穿孔同士の幅は1.7cmである。

140は硬質な焼成の甕である。内外面とも荒いミガキ調整がみられる。

141は摩滅が著しい甕で、調整は不明瞭である。口縁部が外反し、口縁部下に突帯をもつ。

142は甕の突帯部で、斜め方向のナデ調整を行ったのちに、突帯が貼り付けられる。突帯はユビオサエが残る絡繆突帯である。

143から156は甕の脚部である。143はぶい黄橙色に発色するもので、脚部のくびれは少ない。底部内面にはコゲが濃密に付着する。大型甕の脚部と考えられる。

144はスクート状に開く脚部で、接地面が平坦となる。灰褐色に発色する。

145は脚部が内湾する形態のもので、脚部内面の天井形態は平坦になる。器壁表面はひび割れたように剥落している。径2mmほどの白色粒や褐色粒を含む。

146は精良な胎土で作られた脚部で、脚端部はそり返った形態を呈する。脚端部および底部内面には黒斑が見られる。

147は器壁が厚い脚部で、端部は丸みをもつ。脚部内面は丁寧なナデ調整がみられる。底部内面には橙色の物質が付着している。

148は断面が三角形状になる脚部で、底部厚が2.6cmと厚い。脚端部には粘土を付加した痕跡が多く見られる。

149は断面が三角形状になる脚部で、内外面とも丁寧なナデ調整がみられる。脚端部には黒斑がある。

150は大型の甕脚部で、脚部径9.9cmを測り、重い。脚部形成時の痕跡がみられ、粘土を付加した部分で剥落している。脚部内面を見ると、粘土を付加した部分でひび割れがあることから、一度成形した面で剥がれやすくなっていることが考えられる。

151はぶい橙色に発色する脚部で、脚部内面は成形時のユビオサエが明瞭に残る。底部内面にはコゲが付着する。

152は精良な胎土で作られた脚部で、全体的に黒みがかり、ミガキ調整がみられる。胎土は灰褐色で、径1mmの白色粒を多く含む。

153は脚部径4.6cmを測る小型の脚台である。脚部内面には黒斑がみられる。全体的に成形時のユビオサエが残る。

154は分厚い底部をもつ脚台で、脚部径9.6cmを測る。上底となる底部形態に近く、底面はヘラケズリがみられる。底面中央はヘラケズリ後、ユビオサエが明瞭に見られる。

155は平底をもつもので、底部径7.3cmを測る。底部外面上には黒斑がみられる。

156は、外面には成形時のユビオサエが多く見られる。底部からの立ち上がりは大きく聞く。径3mmほどの白色粒を含む。

157は大型甕の口縁部で、口縁部付近でラッパ状に大きく聞く。口径17.2cmを測る。表面はひび割れが多く見られ、特に内面は剥落が著しい。径2mmほどの白色粒を多く含む。

158は小型～中型甕の口縁部で、口唇部は外側に折り返しが見られる。口唇部上方に平坦面をもつ。胎土は精良で、橙色に発色する。

159は甕の突帯で、3条以上の多条突帯に刻目が

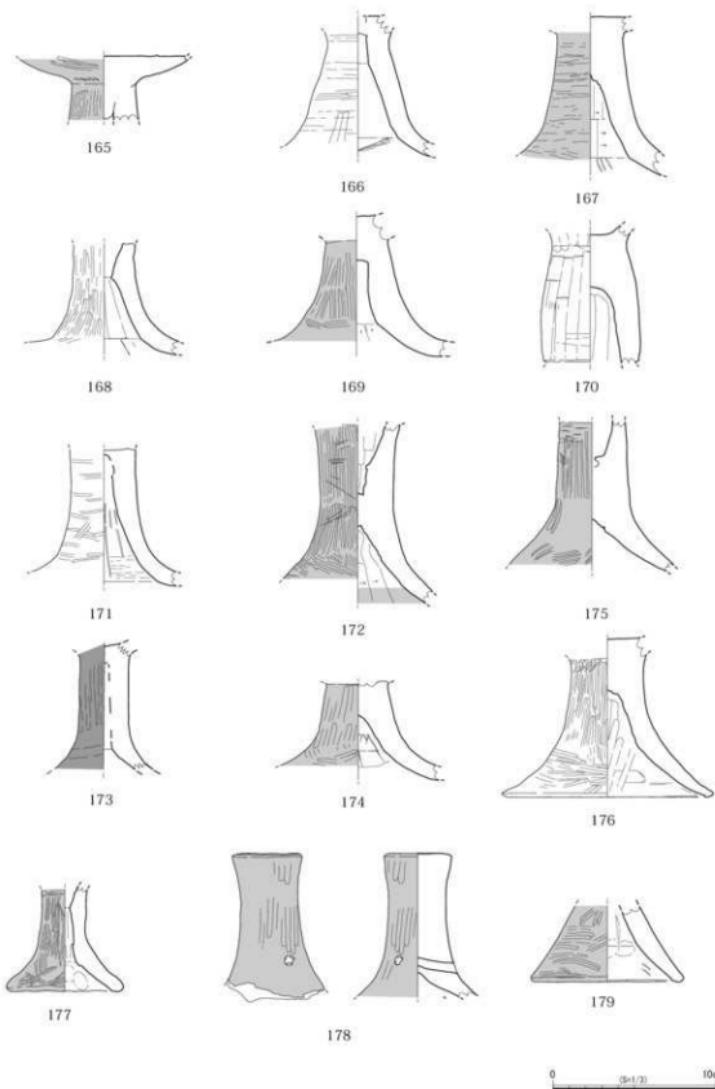


図41 O区土器集中出土遺物 4

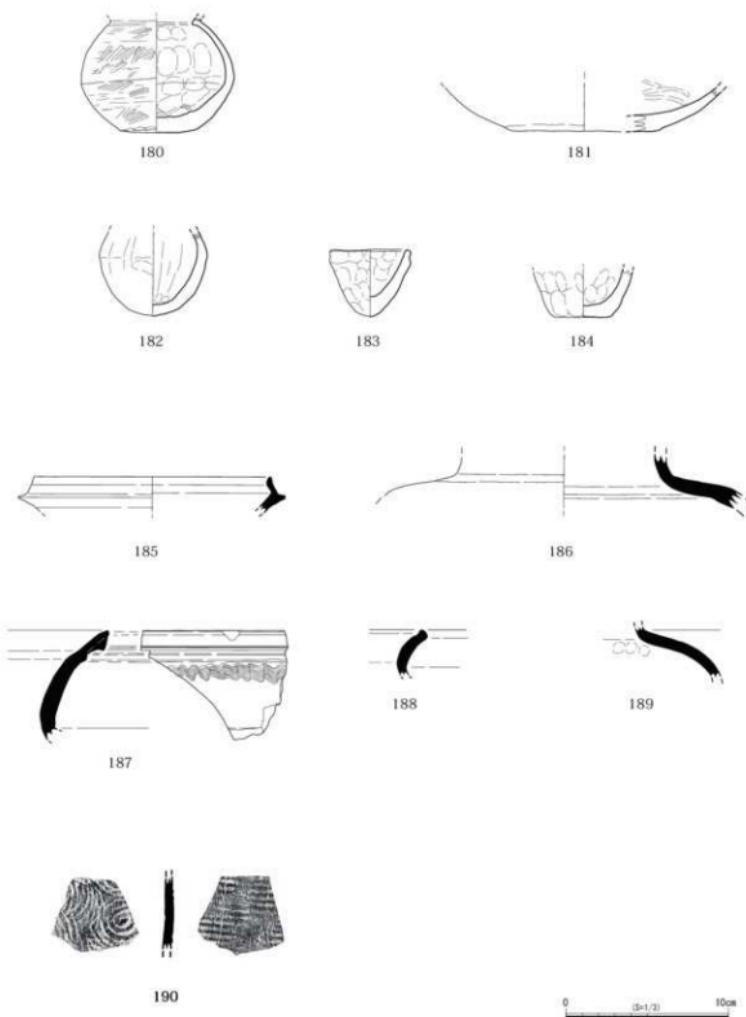


図42 O区土器集中出土遺物5

施されたものである。多条突帯は断面が三角形ないし台形となる。

160は大型壺にみられる幅広突帯で、幅6.8cmの粘土帯が貼り付けられる。表面には斜格子文が施される。

161は突帯幅4.0cmを測る突帯片で、幅広突帯と比してやや狭い。表面には斜格子文が施され、刻目には布目压痕がみられる。

162は突帯幅5.7cmを測る幅広突帯で、表面には斜格子文がみられる。突帯の上下端は刻み後の丁寧なヨコナデ調整で仕上げられる。内面は剥落が著しい。

163は見かけ多条突帯と呼ばれるもので、粘土帯を貼り付けた後に、横方向のナデによって突帯が作出されている。2条以上の突帯があったと考えられ、突帯作出後に刻目を施す。刻目には布目压痕がみられる。

164はゆるやかな平底をもつ壺底部で、底端部はシャープさを持たない。内面には一部ミガキがみられる。

165から179は高杯である。165は杯部と脚部の接合部で、杯部の立ち上がりで欠損している。内外面とも赤色顔料の塗布がみられる。

166は直線的に聞く脚部で、筒部内面はヘラケズリ後、丁寧なナデが施される。外表面は著しく剥落している。

167は丁寧なミガキ調整がみられる高杯で、筒部は横方法のミガキ調整がある。屈曲部内面はヘラケズリがある。

168は筒部が簡抜式に欠損しているもので、外表面は灰褐色に発色する。外表面は縦方向のミガキ調整で仕上げられる。脚部内面にはヘラケズリが明瞭に見える。

169はゆるやかに聞く脚部で、外表面には赤色塗彩がみられる。内面には、斑上の赤彩がみられる。

170はエンタシス状の筒部をもつ脚部で、内外面とも黄褐色に発色する。内面はヘラケズリがみられる。径2mmの褐色粒を含む。

171はぶい赤褐色に発色する脚部で、他の高杯と比してやや暗い。外表面は摩滅が著しい。内面はヘラケズリがみられる。

172は長い筒部をもつ脚部で、外表面には赤色塗彩がみられる。筒部は縦方向の丁寧なミガキ調整、屈曲部から斜め方向のミガキ調整がみられる。

173は黒色に発色する高杯の筒部で、筒部径3.0cmを測る。断面も黒褐色を呈し、径1mmほどの褐色粒を含む。

174はハの字に聞く脚部で、外表面には赤色塗彩がみられる。端部は摩滅している。

175は筒部径4.0cmを測る脚部で、筒部外表面は縦方向のミガキがある。杯部との接合面で剥落しており、粘土

塊を充填して接合したと考えられる。脚部内面はナデ調整後、直線を組み合わせた線刻がみられる。

176は接地面が平坦となる脚部で、脚部径13.0cmを測る。脚接合部周辺は連続した斜め方向の爪跡がみられる。

177は脚部径7.0cm、脚部高6.2cmを測る小型高杯の脚部で、端部は厚みを持ちながら丸く収める。外表面には丁寧な赤色塗彩がみられる。

178は穿孔をもつ脚部である。穿孔径は5mmを測る。通常であれば、脚内部に達するように穿孔が施されるが、本資料は筒部を突き抜け、反対の外表面まで及んでいる。また、杯部との接合面は、破断面ではなくナデ調整などがみられることから、杯部と接合していた資料とは考えられない。そのため、高杯の脚部としてではなく、土製品として用いられた可能性が考えられる。

179は直線的に聞く脚部で、赤色塗彩後の黒斑が器面全体に見える。

180は丸い脚部をもつ壺で、胴部最大径9.5cm、底径4.7cmを測る。底部はレンズ底となる。底部内面はユビオサエにより歪みが目立つ。器面は摩滅が著しい。

181は大型の鉢で、底径9.0cmを測る。内面は明橙色に発色する。

182は小型壺あるいは小型壺である。胴部最大径6.7cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

183はミニチュア土器である。底部は尖底氣味になる。器面全体はユビオサエが明瞭に残る。口唇部は一部のみ残存しており、口径4.9cmを測る。

184は小型壺あるいはミニチュア土器の底部と考えられる。器面全体にユビオサエが残る。底径3.4cmを測る。

185は須恵器杯身の口縁部で、口径は復元径14.6cmを測る。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口唇部は丸みをもつ。

186は須恵器費の頸部で、頸部径13.5cmを測る。肩部にはカギ目が見える。

187は須恵器費の口縁部で、口縁部下に一条の突帯をもつ。口唇部は非常にシャープな作りである。突帯下には10本のヘラ描波状文がみえる。

188は須恵器の小型壺の口縁部である。焼成は軟質で、灰白色に発色する。内面は摩滅が著しい。

189は須恵器費の肩部片で、丸く膨らむ。肩部には自然軸が付着する。

190は須恵器胴部片で、内面は同心円當て具、外表面は平行タタキがみられる。

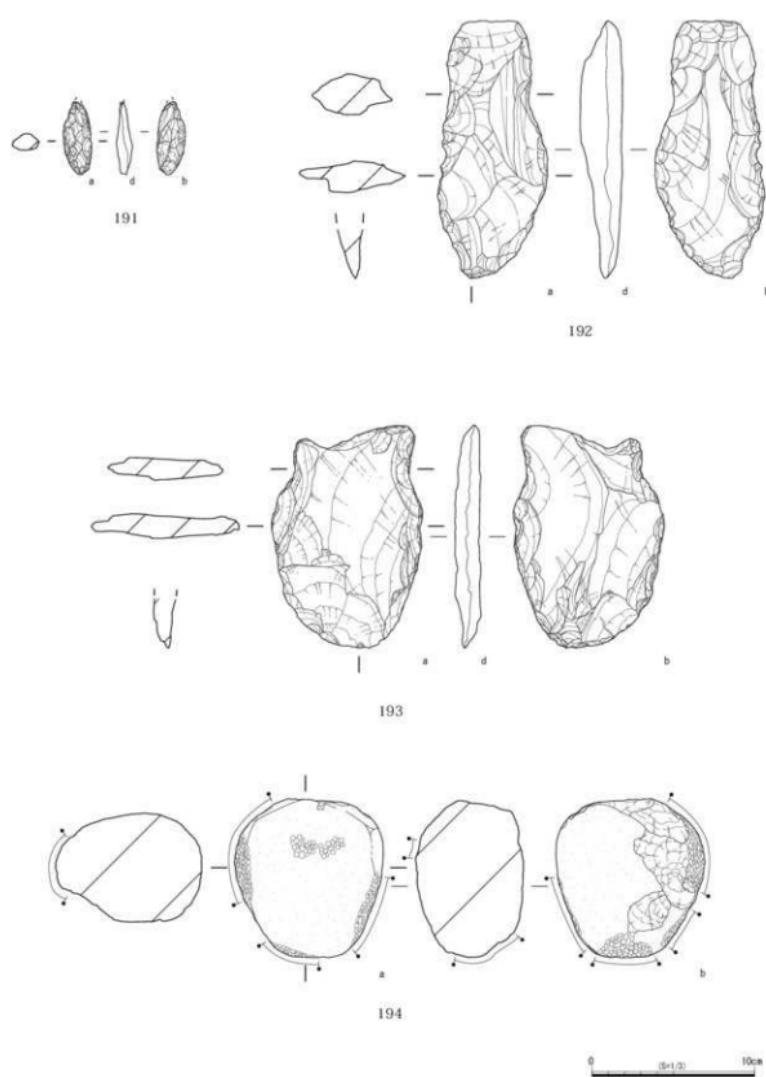


図43 O区土器集中出土遺物6

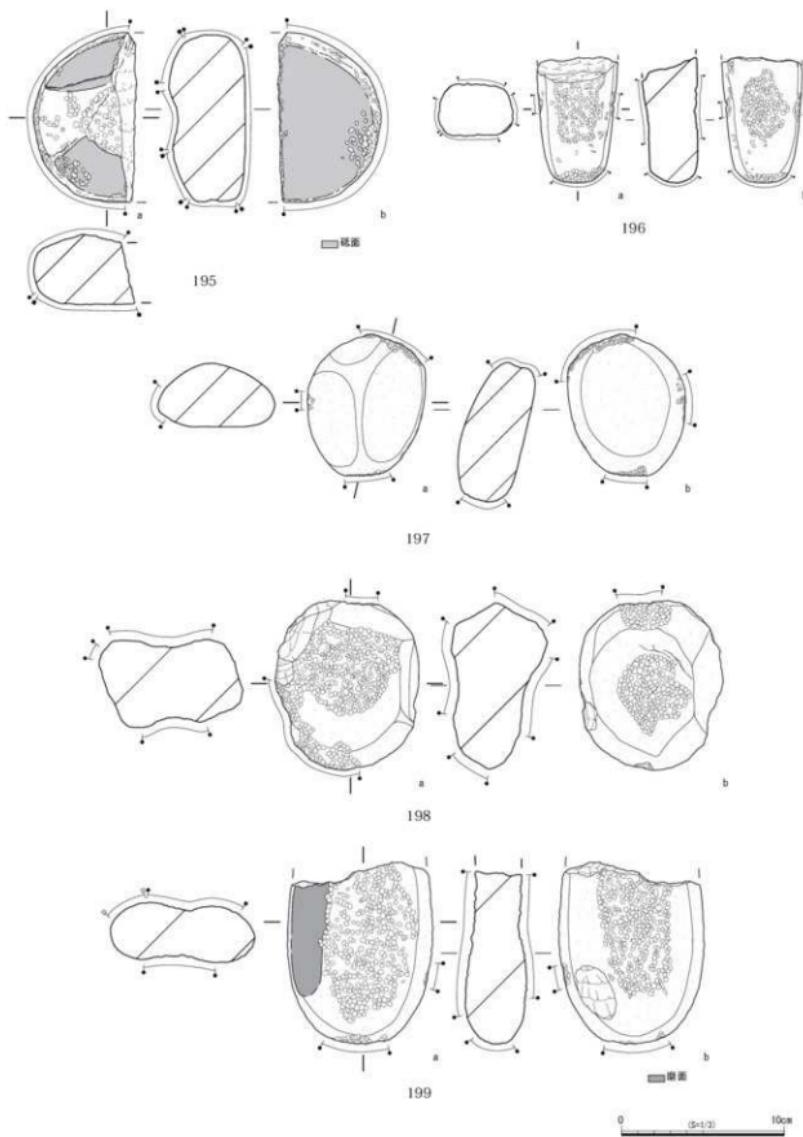


図44 O区土器集中出土遺物 7

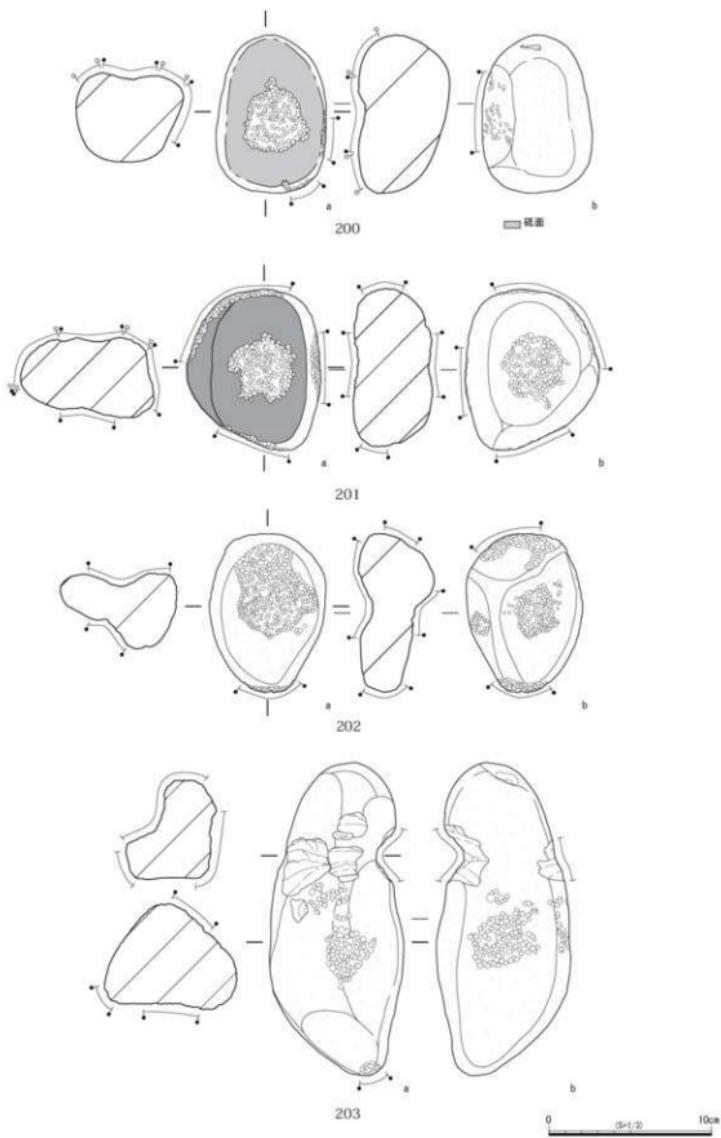


図45 O区土器集中出土遺物8

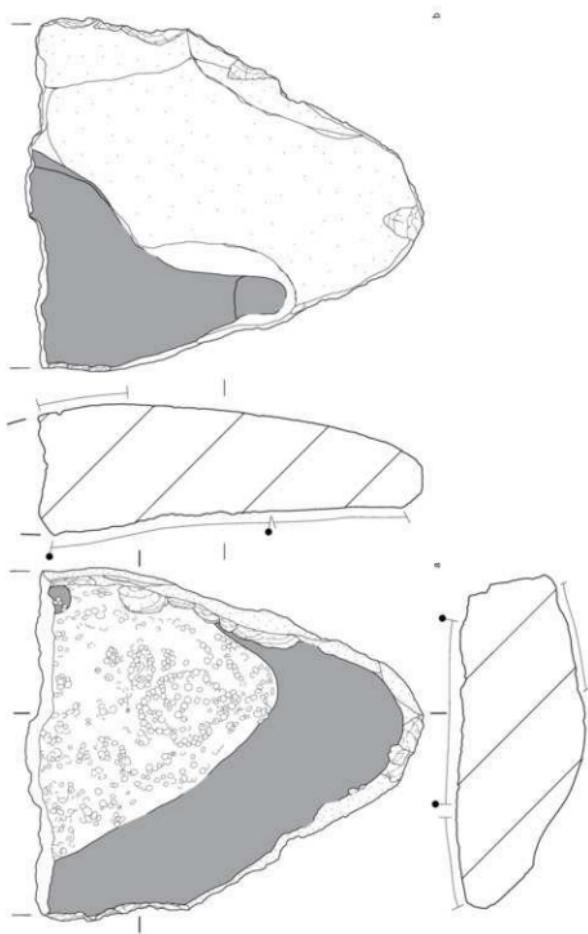
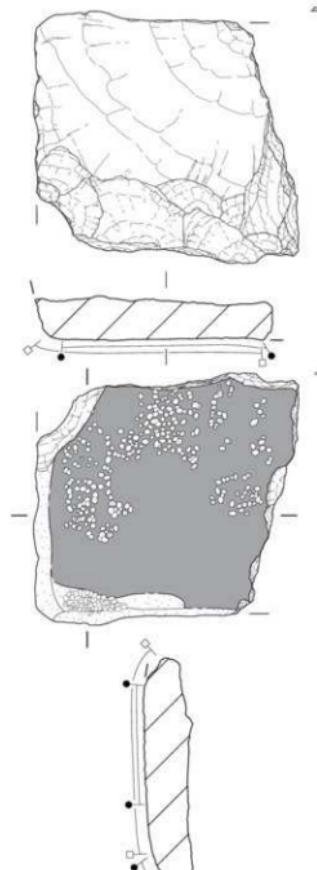


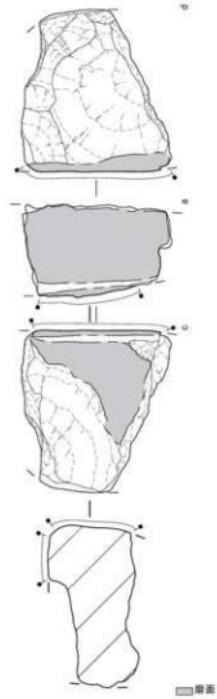
圖 46 O 区土器集中出土遺物 9

-57-



205

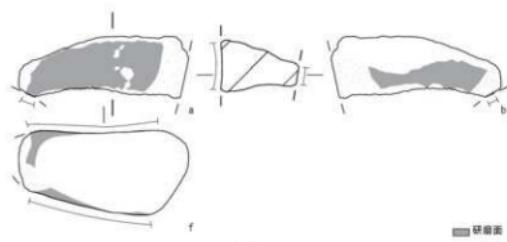
■磨面



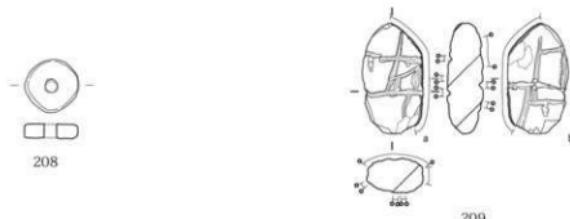
206

0 (3×1/3) 10cm

図47 O区土器集中出土遺物 10

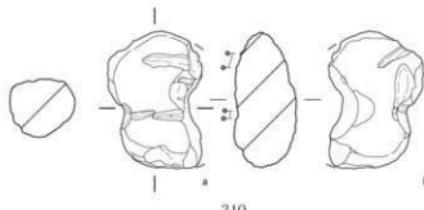


207

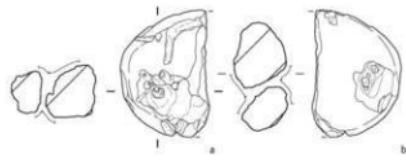


208

209



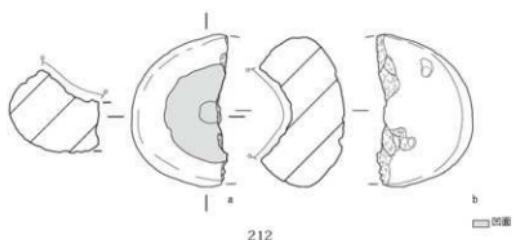
210



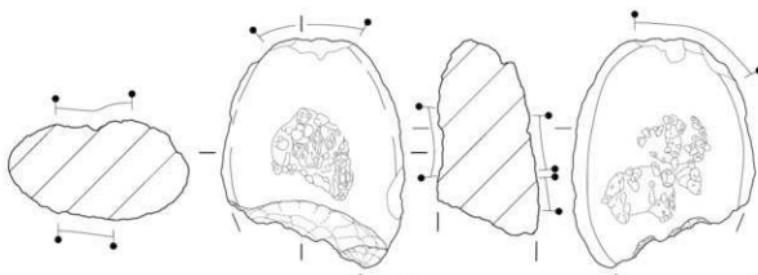
211



図48 O区土器集中出土遺物 11



212



213



214



215

0 (3×1/2) 10cm

図49 O区土器集中出土遺物12

191は両面加工石器である。a面・b面に丁寧な二次加工が施され、断面がレンズ状を呈している。

192は安山岩製の扁平打製石斧である。b面に素材剥片の主要剥離面が残されており、荒い周辺加工が施されている。

193は安山岩製の打製石斧である。a面中央部に素材剥片の主要剥離面が認められ、基部側に浅い抉りを意識した周辺加工が施されている。

194は厚みのある礫のほぼ全周縁に敲打痕が認められる敲石である。b面右側部には大きな剥離痕があり、その剥離面を敲打面として利用されている。

195はa面右側部がa面上部からの加撃により欠損した凹石である。a面中央部に敲打による凹面が認められ、また、a面・b面に磨面が認められる。特に、b面の磨面は平坦である。

196は棒状の敲石であり、上部が欠損している。a面下部に顕著な敲打痕が認められる。また、a面・b面中央部にも敲打痕が確認されている。

197はやや扁平な不整形な敲石である。a面上下両端と左側面に敲打痕が認められる。

198はa面・b面に敲打による凹面が認められる凹石である。また、a面上下両端にも敲打痕が認められる。

199はa面上部が欠損している凹石であり、平坦な梢円形を呈しているものと考えられる。ほぼ両面全面に顕著な敲打痕が認められる。a面左側面には砥面があることから、多目的な利用が窺えられる。

200はa面中央部に敲打による凹面が認められるものである。また、a面中央部には平坦な磨面が認められる。また、a面右側部に敲打痕が認められる。

201はa面・b面に敲打による凹面が認められる凹石である。また、a面中央部には平坦な磨面が認められる。

202は不整形を呈した凹石である。a面・b面中央部に敲打による凹面が認められ、さらにa面上下端部に敲打痕が認められる。

203はa面・b面中央よりやや下部に敲打による凹面が認められるものである。この石器のa面上部に意図的な窪みを目的とした抉入状の剥離が数枚確認できることから、男性器をイメージした陰陽石器と考えることも可能である。

204は平坦面を有する大型な礫を用いた台石である。a面上部は欠損している。a面中央部から上部にかけて敲打痕が顕著に認められる。また、a面左側面から下部、b面左側面上部に磨面が認められる。

205は台石の使用面のみが残存する台石片であり、破損面（b面）には、b面右下側部からの加撃による剥離面が大きく認められる。また、b面左側面にはa面側からの加撃による大きな剥離面が多く認められる。a面中央部には磨面と敲打痕が認められる。

206は砂岩製の砥石で、a面とc面左側面に砥面が認められる。各面で確認される剥離面からa面上下両端とb面が欠損しているものと考えられる。

207は砂岩製で、a面上下両端が欠損している砥石である。砥面はa面とb面に認められ、断面が曲面を呈している。

208は円形の軽石製品で、中央に8mmの穿孔をもつ。厚みは8mmを測る。穿孔部には組れなどの痕跡はみられない。表裏面とも丁寧な研磨が観察できる。

209はa面左側面が欠損している軽石製加工品である。a面左側面とその対面となるb面右側面に浅い穿孔が施されている。また、a面左端部には2条の短い線刻が施されている。さらに、a面中央部には斜方向の線刻が3条ある。両面とも意図的な整形と研磨されていることが確認できる。その形状から魚形をイメージされたものと推測することができる。

210は軽石製加工品で、欠損しているが中央に円形の穿孔があったものと考えられる。断面形は長楕円形で、中央に膨らみをもつ線刻が施されている。

211は棒状工具により穿孔されている軽石製加工品である。a面左側面下部に断面観察によるとやや斜め方向の穴が穿孔されている。用途は不明である。

212は軽石製加工品で、a面中央部はボウル状の凹面が認められるものである。丁寧な加工により整形されており、最終的な形状をその目的にしていることが推測できる。a面右側面は欠損しているが、その欠損後、数枚の剥離が施されており、b面左側面で観察できる。

213は長楕円形の軽石製凹石で、a面とb面に敲打による凹面が認められるものである。また、a面上部に敲打痕も認められる。a面下端部は欠損している。

214は鉄錆の茎部で端部は欠損している。断面形は長方形を呈する

215は長頸瓶の先端部で、端部付近で屈曲している。断面は方形を呈する。

古墳時代～古代包含層出土遺物

216は甕の口縁部で、口縁部下に刻目突帯を有する。刻目には布目圧痕が残る。外面全体にススが付着する。



216



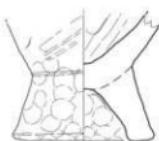
217



218



219



220



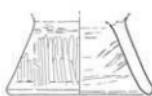
221



222



223



224



図50 古墳時代～古代包含層出土遺物1

217は壺の口縁部で、口唇部は上方に面をもつ。口縁部下には上下端を丁寧な横ナデで仕上げる断面三角突帯があげぐる。

218から232は壺の脚部である。

218はハの字を呈する脚部で、接地面は平坦になる。脚端部は内面に突出を持つ。脚部径9.1cmを測る。

219は大型壺の脚部で、脚端部は欠損である。底部径は8.1cmを測り、脚接合部はナデ調整がみられる。一

部ミガキ状になる。底部内面にはコゲが厚く付着する。

220は直線的に開く脚部で、接地面は平坦になる。脚部外面は成形時のユビオサエが多く残る。

221は端部に向かって先細りする脚台で、脚部径10.1cm、脚部高3.6cmを測る。脚部外面は赤みをおびており、表面は摩滅しているが横方向のミガキ調整がみられる。脚部内面の天井形態は平坦になる。

222は大型壺の脚部で、器壁は分厚い。脚部外面に

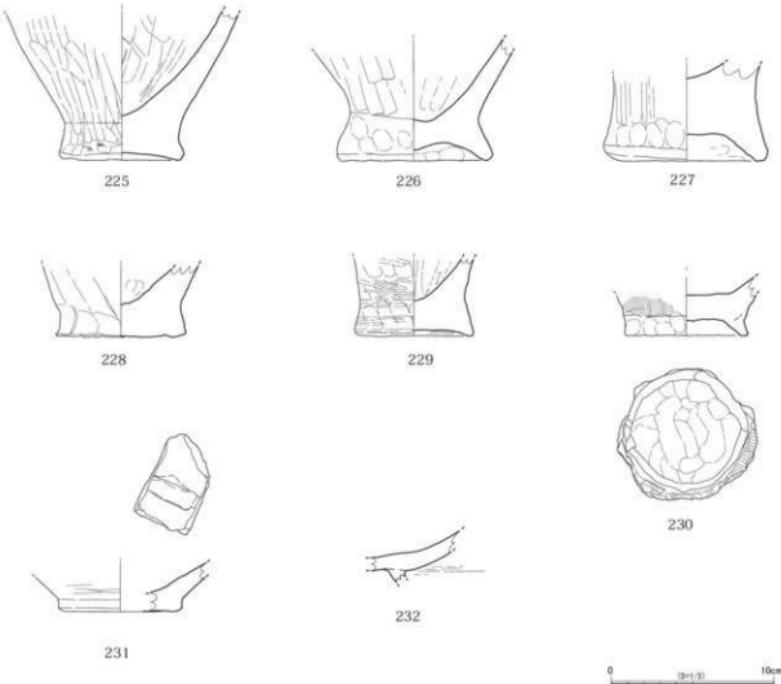


図51 古墳時代～古代包含層出土遺物2

は成形時のユビオサエやナデ調整が残る。

223は小型甕の脚部で、脚部径6.6cmを測る。器壁が薄く、シャープな作りである。脚端部周辺には粘土紐を帯状にめぐらしており、接合縫が明瞭に残る。脚部内面は丁寧なナデ調整で仕上げられ、黒斑が見られる。

224は直線的に開く甕の脚部で、脚部外面には丁寧な縱方向のミガキがみられる。

225は平底に近い甕の脚部で、脚部内面は丁寧なナデ調整がみられる。外面は赤褐色に発色する。脚部内面は縱方向のミガキ調整がみられる。

226は短く開く脚部で、脚部内面の天井形態は下方へ突出する。脚端部にはユビオサエが残る。

227は柱状の脚部で、脚部径9.5cmを測る。外面には黒斑が見られ、一部剥落している部分がある。底面の器壁は分厚く、重い。

228はくびれた平底の脚部で、底面は摩滅している。脚端部は粘土の盛り上がりがみられる。白色粒と黒色粒を多く含む。

229は上げ底式の脚底部で、脚部内面は全面に黒斑がみられる。黒色粒を多く含む。外面に使用痕跡はない。

230は黄土色に発色する脚部で、脚部高は1.0cmと低い。脚部もつまみ出したように作られており、内面には工具ナデおよびユビオサエが明瞭に残る。脛下部外面には縱方向のハケ調整がみえる。

231は台状に突出した底部をもつもので、底径6.8cmを測る。壺の可能性もある。

232は丸みをもつ甕の脚部である。黄土色に発色する。

233は外反する壺の口縁部で、口径16.9cmを測る。端部は丸みをもつ。

234は小型二重口縁壺の口縁部で、内外面とも赤色

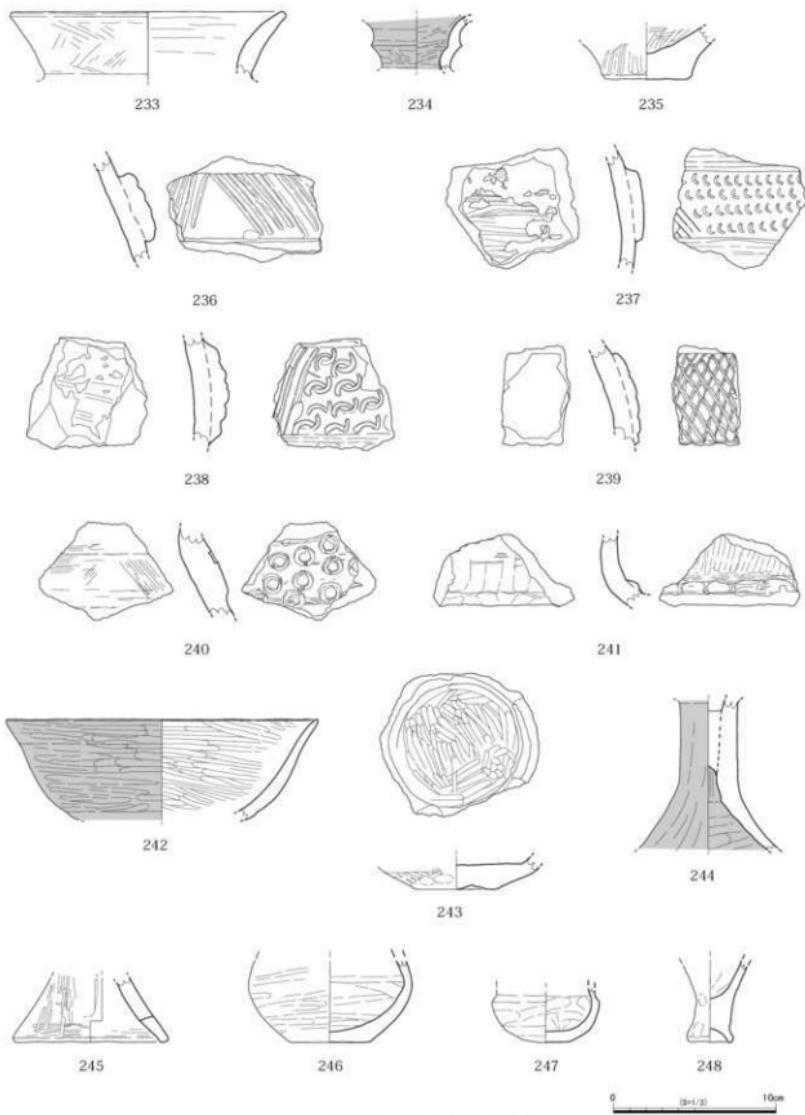


図52 古墳時代～古代包含層出土遺物3

0 (3-1/2) 10cm

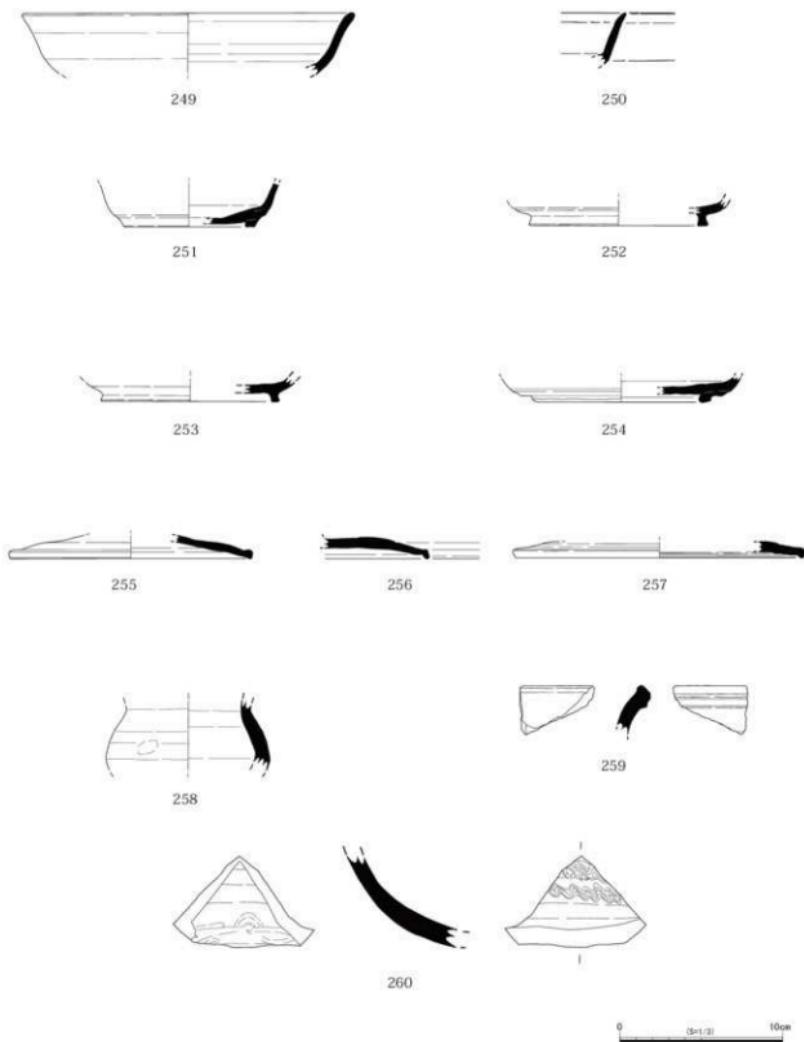


図 53 古墳時代～古代包含層出土遺物 4

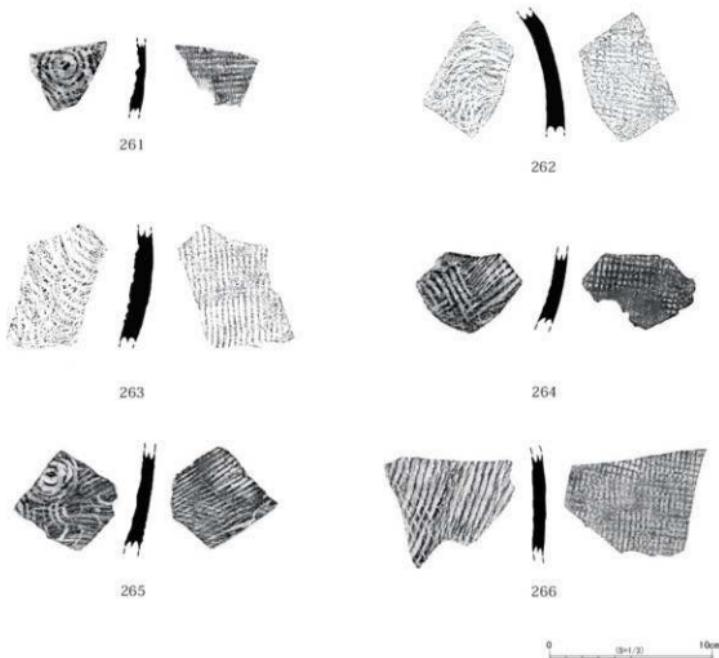


図 54 古墳時代～古代包含層出土遺物 5

塗彩がみられる。

235 は平底の甕で、底径 5.0cm を測る。底端部は丸みをもつ。底部内面は赤く発色する。

236 は幅広突帯部で、幅 4.4cm を測る。突帯表面には斜線を鋸歯状に組み合わせた文様が施され、ひとつの鋸歯単位は 8 条 + a で構成される。突帯厚も 1.0cm と厚い。内面は全面剥落している。

237 は幅広突帯片で、幅 4.7cm を測り、上下端とも丁寧な横ナデがみられる。突帯表面には径 0.6cm を測る半裁竹管文と鋸歯文が施される。半裁竹管文は上下 4 段に横位に配置されており、それぞれの施文数は少なくとも 1 段目 12, 2 段目 12, 3 段目 11, 4 段目 8 つ施されていることがわかる。内面は一部剥落している。

238 は幅広突帯片で、幅 6.5cm を測る。上下端とも横

ナデ調整がみられる。突帯表面には、複数の鋸歯文の空白部分に半裁竹管文を入子状に組み合わせた文様が施される。半裁竹管文の径は約 1.6cm を測る。237 の半裁竹管文と比して大型である。内面は剥落している。

239 は幅広突帯片で、突帯幅 6.0cm を測る。表面には斜格子文が施される。全体的に褐色に発色する。内面は剥落する。径 2 mm の白色粒が含まれる。

240 は大型壺の頭部に施された幅広突帯で、傾きは疑問である。幅 4.2cm を測り、半裁竹管文を合わせ口に組み合わせ、竹管文を表現している。この竹管文は径 1.3 cm を測る。施文後横ナデを施しており、文様が一部消されている。

241 は壺の頭部片である。頭部外面には突帯がめぐり、表面には半裁竹管文が刺突状に施される。刺突後のナデ

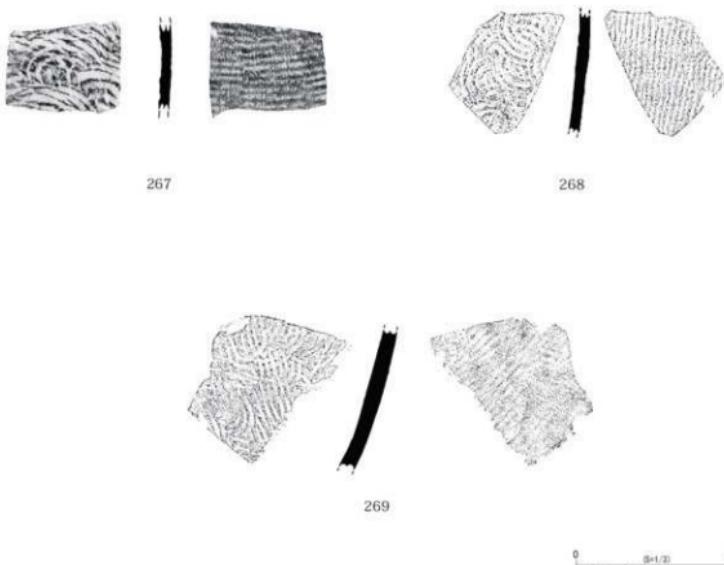


図55 古墳時代～古代包含層出土遺物6

により一部消えている。

242は口縁部が外反する楕円形高杯の杯部片である。口径19.1cmを測る。杯下部には凹線状の段をもつ。外面は赤色塗彩がみられ、暗赤褐色に発色する。内面には赤色塗彩はみられないが、口縁部上端から3mmだけ塗布される。

243は高杯の杯部片で、杯部底面部分で欠損している。外面は灰褐色に発色する。内面は細かいミガキ調整がみられる。

244は高杯脚部で、内外面とも赤色塗彩がみられる。筒部径3.5cmを測る。外面は赤色塗彩の剥落が著しい。

245は高杯脚部片で、方形透かしがみられる。内外面とも黒斑がみられる。

246は胴部が丸みをもつ壺で、底部は平底となる。底径4.9cm、胴部最大径10.0cmを測る。器面全体が灰白色に発色する。底部外面はヘラケズリ調整がみられる。

247は小型壺の底部～胴部片で、底部はゆるやかな平底を呈する。底部内面には連続する工具ナデ痕跡がみられる。

248はミニチュア土器の脚部～胴部で、脚部径2.7cmを測る。器面全体にユビオサエが明瞭に残る。

249から269は須恵器である。249は杯の口縁部で、口径20.3cmを測る。外面は暗灰色に発色する。

250は口縁部が先細りする杯である。器面全体が灰白色に発色する。やや軟質である。径1mmほどの白色粒を含む。

251は杯の高台部分である。高台径8.0cmを測る。高台は接地面で平坦部をもつ。

252は杯の高台部分である。高台は外方へ突出している。立ち上がり部分に凹線をもつ。外面はやや暗く発色する。

253はオリーブ灰色に発色する杯の高台部分で、高

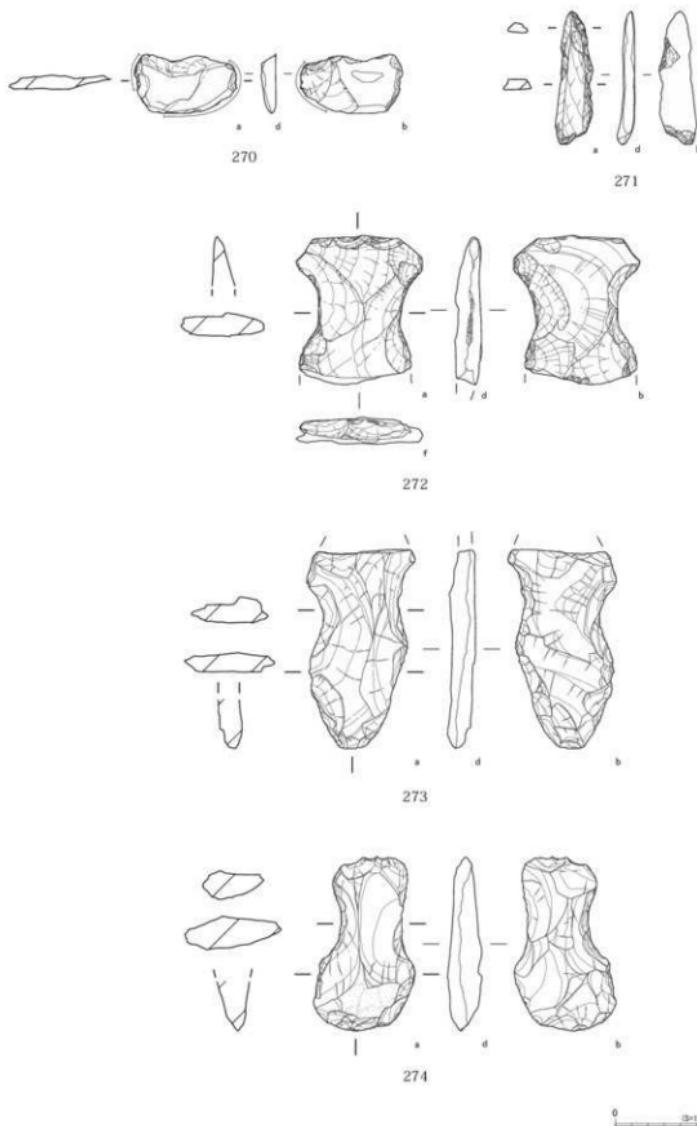
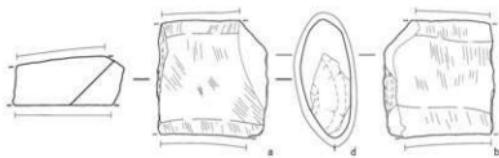
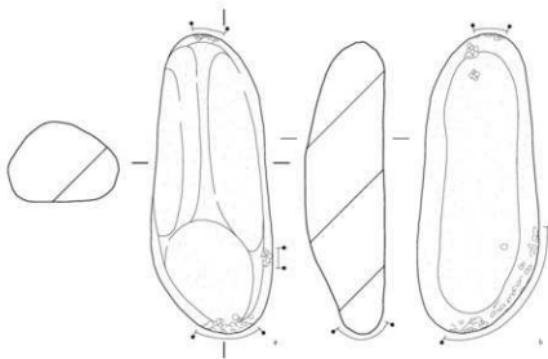


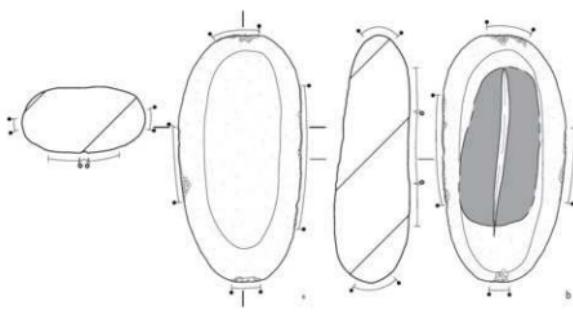
図 56 古墳時代～古代包含層出土遺物 7



275



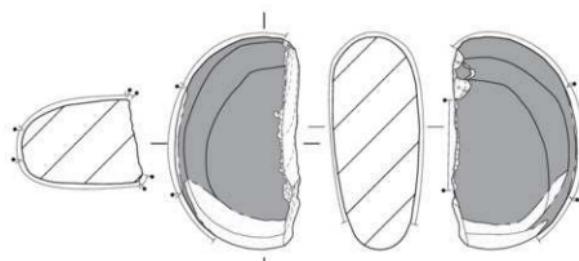
276



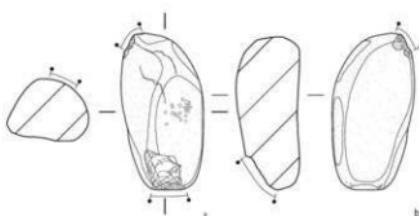
277

0 (3:1) 10cm

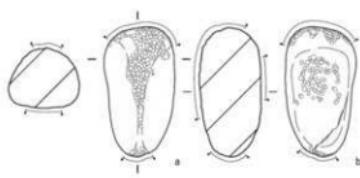
図 57 古墳時代～古代包含層出土遺物 8



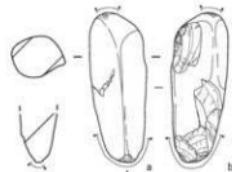
278



279



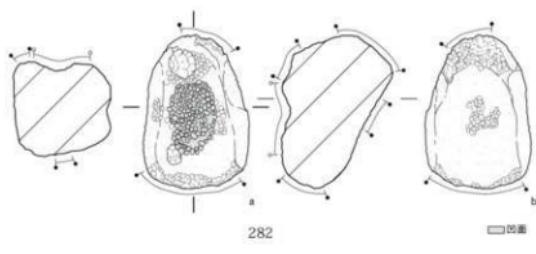
280



281

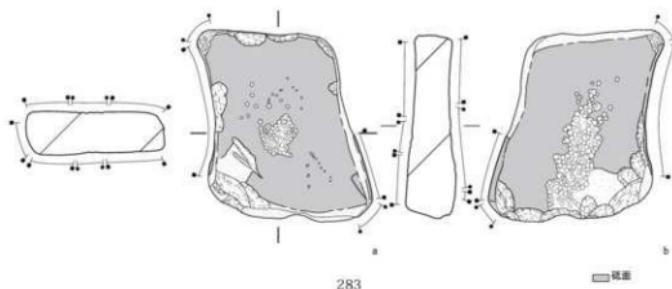
0 (5-1/2) 10cm

図58 古墳時代～古代包含層出土遺物 9



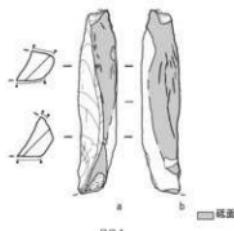
282

■ 図面



283

■ 図面



284

■ 細面

0 (5x1/2) 10cm

図 59 古墳時代～古代包含層出土遺物10

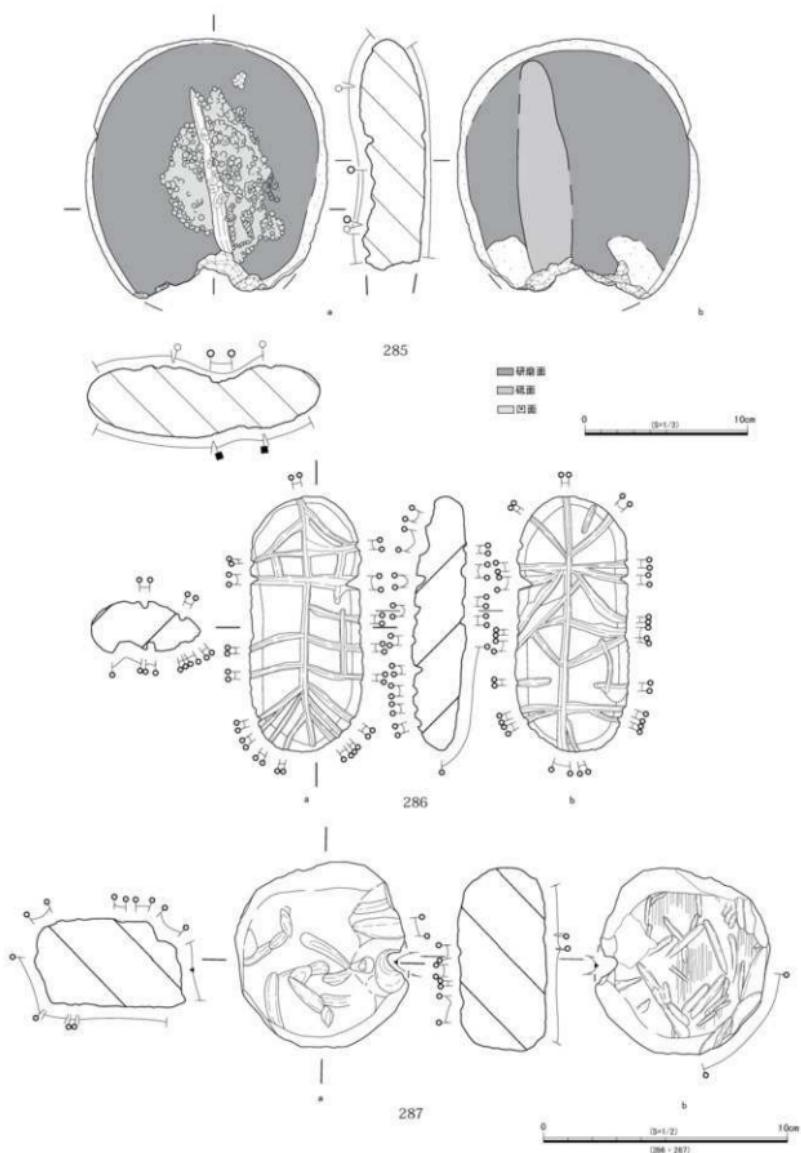


図 60 古墳時代～古代包含層出土物11

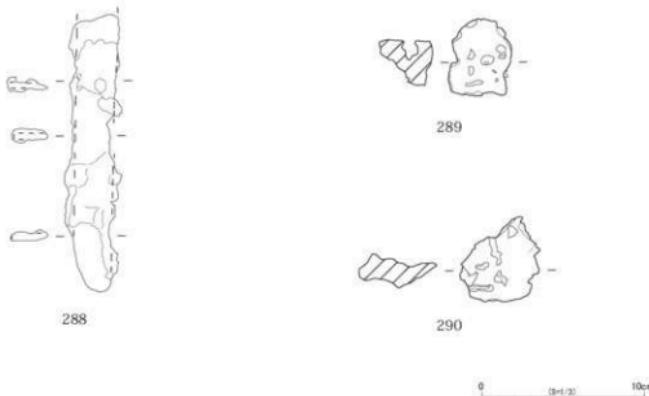


図 61 古墳時代～古代包含層出土遺物II

台径 11.0cmを測る。やや軟質である。

254 は滑らかな回転ナデ調整がみえる杯で、明緑灰色に発色する。杯部内面はケズリ調整の痕跡がみえる。

255 は杯蓋の破片である。端部は丸みをもつ、明オリーブ灰色に発色する。

256 は杯蓋で、端部が嘴状になる。口径は復元できなかった。257 も同様である。

258 は小型壺の頸部～胴部片である。傾きは疑問である。

259 は須恵器甕の口縁部片である。全体的に摩滅している。外面は灰色に発色する。

260 は須恵器甕の頸部片である。断面は明黄褐色、外面は灰白色、内面は明赤褐色に発色する。外面には櫛描波状文が2条施される。

261 は胴部片で、外面は擬格子目タタキ、内面は同心円当て具痕がみられる。外面には自然釉が付着する。

262 は胴部片で、底部付近の可能性もある。外面は格子目タタキ、内面は連続した同心円当て具痕がみられ、内面は磨り消されたようにみえる。外面は黄褐色に発色する。

263 は胴部片で、外面は格子目タタキ、内面は連続した同心円当て具痕がみられる。外面は摩滅している。

264 は黄白色に発色する胴部片で、軟質である。外面は摩滅しているが、格子目タタキ、内面は平行當て具痕がみられる。

265 は胴部片で、外面には平行タタキ、内面には同心円当て具痕がみられる。同心円は径 3.5cmを測る。

266 は黄白色に発色する胴部片で、外面は格子目タタキ、内面は平行當て具痕がみられる。軟質である。

267 は外面平行タタキ、内面は同心円当て具痕がみられる。器壁は灰白色である。

268 は胴部片で、全体的に灰色に発色する。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕がみられる。同心円の径は約 4.0cmである。

269 は外面は細い平行タタキ、内面は平行當て具痕と同心円当て具痕が組み合わせて見られる。全体的に摩滅している。

270 は使用痕のある剥片である。a面右側縁と左側縁に使用痕が認められる。

271 は周辺加工石器である。b面に自然面を置き、a面に縱方向の剥離面が認められる素材を用いて、周辺加工が施されている。a面右側面は先端部から基部にかけて加工が施されている。

272 は扁平打製石斧の基部である。b面に素材剥片の主要剥離面が大きく残されている。素材剥片の打面部をb面左側面に置き、両側面から調整が施されている。調整は大まかな剥離後、細かな剥離が施されている。基部は主に a面側に調整が行われている。刃部は、a面側からの加撃によって欠損している。

273は扁平打製石斧である。基部は欠損している。a面・b面中央部には、石斧の素材剥片の剥離面が大きく残されている。また、両側からの大まかな剥離後、周辺からの加撃により形状を整えている。基部に抉りが入れられている。刃部には使用痕が認められる。

274は扁平打製石斧である。a面下端面に自然面が残されている。a面は両側面から荒い剥離によって自然面を除去したのち、周辺加工を施している。また、b面も荒い剥離後、基部側両側面に抉りが入れられている。刃部には使用痕が認められる。

275は磨製石器である。a面左右が欠損しているが、石剣状を呈している。a・b両面に、線状研磨痕が認められる。

276は安山岩製の敲石で、長さ18.4cmを測る。大型であり、a面上下両端に敲打痕が認められる。

277は敲石である。a面の上下両端と左右側面に敲打痕が認められる。また、b面中央には磨面と溝状の砥面が見つめられる。

278は磨石である。風化の状況から、元々、円錐の一部が欠損したものを作成している。a面右側面は欠損面ではない。a面・b面に顕著な磨面が認められる。

279は頁岩製で、上下両端に敲打痕が認められる敲石である。a面下端部には敲打による剥離痕が認められる。

280はa面上下両端とb面中央部の平坦面に敲打痕が認められる敲石である。

281は上下両端に敲打痕が認められる敲石であり、棒状を呈している。b面下部と左側面上部には、敲打による剥離痕が認められる。

282はa面中央部に敲打による凹面が認められる凹石である。a面上下両端に敲打痕が認められる。

283は台石である。不整形な扁平な礫を素材として、a面・b面の両面に磨面が認められ、また、中央部付近に敲打による敲打痕が認められる。b面下端部にはa面側からの加撃による連続した剥離痕がある。

284は砥石片である。a面左側部は欠損しているため本来の形状は不明であるが、両面に顕著な砥面が認められる。

285は凹石である。a・b面は磨面が認められ、a面中央部に敲打による凹面が認められる。b面左側面には顕著な磨面があり砥石として利用されていたことが窺える。下端部は欠損している。

286はa面・b面に縱位・横位・斜位の線刻が顕著に施された軽石製加工品である。棒状工具による線刻に規則性があるように看取できるが、完全なシンメトリーではない。また、a面・b面の線刻の刻まれ方も同じではない。a面・b面の区画線としては、ほぼ真ん中にある縱位の線刻と、中央よりやや上部に位置する横位の線刻が抽出できそうである。特に、後者の横位の線刻は他の横位より深く刻まれていることから、全体的な形状を整形する意図も看取できる。仮に、橢円形を呈した扁平な軽石の上部よりに横位の線刻を刻むことで、男性性器をイメージした陰陽石器として整形されたものと考えることも可能である。

287はa面に穿孔と、両面に棒状工具による線刻が施された軽石製加工品である。ほぼ円形を呈した軽石のa面右端に穿孔が施されている。また、b面には磨面も認められる。

288は残存長16.6cmの刀子である。断面形は長方形を呈する。

出土遺物觀察表

植物觀察表 (土壤) 1

遺物觀察表（土器）2

遺物觀察表（土器） 3

編號	地點	區	層	形狀	直徑	厚度	容積	陶質		燒成		斷面		說明		地點	說明
								外	內	火候	時間	火候	時間				
101	820-80	1.8	3.1	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	144	144
102	820-81	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	149	149
103	820-842	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2042	2042
104	820-810	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2043	2043
105	820-8081	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2044	2044
106	820-80	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2045	2045
107	820-874	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2046	2046
108	820-801	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2047	2047
109	820-809	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2048	2048
110	820-805	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2049	2049
111	820-808	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2050	2050
112	820-84	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2051	2051
113	820-870	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2052	2052
114	820-842	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2053	2053
115	820-8077	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2054	2054
116	820-866	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2055	2055
117	71	1.6	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2056	2056
118	820-873	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2057	2057
119	820-8094	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2058	2058
120	820-809	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2059	2059
121	820-805	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2060	2060
122	820-806	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2061	2061
123	820-802	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2062	2062
124	820-814	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2063	2063
125	820-803	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2064	2064
126	820-813	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2065	2065
127	28	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2066	2066
128	34	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2067	2067
129	820-819	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2068	2068
130	820-802	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2069	2069
131	820-818	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2070	2070
132	820-804	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2071	2071
133	820-803	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2072	2072
134	820-801	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2073	2073
135	820-802	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2074	2074
136	820-803	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2075	2075
137	30	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2076	2076
138	44	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2077	2077
139	820-819	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2078	2078
140	25	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2079	2079
141	820-801	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2080	2080
142	820-802	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2081	2081
143	820-803	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2082	2082
144	820-804	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2083	2083
145	820-805	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2084	2084
146	820-806	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2085	2085
147	35	2.0	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2086	2086
148	26	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2087	2087
149	44	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2088	2088
150	820-819	2.0	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2089	2089
151	53	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2090	2090
152	820-801	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2091	2091
153	820-802	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2092	2092
154	46	1.8	3.0	圓盤	2.49	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2093	2093
155	34	1.8	3.0	圓盤	2.47	0.5	1.03	1.03	0.5	10.1	6.7	2300±140	2300±140	7.5±0.5	7.5±0.5	2094	2094

遺物觀察表(土器) 4

植物相察表(土壤) 5

植物相察表(土壤) 5

遺物觀察表（石器）

遺物番号	件 No	区	層	遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	取上 No
4	48	2区	1		輕石加工品	輕石	3.60	2.45	1.85	一括 105
76	33	2区	4		打製石器	頁岩	4.95	2.75	7.00	一括 81
77	28	1区	4		磨石	泥岩	7.40	3.80	3.30	58
126	36	2区		S K I	磨石	砂岩	6.80	3.95	2.80	880
127	30	1区		S K I	凹石	泥岩	16.00	7.85	6.00	187
128	31	1区		S K I	凹石	安山岩	10.60	6.15	5.80	232
129	38	2区		S K I	凹石	闊灰岩	9.60	8.40	5.20	一括 75
130	32	1区		S K I	台石片	安山岩	9.10	8.60	9.85	209
131	46	1区		S K I	輕石加工品	輕石	10.85	6.75	5.50	184
132	47	1区		S K I	輕石加工品	輕石	5.75	5.65	2.90	一括 36
191	1	0区		D D I	打製石器	頁岩	4.45	1.70	1.00	一括 41
192	3	0区		D D I	扁平打製石斧	頁岩	15.80	6.60	2.50	591
193	4	0区		D D I	扁平打製石斧	頁岩	13.70	9.30	1.50	799
194	11	0区		D D I	敲石	安山岩	9.70	9.20	6.65	791
195	10	0区		D D I	敲石	砂岩	10.50	6.30	4.70	759
196	9	0区		D D I	敲石	砂岩	7.70	5.00	3.40	561
197	8	0区		D D I	敲石	安山岩	8.70	7.25	3.90	458
198	16	0区		D D I	凹石	安山岩	10.40	8.85	5.85	815
199	17	0区		D D I	凹石片	安山岩	11.15	9.00	3.70	588
200	13	0区		D D I	凹石	安山岩	9.70	6.80	5.50	601
201	14	0区		D D I	凹石	安山岩	9.90	8.30	4.90	608
202	15	0区		D D I	凹石	安山岩	9.75	7.15	4.55	742
203	18	0区		D D I	凹石・陽石	安山岩	19.75	8.30	6.50	837
204	23	0区		D D I	台石	闊灰岩	19.50	21.70	7.50	862
205	22	0区		D D I	台石	安山岩	16.30	15.45	3.05	856
206	19	0区		D D I	砥石片	砂岩	9.10	10.00	5.70	820
207	21	0区		D D I	石鐵片	泥岩	3.75	10.20	3.20	775
208	追加 1025	0区		D D I	輕石加工品	輕石	3.3	0.9	0.9	501
209	42	0区		D D I	輕石加工品	輕石	6.80	3.70	2.20	一括 1
210	40	0区		D D I	輕石加工品	輕石	8.40	5.80	3.80	644
211	41	0区		D D I	輕石加工品	輕石	7.80	5.50	3.30	一括 31
212	44	0区		D D I	輕石加工品	輕石	9.40	5.90	5.10	678
213	45	0区		D D I	輕石加工品	輕石	14.10	11.35	6.20	790
270	2	0区	8		橫刃型石器	頁岩	6.30	3.50	0.85	384
271	34	2区	8		周邊加工石器	頁岩	6.20	2.30	0.90	一括 90
272	35	2区	8		扁平打製石斧	頁岩	9.15	7.80	1.65	一括 100
273	24	1区	8		扁平打製石斧	頁岩	12.20	6.30	1.60	122
274	25	1区	8		扁平打製石斧	頁岩	10.75	5.70	1.95	一括 107
275	5	0区	8		磨製石器片	砂岩	7.20	6.50	3.00	一括 45
276	6	0区	8		敲石	安山岩	18.40	9.50	4.90	359
277	12	0区	8		敲石	安山岩	15.20	7.65	4.65	一括 57
278	37	2区	8		磨石	砂岩	13.05	7.55	5.30	一括 95
279	7	0区	8		敲石	頁岩	9.55	5.00	3.90	379
280	26	1区	8		敲石	安山岩	8.00	4.35	3.80	92
281	27	1区	8		敲石	頁岩	9.25	3.50	2.55	83
282	29	1区	8		凹石	安山岩	9.40	6.55	6.80	79
283	39	2区	8		砥石	砂岩	11.85	10.80	3.10	一括 104
284	20	0区	8		砥石片	頁岩	11.30	2.20	2.40	一括 50
285	43	0区	8		輕石加工品	輕石	16.00	14.90	4.40	366
286	49	2区	8		輕石加工品	輕石	10.45	4.65	2.20	877
287	50	2区	8		輕石加工品	輕石	7.60	7.15	3.60	一括 92

第4章 総括

第1節 紫コラ火山灰直下の畠跡

指宿市内では、およそ120箇所の遺跡が知られているが、そのうち4つの遺跡で紫コラ火山灰による被災痕跡を確認している。今回の宮之前遺跡の発掘調査では、0区において紫コラ火山灰直下から畠跡が検出されており、市内における最北の火山災害遺跡の検出例となった。

下山は火山災害遺跡の構造や背景にある社会復元研究にも取り組み（下山1997）、遺跡の発掘調査から得られた情報の蓄積から、災害の発生因子と加害因子を検討している。下山は、開聞岳噴火を発生因子とした場合、加害因子はテフラ降下による「付着、加圧、埋積」と、テフラ堆積後の「硬化」、噴火後の降雨によって起こった「土石流」をあげている。

そして、上記の加害状況を遺跡ごとに比較し、災害範囲をa～eに区分した（図82）。エリアaは「開聞岳周辺で火碎流などの「災害」が発生したと考えられる地域」、エリアbは「揖宿郡・頴娃郡に相当し、橋牟礼川遺跡が含まれる壊滅的な地域」、エリアcは「薩摩半島南部、および大隅半島中部が相当する壊滅的ではないが直接的に影響があった地域」、エリアdは「間接的な影響のあった地域で薩摩国、大隅国が該当」、エリアeは「影響のなかった地域」である。

これによると、宮之前遺跡は、エリアcに該当しているが、過去の調査では明確な遺構の検出事例はなかった。今回の畠跡の検出は、調査範囲が狭いため、耕作域の規模などは明らかにし得ないが、周囲には畠跡および居住域が広がっているものと予想する。ここでは、過去に検出された畠跡と比較し、9世紀代における揖宿郡の耕作地利用について考察したい。

（1）慶固遺跡

指宿市山川岡児ヶ水慶固に所在し、開聞岳から東へ約5.0kmの場所に位置する。遺跡は標高約40mの地点で発見され、開聞岳から最も近い火山災害遺跡として知られる。

2006年に文部科学省科学研究費特定領域研究「火山災害罹災地における自然・生活環境の復元」研究の一環として、開聞岳噴出物の堆積状況を調査するために山川・

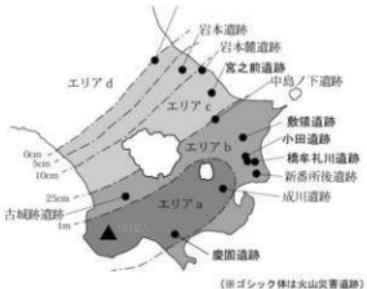


図82 874年の火山災害範囲

開聞地区でボーリング調査が実施された。調査に伴い、岡児ヶ水地区で開聞岳噴出物の堆積状況を確認できる露頭を探している際に、土取り作業により露出していた旧地表面の断面に波状の凹凸が確認された（図83）。これが畠跡であり、約1.5～3.0mと幅の広い畠をもつ畠の断面だった（渡部ほか編2007）。畠の土壤を自然科学分析した結果、畠で作られていた作物はイネ科以外のものであることがわかったが、詳細な種類までは特定されていない。出土遺物はなかった。周辺には災害時に畠を営んだ集落があると考えられる。

（2）橋牟礼川遺跡

5層の直下から検出した畠跡は、第84図のとおり、畠頭20条と、その間の畠間からなる。畠の幅（畠間の下端間に計測）は、概ね1.2m～1.5m程度を測り、畠の高さは畠間の底を起点とした場合に、20cm程度を測る。畠の断面は、かまぼこ状になるものや畠頭がほぼ平坦になるものがある。畠の方向は、ほぼ西南西から東北東である。

畠間の幅は、約90cm程度を測り、端部にピット状の浅い窓みを有するものもある。畠の長さは、検出した範囲では、6～7mを測る。調査区外へも伸びているため、1条の畠の長さがどの程度になるかはわからない。調査区の南端の範囲では、明確な畠は見られなかったが、旧地形の上面には浅い凹凸が見られた。調査区外の南側の支線道路において、同年、下水道敷設に伴う発掘調査



島の歓跡 断面写真

島の歓跡 検出写真

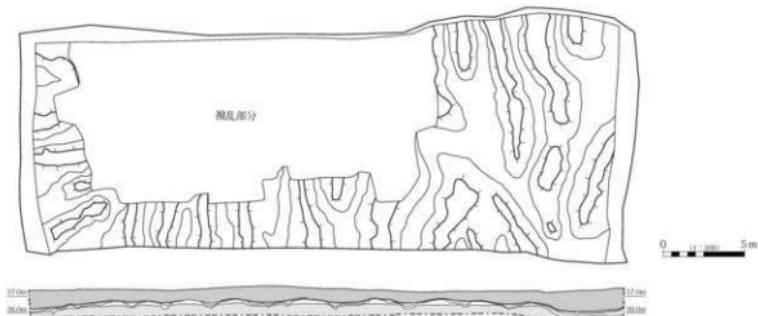


図 83 慶固遺跡の島跡

が行われており、その際、トレンチからは歓の検出は見られなかったため、874年3月25日時点では、調査区南端が、畠地の境界付近である可能性もある。

なお、歓間には、874年の噴火で最初に降ってきた火山礫が堆積しており、歓頭ほど、その堆積が薄い状況が看取された。これは、火山躍降下後、歓間に流れ込んだものもあるためと考えられる。

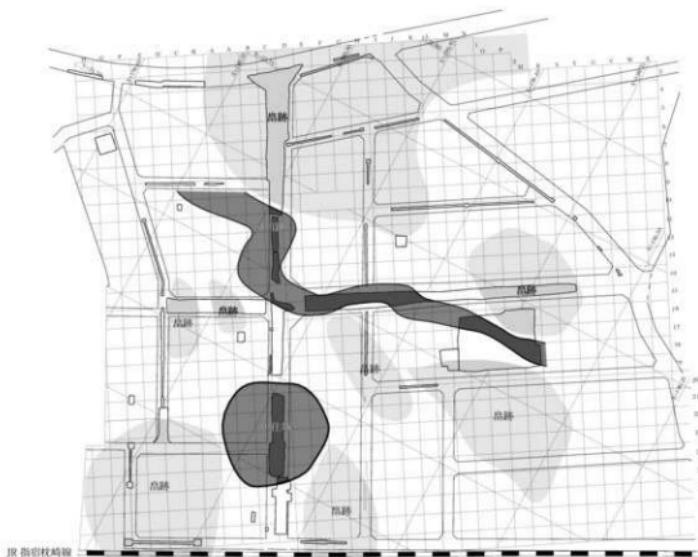
(3) 宮之前遺跡との比較

指宿市内における874年段階の畠跡について、慶固遺跡と橋牟礼川遺跡の事例をもとにその特徴を整理した。それによると、慶固遺跡の歓幅は1.5～3.0m、橋牟礼川遺跡の歓幅は1.2～1.5m、宮之前遺跡の歓幅は0.5～1.0mを測り、遺跡ごとで差異があることがわかる。この差異の要因として、栽培植物の違いや耕作可能面積に左右される場合もあったことが想定できる。また、宮之前遺跡においても、歓間溝には薄く火山礫が堆積し

ていることから、他遺跡同様、当初歓頭に堆積した火山礫が流されて歓間に堆積したものと判断できる。つまり、エリアc「薩摩半島南部、および大隅半島中部が相当する壊滅的ではないが直接的に影響があった地域」内においても、火山噴火当初の火山礫が飛来したことが考えられる。今後は栽培植物の内容についても自然科学的な分析を踏まえて、耕作方法の違いや季節性なども検討する必要がある。

第2節 古墳時代の軽石製品について

宮之前遺跡では、古墳時代の包含層から細かい線刻が施された軽石製品が出土している（遺物番号286）。a面とb面では異なる線刻が施されており、a面と比べてb面は全体的に研磨されており、平坦面を持つ。a面の線刻を観察すると、男性器を表現したようにみえることから、県内の状況を整理してみたい。



紫コラ火山灰降下時の遺構配置図



埋没した崩跡断面写真

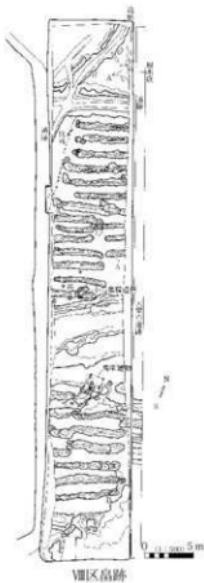


図 84 橋牟礼川遺跡において紫コラ火山灰で埋没した畠跡

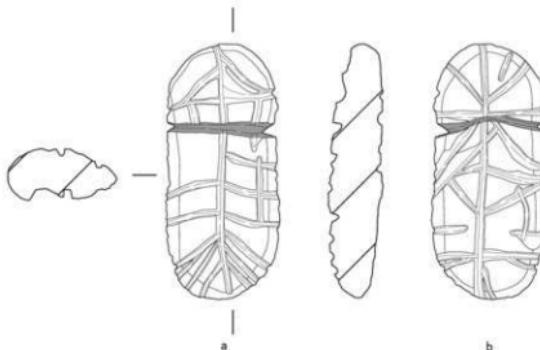


図 85 軽石製品を横断する凹線

生殖器として判断した理由に、a面、b面を横断する凹線がくびれ状に深く刻まれていること（図85のアミカケ部分）、両面を横断する凹線はこの一本のみであること、a面上方の表現が、陰茎から亀頭を表現しているように見えることなどがあげられる。

あくまでも推定に過ぎないが、南さつま市上加世田遺跡においても同様の表現が見えることから、縄文時代後・晚期と古墳時代後期という時間的ヒアタスはあるが、検討材料の一つとして参考になる。b面については、縱方向の直線と斜線を基調とした幾何学文が線刻されている。

また、軽石製品を縦断する直線（中心線）は、a面、b面いずれも認められ、若干の違いはあるが、中心線でほぼ線対照となる。ただし、中心線は軽石製品の上端下端で接続はしていないため、連続した線にはなっておらず、個別で線刻されたものと考えられる。

鹿児島県における生殖器信仰を検討した池畠耕一によると、「鹿児島県の生殖器信仰は縄文時代前期（加栗山・上焼田）」に始まり、後・晚期には大竜小学校遺跡・上加世田遺跡などで大がかりに生殖器の形態を使った祭祀が行られている。弥生時代になっても、中期の入来遺跡・山ノ口遺跡などで依然として行われており、後期あるいは終末期と思われる釘田遺跡でも出土例が知られている。古墳時代になると土偶・石偶・石棒といった類は消失するが、岩偶の退化したもの、あるいは面の元形と思われる軽石製の顔面が見られる。」（池畠 1979）とある。

宮之前遺跡から出土した上記軽石製品の年代的位置づけについては、同一層位から出土した遺物の帰属時期などから、古墳時代後期であると判断できる。そのため、本資料は、数少ない古墳時代の軽石製品の一つと位置づけられる。

【文献】

池畠耕一 1979 「鹿児島県における生殖器信仰の系譜－考古学を中心に－」『隼人文化』第4号

写 真 図 版



上段：上空から見た宮之前遺跡（奥に魚見浜と知林ヶ島） 下段：O区調査風景（奥のビニールハウスが組教委が調査した第5地点）



上段：1区5号墓上面 遺物出土状況（西から） 下段：1区5号墓上面 遺物出土状況（北から）



上段：1區開元通寶出土狀況 下段：1區北壁龜鵝火山西



上段左：2区遺物出土状況（東から） 上段右：2区薪コラ上面検出状況（東から） 下段：2区遺物出土状況（西から）



1段目左：P4 埋土断面 1段目右：P2 完掘 2段目左：P6 埋土断面 2段目右：P1 埋土断面 3段目左：P3 完掘 3段目右：P5 完掘 4段目左：P4 完掘 4段目右：P1 完掘



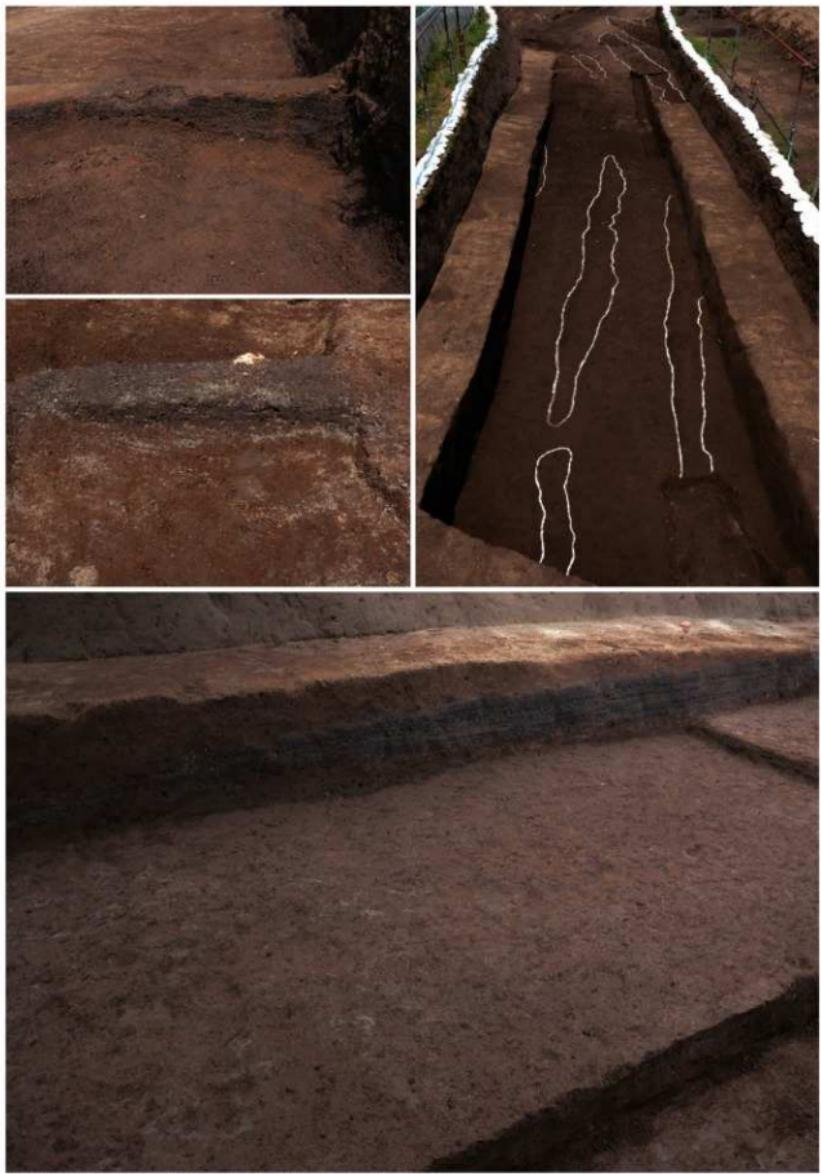
上段：018.6 墓上面崩落検出（南から） 下段：018.6 墓上面崩落検出（北から）



上段左：0区苗跡（南から） 上段右上：苗跡最開遺物出土状況 上段右下：最開繩コラ火山灰堆積状況 下段：0区苗跡（南から）



上段：0区6号橋上面北側歩道橋出（南から） 下段：0区6号橋上面北側歩道橋カラ堆積状況（南から）



上段左：O 区道路（北侧）側沟槽堆積狀況 上段右：O 区道路完闢 下段：省道上表面檢出狀況



上段：0区土器集中出土物出土状況（南から） 下段：0区土器集中出土物出土状況（南東から）



上段：1区 SK1 西側遺物出土状況（北から） 下段左上：1区 SK1 遺物出土状況（西から） 下段左下：1区 SK1 下層遺物出土状況（西から） 下段右：1区 完掘



上段：SK I 遺物出土状況（西から） 下段：SK I 遺物出土状況（東から）



左：1区西壁土崩オルソ画像 右：1区南壁土崩オルソ画像



左：2区南壁土層オルゾ画像 右：1区北壁土層オルゾ画像





左：O区東壁土層オルゾ画像 右：O区南壁土層オルゾ画像



7



27



38



39



40



49



51



90



92



100



101



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



117



119



114 (表)



114 (裏)



114 (内面)



121



116



122



166



177



178



180



183



19



18



17



16



15



14



13



12



11



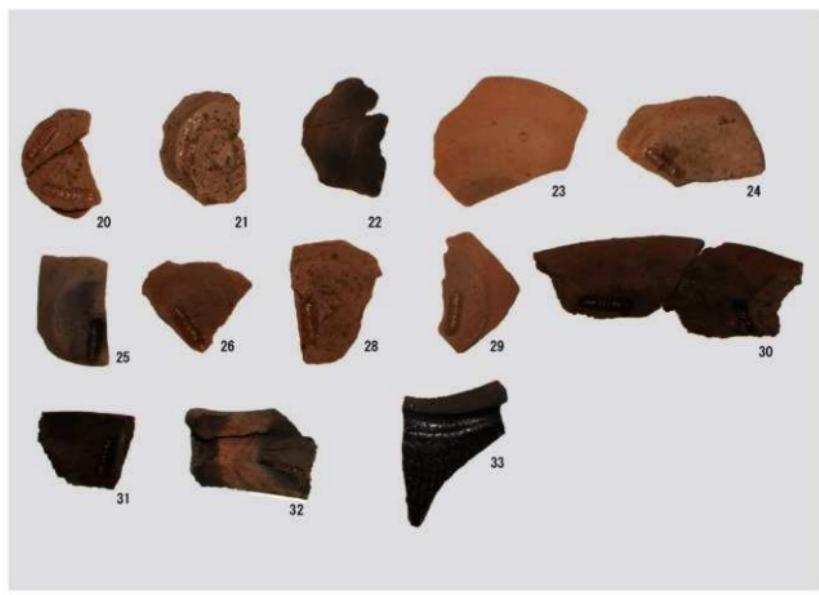
10



9



8









286



286



78



208



192



193



194



195



196



197



198



199



200



201



報告書抄録

ふりがな	みやのまえいせき							
書名	宮之前遺跡							
副書名	農村地域防災減災事業（農村災害）指宿地区宮之前避難路建設に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	松崎大嗣・上田洋子・中摩浩太郎							
編集機関	指宿市教育委員会歴史文化課							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290番地 時遊館COCCOはしむれ内							
発行年月日	令和4年(2022)3月10日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査起因
宮之前遺跡	指宿市西方	市町村 46210	遺跡番号 210-21	31°27'	130°61'	平成30年7月11日 ～10月30日	439m ²	農村地域防災減災事業（農村災害） 指宿地区宮之前避難路
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
宮之前遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代		墓 土器集中 土坑		土師器 須恵器 成川式土器 軽石製品 石器 鉄製品 開元通宝		

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 67 集

農村地域防災減災事業（農村灾害）
指宿地区宮之前避難路建設に伴う発掘調査報告書

宮之前遺跡

令和4（2022）年3月

発行
指宿市教育委員会
鹿児島県指宿市十二町 2290 番地
TEL 0993-23-5100

印刷所
潤上印刷株式会社
鹿児島市南栄3丁目1-6
TEL 099-268-1002

